

多賀城市内の遺跡 2

—令和3年度ほか発掘調査報告書—

新田遺跡 山王遺跡 市川橋遺跡

高崎遺跡 野田遺跡 小沢原遺跡

留ヶ谷遺跡 東田中窪前遺跡

令和4年3月

多賀城市教育委員会

序 文

多賀城市内には特別史跡多賀城跡附寺跡をはじめ、周知の埋蔵文化財包蔵地が多数所在し、それらは市域の約3割にも及んでおります。これらの貴重な「文化遺産」を後世に伝えていくことは我々の重要な責務であります。

近年は、西部地区を中心に宅地造成工事や個人住宅建築工事などによる発掘調査件数が増加傾向にありますが、当教育委員会としても開発事業との円滑な調整を図りつつ、国民共有の歴史的財産である埋蔵文化財を適切に保護し、活用に努めているところです。

本書は、令和2年度と令和3年度に国庫補助事業として実施した個人住宅建築等に伴う27件の発掘調査の成果を収録したものです。その中で、市川橋遺跡では、多賀城南面に広がる方格地割を形成する東1道路西側溝を確認しました。また、山王遺跡では古代の区画溝の他、中世の井戸等を発見し、生活の実態に迫る成果が得られました。

いずれの調査も、規模としては大きなものではありませんが、これらひとつひとつの成果を積み重ねていくことが、本市の新たな歴史の解明につながるものと確信しております。

最後になりましたが、発掘調査に際し、御理解と御協力をいただきました地権者の皆様をはじめ関係各位に対し、心より感謝申し上げ、挨拶いたします。

令和4年3月

多賀城市教育委員会
教育長 麻生川 敦

例　　言

- 1 本書は、国庫補助事業による令和2年度に実施した発掘調査5件と、令和3年度に実施した発掘調査22件の成果をまとめたものである。
- 2 遺構の番号は、各遺跡とも第1次調査からの通し番号である。
- 3 平成14年4月1日の測量法の改正に従い、本書では経緯度の基準を世界測地系で表示している。また、本書で報告している調査では、平成23年3月11日の東日本大震災以降に測量した座標を用いているが、震災以前の座標値と整合させるために、再測量の成果に基づき、震災以前に行った調査については東に約3m、南に約1mの補正をかけている。
- 4 掘図中の高さは、標高値を示している。
- 5 土色は、『新版標準土色帖』(小山・竹原：1996)を参考にした。
- 6 執筆担当は、下記のとおりである。図版作成等は各執筆担当者と遺物整理員が行った。また、遺物の写真撮影は各執筆担当者が行い、本書の編集は丹野修太が行った。
V：赤澤靖章　II・XX：大木丈夫　I・IV・VII・VIII・IX・XII・XIII・XIV・XV・XXIV・XXV・XXVI：
丹野修太　III・VI・XVI・XVII・XXII：小原駿平　XI・XVIII・XXIII・XXVII：桑折肇　X・XXI・XXVII：高橋伶奈
- 7 調査に関する諸記録及び出土遺物は、すべて多賀城市教育委員会が保管している。

目　　次

I	遺跡の地理的・歴史的環境	1	XVII	山王遺跡第228次調査	75
II	山王遺跡第226次調査	3	XIX	山王遺跡第229次調査	86
III	高崎遺跡第127次調査	17	XX	山王遺跡第230次調査	93
IV	東田中産前遺跡第9次調査	18	XXI	山王遺跡第231次調査	98
V	小沢原遺跡第21次調査	19	XXII	山王遺跡第232次調査	103
VI	留ヶ谷遺跡第10次調査	20	XXIII	山王遺跡第234次調査	109
VII	新田遺跡第151次調査	21	XXIV	山王遺跡第235次調査	112
VIII	新田遺跡第152次調査	21	XXV	山王遺跡第237次調査	113
IX	新田遺跡第153次調査	21	XXVI	市川橋遺跡第101次調査	114
X	新田遺跡第154次調査	29	XXVII	高崎遺跡第129次調査	122
XI	新田遺跡第155次調査	34	XXVIII	野田遺跡第6次調査	123
XII	新田遺跡第157次調査	41			
XIII	新田遺跡第158次調査	46			
XIV	新田遺跡第159次調査	49			
XV	新田遺跡第161次調査	52			
XVI	山王遺跡第225次調査	53			
XVII	山王遺跡第227次調査	63			

調査要項

- 1 調査主体 多賀城市教育委員会 教育長 麻生川敦
- 2 調査担当 多賀城市埋蔵文化財調査センター 所長 伊藤文昭
- 3 調査担当者
副主幹 赤澤靖章 斎藤健（～R3.3）
研究員 大木丈夫 丹野修太
技師 小原駿平 桑折肇 高橋伶奈
調査員 佐藤則之 金子かおる 大友二重 神山晶子 佐々木瑠美
- 4 調査従事者
令和2年度（多賀城市会計年度任用職員）
阿部清次 安藤美喜子 伊藤幸夫 内田節子 内田正樹 大塚芳弘 大友文夫
奥山妙子 岡澤一清 糸川良谷 加藤勝二 門脇公貴 門脇公貴 叶内正悦
工藤正好 桑折一博 佐々木久志 佐々木啓太 佐々木正則 佐々木勉
佐藤長次 佐藤道子 佐藤弥悦 菅原富次男 菅原正義 清水泰昌 鈴木真由美
鈴木優子 関内久子 瀬戸口弘行 瀬谷良雄 竹本裕昭 但野順子 千葉辰子
土佐実 中村宣之 煙山眞次 古瀬律子 幕田裕子 村上喜代中 山田信治
横山和雄
令和3年度（公益社団法人 多賀城市シルバー人材センター）
渥美静香 阿部純一 阿部信夫 石堂紀 板橋仁志 内海かつ子 鵜沼静夫
江口文夫 梶井敏弘 菅ひふみ 菊田忠 熊谷洋一 小林伸一 小堀内功
斎藤義治 斎藤恵子 佐藤良雄 高橋秀一 千葉良二 土居文彦 中野鉄正
長谷川誠 平塚訓章 平塚武慶 福原寛 松島征昭 三浦義昭 山田佐男
横田隆昭 吉田邦勝
- 5 整理従事者 有路尚子 石垣玲子 浦山紀以子 奥田美雪 菊池あかね 佐々木直美
佐々木宣子 佐藤ゆかり 高橋明子（～R3.3） 千葉貴久江 千葉都美
長瀬真貴子 秦千尋 堀川紀子 宮城ひとみ

調査一覧

令和2年度

No.	遺跡名	所在地	調査期間	調査面積	調査担当者
1	山王遺跡第226次	多賀城市南宮字町61番	令和2年11月30日～12月25日	83.2 m ²	大木 童謡
2	高崎遺跡第127次	多賀城市高崎二丁目144-3	令和2年12月9日～12月25日	23.6 m ²	小原
3	東田中塙前遺跡第9次	多賀城市東田中一丁目283-2	令和2年12月9日～12月25日	18.8 m ²	丹野
4	小沢原遺跡第21次	多賀城市浮島二丁目319番1、341番、349番1、351番1	令和2年11月30日～12月25日	239 m ²	赤澤 桑折
5	留ヶ谷遺跡第10次	多賀城市留ヶ谷一丁目330番13	令和2年12月7日～12月8日	88 m ²	小原

令和3年度

No.	遺跡名	所在地	調査期間	調査面積	調査担当者
6	新田遺跡第151次	多賀城市南宮字一里塙101番1の各一部	令和3年4月12日～6月1日	65.5 m ²	丹野 佐々木
7	新田遺跡第152次	多賀城市南宮字一里塙101番1の各一部	令和3年4月12日～6月1日	61.6 m ²	丹野 佐々木
8	新田遺跡第153次	多賀城市南宮字一里塙101番1の各一部	令和3年4月12日～6月1日	54.2 m ²	丹野 佐々木
9	新田遺跡第154次	多賀城市新田字後104、105番1	令和3年4月13日～5月7日	200 m ²	高橋 佐藤
10	新田遺跡第155次	多賀城市南宮字一里塙81-1、102-1、104-4、75-2、79-1 南宮字庚申294、293-5	令和3年4月12日～6月3日	200 m ²	赤澤 桑折
11	新田遺跡第157次	多賀城市新田字後16番7	令和3年9月15日～10月19日	56.4 m ²	丹野
12	新田遺跡第158次	多賀城市南宮字庚申228番、298番	令和3年10月20日～11月30日	50.4 m ²	丹野
13	新田遺跡第159次	多賀城市南宮字庚申295番1、299番	令和3年10月20日～11月30日	62.9 m ²	丹野
14	新田遺跡第161次	多賀城市新田字六歳5番地2、5番地 16、7番地1、7番地2	令和3年12月22日	16 m ²	丹野
15	山王遺跡第225次	多賀城市南宮字町81番14	令和3年4月13日～5月11日	159 m ²	小原 金子
16	山王遺跡第227次	多賀城市山王字西山王8番1	令和3年5月28日～7月1日	119 m ²	小原 金子 大友
17	山王遺跡第228次	多賀城市南宮字町77番1	令和3年6月8日～7月19日	233 m ²	赤澤 桑折
18	山王遺跡第229次	多賀城市南宮字町77番1、77番2、77番3	令和3年7月28日～9月7日	1209 m ²	赤澤 桑折
19	山王遺跡第230次	多賀城市南宮字町81番16、字伊勢202番12	令和3年7月20日～9月22日	145 m ²	大木 金子 大友
20	山王遺跡第231次	多賀城市南宮字町81番15、字伊勢202番4	令和3年7月20日～9月22日	50 m ²	高橋 神山
21	山王遺跡第232次	多賀城市南宮字伊勢207番2	令和3年10月5日～10月22日	30 m ²	小原 金子 大友
22	山王遺跡第234次	多賀城市山王字山王二区144番地	令和3年10月18日～11月2日	170 m ²	赤澤 桑折
23	山王遺跡第235次	多賀城市南宮字町92番	令和3年11月19日	26.7 m ²	丹野
24	山王遺跡第237次	多賀城市南宮字八幡地内	令和4年2月8日～2月9日	45.9 m ²	高橋 神山
25	市川橋遺跡第101次	多賀城市城南二丁目6-9	令和3年7月26日～9月8日	59.2 m ²	丹野 佐々木
26	高崎遺跡第129次	多賀城市高崎二丁目135番7、139番 4、541番	令和3年9月27日～10月6日	28.5 m ²	赤澤 桑折 高橋 佐藤 神山
27	野田遺跡第6次	多賀城市留ヶ谷二丁目87番地 他14筆	令和3年6月15日～8月13日	1600 m ²	高橋 佐藤 神山

凡 例

- 1 本書で使用した遺構の略称は、次のとおりである。
S A : 柱列跡 S B : 据立柱建物跡 S D : 溝跡 S I : 壁穴建物跡 S K : 土坑
Pit : 柱穴及び小穴 S X : その他の遺構
- 2 奈良・平安時代の土器の分類記号は「市川橋遺跡－城南土地区画整理事業に係る発掘調査報告書II」(多賀城市教育委員会 2003) に従った。詳細は下記のとおりである。
 - (1) 土師器坏
A類 : ロクロ調整を行わないもの
B類 : ロクロ調整を行ったもの
 - B I類 : ロクロからの切り離し後、回転ヘラケズリされたもの
 - B II類 : ロクロからの切り離し後、手持ちヘラケズリされたもの
 - B III類 : ロクロからの切り離しがヘラ切りで、再調整されないもの
 - B IV類 : ロクロからの切り離しが静止糸切りで、再調整されないもの
 - B V類 : ロクロからの切り離しが回転糸切りで、再調整されないもの
 - B I・B II類では、ロクロからの切り離しが識別できる資料があり、ヘラ切りによるものをa、静止糸切りによるものをb、回転糸切りによるものをcとして細分する
 - (2) 土師器甕
 - A類 : ロクロ調整を行わないもの
B類 : ロクロ調整を行ったもの
 - (3) 須恵器坏
I類 : ロクロからの切り離し後、回転ヘラケズリされたもの
II類 : ロクロからの切り離し後、手持ちヘラケズリされたもの
III類 : ロクロからの切り離しがヘラ切りで、再調整されないもの
IV類 : ロクロからの切り離しが静止糸切りで、再調整されないもの
V類 : ロクロからの切り離しが回転糸切りで、再調整されないもの
I・II類では、ロクロからの切り離しが識別できる資料があり、ヘラ切りによるものをa、静止糸切りによるものをb、回転糸切りによるものをcとして細分する。
- 3 瓦の分類は「多賀城跡 政府跡 図録編」(宮城県多賀城跡調査研究所 1980)、「多賀城跡 政府跡 本文編」(宮城県多賀城跡調査研究所 1982) の分類基準に従った。
- 4 本文中の「灰白色火山灰」の年代については、伐採年代が907年とされた秋田県払田柵跡外郭線C期存続中に降灰し、承平4年(934年)閏正月15日に焼失した陸奥国分寺七重塔の焼土層に覆われていることから、907～934年の間とする考え(宮城県多賀城跡調査研究所『宮城県多賀城跡調査研究年報1997』1998)と、『扶桑略記』延喜15年(915年)7月13日条にある「出羽国言上雨灰高二寸諸郷桑枯損之由」の記事に結びつけ915年とする考えがある(町田洋「火山灰とテフラ」『日本第四紀地図』1987、阿子島功・壇原徹「東北地方、10C頃の降下火山灰について」『中川久夫教授退官記念地質学論文集』1991)。当市教育委員会では考古学的な見解を重視し、前者の年代観に従っている。

I 遺跡の地理的・歴史的環境

多賀城市の地形は、中央部を北西から南東方向に貫流する砂押川を境に、東側の丘陵部と西側の沖積地に二分される。丘陵部は、松島・塩釜方面から延びる標高40～70mの低丘陵であり、南西に向かって枝状に延びている。沖積地と接する付近では、谷状の地形を形成しており、緩やかではあるが起伏に富んだ様相をみせる。沖積地は、仙台平野の北東部に相当する。仙台市岩切方面から東に向かう県道泉・塩釜線沿いには、標高5～6mの微高地が延びており、その北側には低湿地が広がっている。一方、南側には大小の微高地や低湿地、旧河道などがあり、海岸に近い場所では浜堤列も確認できる。

市内には、40を超える遺跡が所在している。西側の沖積地から丘陵部の西端にかけては、新田・山王・市川橋・高崎・西沢遺跡など市内でも有数の規模をもつ遺跡が隣接して分布している。これらの遺跡で発見された遺構や遺物には、陸奥国府が置かれた多賀城と密接に関わるものが多く認められ、この時期に限ってみれば一連の遺跡群と捉えることができる。一方、南東部には海岸線沿いの浜堤上に八幡沖遺跡、浜堤から丘陵にかけては大代貝塚や大代横穴墓群、柏木遺跡などが所在している。

新田遺跡は、標高5～6mの微高地に立地し、その範囲は東西約0.8km、南北約1.6kmである。縄文時代から中世にかけての遺跡として知られているが、特に中世では大小の溝で区画された屋敷跡が多数発見されている。このうち、寿福寺地区では12世紀後半から16世紀にかけて連続して屋敷群が形成されていたことが明らかとなり、出土遺物から上級武士の屋敷と考えられている。

山王遺跡は、標高3～4mの微高地に立地し、その範囲は東西約2km、南北約1kmである。これまで弥生時代中期頃の水田跡や古墳時代中期～後期の集落跡、古代の方格地割、中世の屋敷跡などが発見されている。このうち、古代の方格地割は南北大路と東西大路の二つの幹線道路を基準とし、東西・南北の直線道路によっておよそ1町四方の区画を造成したものである。これによって形成されたまち並みからは、上級役人の邸宅や中・下級役人の住まいである建物跡や井戸跡などが多数発見されている。

市川橋遺跡は、標高2～3mの沖積地に立地し、その範囲は東西約1.4km、南北約1.6kmである。多賀城南面の広い範囲を占めており、山王遺跡と同様に古代の方格地割に基づくまち並みが形成されている。

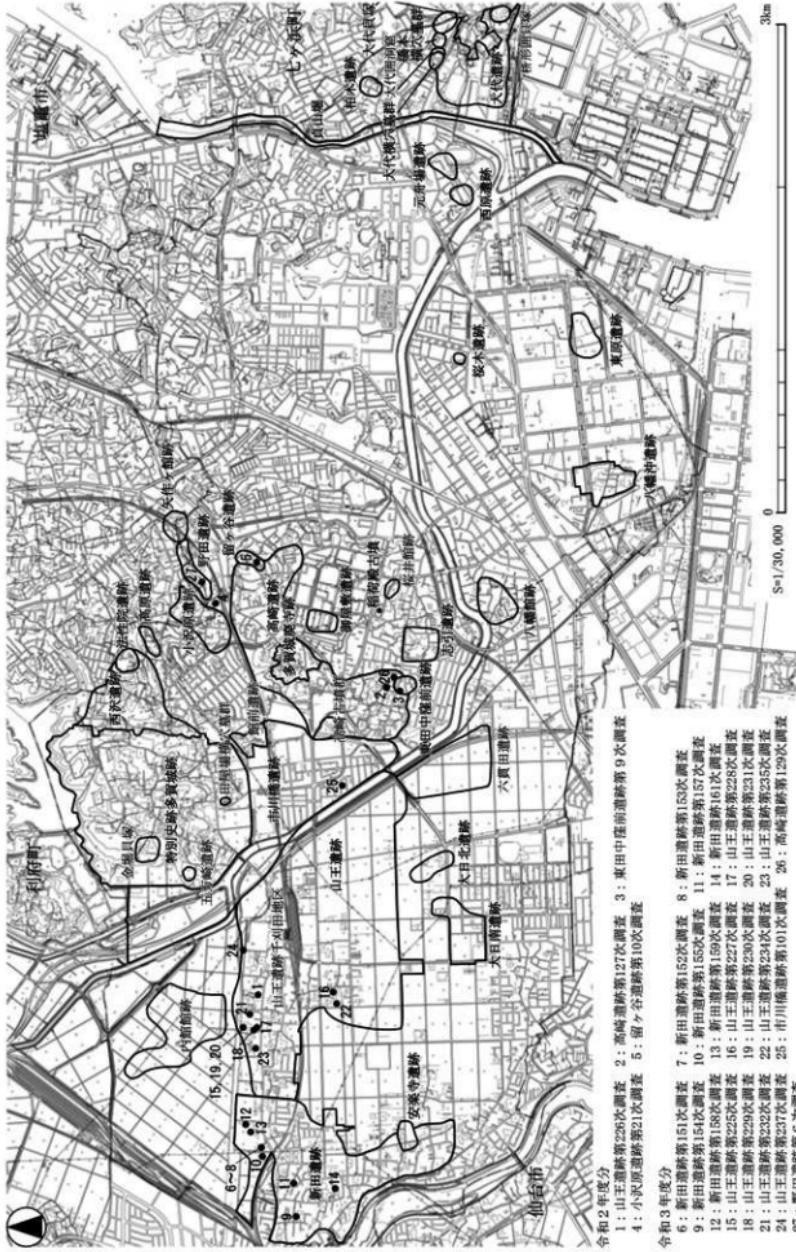
高崎遺跡は、低丘陵の西端部に立地し、その範囲は東西約1.3km、南北約1kmである。これまで、古墳時代から近世までの遺構・遺物が発見されている。古代では、多賀城廐寺跡の西側で約60軒の竪穴建物跡や掘立柱建物跡、井戸跡などが発見されている。また、井戸尻地区では大量の灯明皿が一括埋棄された状況で発見され、周辺で万灯会のような仏教儀式が執り行われていたと考えられている。

東田中庭前遺跡は、高崎遺跡の南端部に隣接している。南側300m付近を砂押川が東流しており、その西側には仙台平野が開けている。これまでの調査では、遺跡中央付近で実施した第1次調査で布堀りを施した柱列跡や溝跡、北端部で実施した第2次調査で竪穴建物跡3軒をはじめ溝跡や土坑が発見されている。

留ヶ谷遺跡は、古代から中世までの複合遺跡で、特に中世から近世の遺構・遺物が多く発見されている。これまでの調査では、平場とそれに伴う掘立柱建物跡、柱列跡、土壙跡、溝跡、土坑、柱穴を検出している。土壙や平場は中世の館跡に伴うものと考えられている。

小沢原遺跡は、多賀城市北部の標高10～23mの低丘陵に立地し、その範囲は東西・南北ともに約400mである。これまでの発掘調査では、竪穴建物跡、掘立柱建物跡、溝跡、土器埋設遺構などいずれも平安時代を中心とした遺構・遺物を発見している。

野田遺跡は、多賀城市北部の標高10～23mの低丘陵に立地し、その範囲は東西400m、南北90mである。これまでの調査では、古代の竪穴建物跡、溝跡、土坑を発見している。



第1図 調査地点の位置

卷之三

令和2年度分

1: 山王消灭第226次調查 2: 高崎清跡第127次調查

小波圖像復原方法研究 5· 利用小波路徑第10次復原

卷之三

令和3年度分

卷之三

新田道時第151次調査：利田通野第192次調査

新田道跡第15次調査

12：新田道跡第158次調査 13：新田道跡第159次調査

15：山王道跡第225次調查 16：山王道跡第227次調查

18：山王遺跡第229次調查 19：山王遺跡第230次調查

21: 山王遺跡第22號水道

西王平遺跡第237次調査報告書

計：山王道町4700、六角町20；中川清道町2101次到
227；新田道町第6水道本

卷之三

II 山王遺跡第 226 次調査

1 調査に至る経緯と経過

本件は南宮宇町地内における個人住宅新築工事に伴う
本發掘調査である（第1図）。

令和2年7月28日、地権者から当該事業と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。計画では、地盤改良工事として宅地部分30箇所に、現地表から深さ4mまで柱状改良杭を打ち込むというものである。

当該地近隣では、平成24年度に第103次調査と第106次調査を実施し、現地表面から深さ60～70cmで古代から近世の遺構を検出している。このことから、遺跡への影響が懸念されるため、地権者との工法変更による保護協議を行った。しかし、提出された工法以外では十分な地盤強度をえられないと判断されたことから、発掘調査による記録保存を実施することとなった。

令和2年8月21日に、地権者から発掘調査に関する依頼書・承諾書を提出されたことを受け、11月30日より現地調査を開始した。重機で現地表面から約70cmの深さまで掘削し、土砂は調査区外の仮置き場へ搬出をした。翌12月1日から遺構検出作業を行い、約10cmほど掘り下げた層で溝跡などの遺構を検出した。さらに、調査区外周に排水溝を兼ねたトレーナーを設定して土層の確認を行った結果、複数の遺構確認面が存在することが判明した。人力で徐々に掘り下げながら遺構の検出及び掘削、写真撮影、測量を順次進めた。12月24日には遺構の精査作業などや写真撮影、平面図作成作業を終了した。12月25日にテント等の撤去と機材撤収、調査区の埋め戻しを完了し、調査を終了した。

2 調查成果

調査は、既存宅地から分筆する調査対象面積 267.08 m²のうち、住宅建設で遭構面まで影響を受ける 83.22 m²を調査区として設定した。(第 2 図)

(1) 基本層序

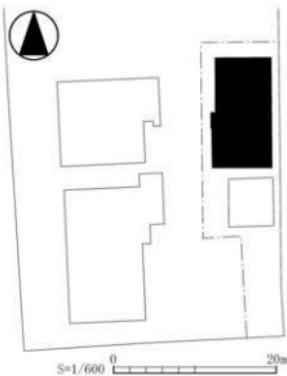
I～III層は近現代の層、IV層は近世末から近代にかけての層、V層は近世の層、VI層は古代の層と考えられる。V層、VI層とも数度整地が行われており、細分できる。(第4、5図)

I 層：現代の盛土層。黒褐色シルト（10YR3/2）。

II a層：灰黃褐色砂質シルト（10YR4/2）。黃褐色砂質シルトブロックを含む盛土層。



第1図 調査区位置図



第2図 調査区配置図

- II b 層：黒褐色シルト（10YR3/2）。ややしまっている。炭化物を多く含む。
- II c 層：暗灰黄色砂質シルト（2.5Y4/2）。黄褐色砂質シルトブロックを多く含む盛土層。
- III 層：黒褐色砂質シルト（2.5Y3/1）。炭化物を多量に含む。明治32年に南宮地区で発生した大火による炭化物と考えられる。
- IV a 層：灰色シルト（7.5Y4/1）。やや粘性有り。しまっている。炭化物と黄褐色ブロックを含む。
- IV b 層：灰黄褐色シルト（10YR4/2）。やや粘性有り。炭化物を少量含む。
- IV c 層：灰黄褐色シルト（10YR4/2）。IV 2層と同質であるが、VI 2層との境に灰黄色の微砂層が堆積している。
- V a 層：黄灰色シルト（2.5Y4/1）。やや粘性有り。炭化物を大量に含む。出土遺物から近世末期の火災で生じた炭化物堆積層と考えられ、以下の層をV層とした。
- V b 層：黒褐色シルト（10YR3/2）。非常にしまっている。上部が酸化している。
- V c 層：黒褐色粘質シルト（10YR3/1）。腐植を含む。
- V d 層：黒褐色シルト（10YR3/1）。炭化物を含む。土師器片や近世陶磁器片を少量含む。
- VI a 層：黒褐色粘質シルト（2.5Y3/1）。しまっている。炭化物を含む。以下、陶磁器を含まず、古代の層と考えられる。
- VI b 層：オリーブ黒色粘質シルト（5Y3/1）。しまっている。青灰色地山ブロック砂を斑状に少量含む。
- VI c 層：灰黄褐色シルト（10YR4/2）。やや粘性有り。しまっている。
- VI d 層：オリーブ黒色シルト（5Y3/1）。しまっている。炭化物を微量に含む。青灰色地山ブロックを含む。
- VI e 層：黒褐色シルト（10YR3/2）。ややしまっている。炭化物を少量含む。青灰色地山ブロックを含む。
- VII 層：にぶい黄褐色砂質土（10YR5/3）。古代の遺構確認面。

（2）発見遺構と遺物

遺構を確認したのは、V層・VI層・VII層上面である。以下、確認した層序ごと述べる。

【VII層上面検出遺構】

P 17（第3、5図）

【位置】調査区の西壁沿いに位置している。

【重複】SD 3035 溝跡より新しい。

【方向・規模】検出した範囲では、径約0.6mで、深さ約10cmの規模である。

【遺物・年代】土師器の坏片が出土しているが、正確な年代は不明。

P 18（第3、4、5図）

【位置】調査区の南壁沿いに位置している。

【重複】SD 3034 溝跡より古い。

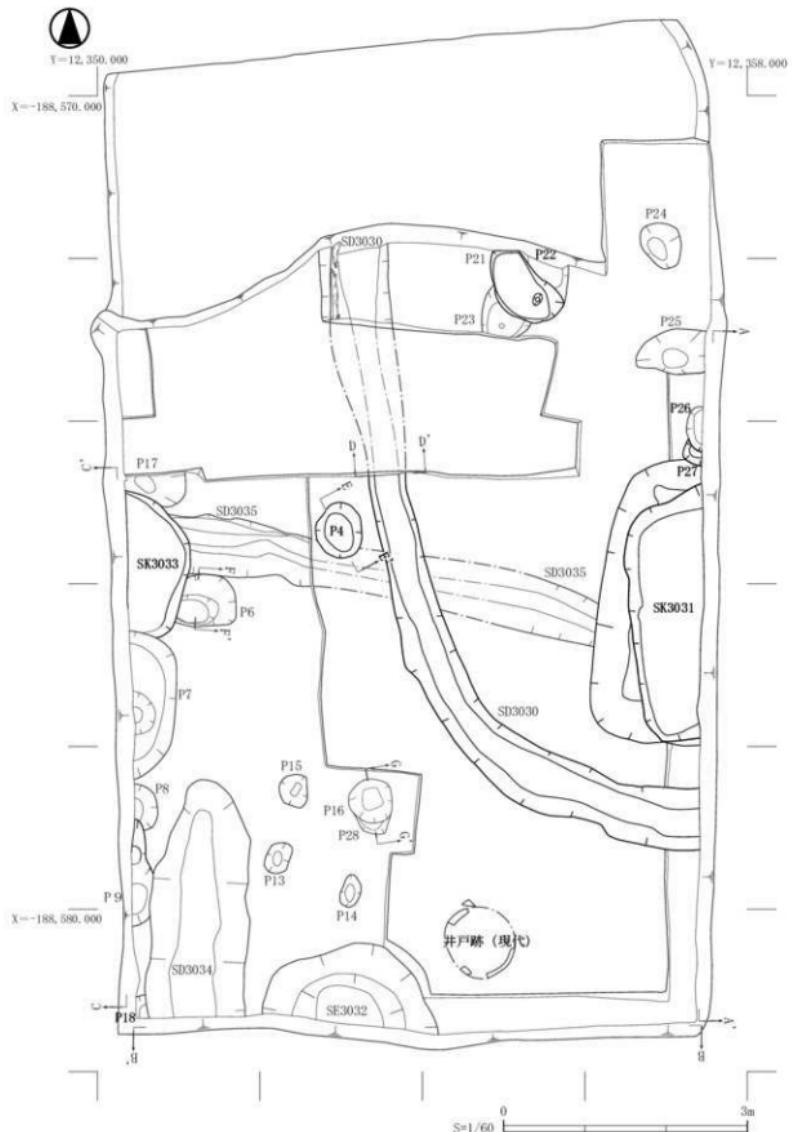
【方向・規模】検出した範囲では径約0.4mで、深さは約60cmである。

【遺物・年代】遺物は出土していないが、基本層序や他の遺構との関係により、平安時代の遺構と考えられる。

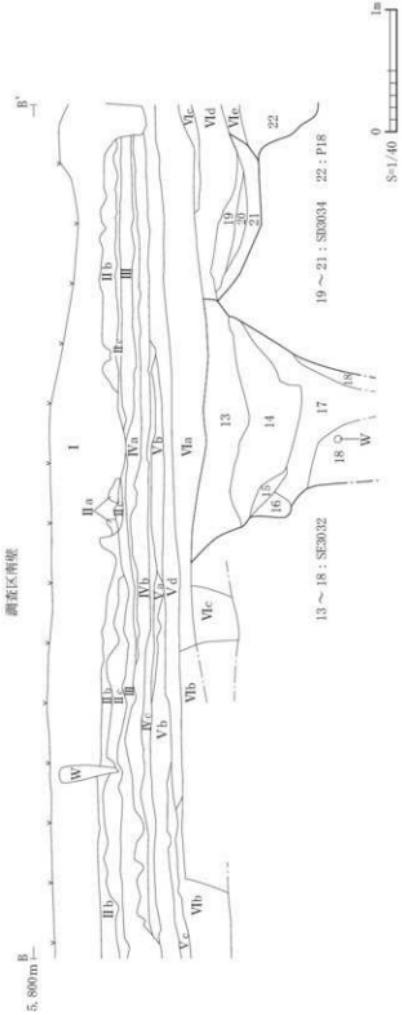
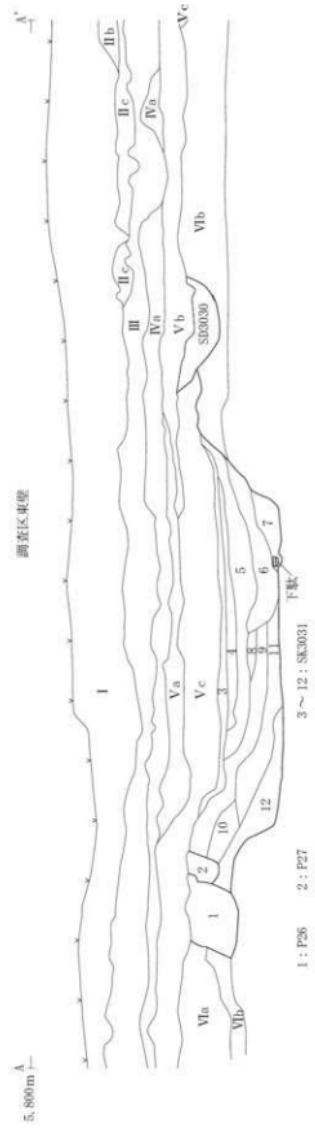
SD 3035 溝跡（第3、5図）

【位置】調査区のほぼ中央に位置している。

【重複】SK 3031 土坑、P 17より古い。



第3図 調査区平面図



第4図 調査区東壁・南壁断面図

第4図 土層注記表

No.	遺構	層位	土色	土性	備考
3	SK3031	1層	黒色 (10YR2/1)	腐植	腐植の堆積層。
4	SK3031	2層	黒褐色 (2, 5Y3/1)	シルト	粘性やや有り。青灰色シルトブロックを少量含む。
5	SK3031	3層	黒褐色 (10YR3/1)	粘質シルト	しまっている。腐植と木材片を含む。
6	SK3031	4層	黒褐色 (2, 5Y3/1)	粘質シルト	しまっている。腐植を含む。
7	SK3031	5層	黒色 (2, 5Y2/1)	粘質シルト	しまっている。砂分と木材片を含む。
8	SK3031	6層	黄灰色 (2, 5Y5/1)	粘土	ほぼ混じりがない。
9	SK3031	7層	黒褐色 (10YR3/1)	シルト	しまっている。粘性はやや有る。炭化物と腐植を含む。
10	SK3031	8層	黒色 (10YR2/1)	粘質シルト	ややしまっている。炭化物と腐植を含む。
11	SK3031	9層	黒褐色 (10YR3/1)	粘質シルト	しまりに欠ける。腐植を多く含む。
12	SK3031	10層	黒色 (10YR2/1)	シルト	ややしまりに欠ける。腐植を含む。自然堆積層。
13	SE3032	1層	黒褐色 (2, 5Y3/1)	粘質シルト	しまっている。炭化物を少量含む。
14	SE3032	2層	黒褐色 (2, 5Y3/1)	砂質シルト	しまっている。灰白色火山灰が2次堆積している。
15	SE3032	3層	オリーブ黒色 (5Y3/1)	粘質シルト	しまっている。青灰色地山をブロック状に嵌含む。
16	SE3032	4層	黒褐色 (2, 5Y3/1)	粘質シルト	しまっている。青灰色地山を斑状に含む。
17	SE3032	5層	黒褐色 (2, 5Y3/1)	粘質シルト	ややしまっている。青灰色地山ブロックを少量含む。木片を含む。
18	SE3032	6層	黒褐色 (2, 5Y3/1)	粘質シルト	ややしまっている。青灰色地山ブロックを含む。木片を含む。
19	SD3034	1層	黒褐色 (2, 5Y3/1)	シルト	粘性やや有り。青灰色地山を斑状に少量含む。
20	SD3034	2層	黒褐色 (2, 5Y3/2)	粘質シルト	ややしまっている。
21	SD3034	3層	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	炭化物を微量に含む。青灰色地山を斑状に含む。

【方向・規模】検出した範囲では、長さ約7m、幅約0.7m、深さ約20cmである。

【埋土】層序は3層に細別できた。いずれの土層も色合いも地山ブロックを多く含むなど特徴も近似していることから、人為的に埋め戻されたと考えられる。

【遺物・年代】図化はしていないが、9世紀前半と思われる土師器壺、須恵器高台付壺、壺、甕などの破片が出土している。

【VI e 層上面検出遺構】

S D 3034 溝跡（第3、4図）

【位置】調査区南壁の西壁寄りに位置している。

【重複】S E 3032 井戸跡より古く、P 9、P 18より新しい。

【方向・規模】検出した範囲では、長軸約2.8m、短軸約1.3mの長楕円形で、深さ約40cmである。

【埋土】3層に分層できた。青灰色地山ブロックを含むことから、人為的に埋め戻されたと考えられる。

【遺物・年代】須恵器高台付壺や須恵系土器壺の他、図化はしていないが土師器の甕の破片などが出土している（第7図3～5）。10世紀前葉以降の時期と考えられる。

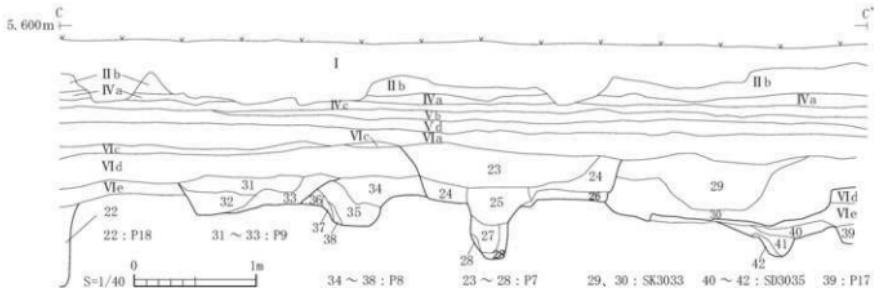
P 9（第3、5図）

【位置】調査区の西壁沿いやや南側に位置している。

【重複】S D 3034 溝跡より古く、P 8より新しい。

【方向・規模】検出した範囲では、長軸約1.3m、短軸約0.3mの不定形で、深さ約30cmの規模である。

【遺物・年代】土師器と須恵器壺片が出土しているが、正確な年代は不明。



No.	遺構	層位	土色	土性	備考
23	P7	1層	灰黄褐色 (10YR4/2)	シルト	しまりに欠ける。炭化物小片を少量含む。
24	P7	2層	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	ややしまっている。黄褐色地山を斑状に含む。
25	P7	3層	灰黄褐色 (10YR4/2)	シルト	ややしまっている。黄褐色砂質シルト地山ブロックを含む。
26	P7	4層	暗灰黄色 (2.5Y5/2)	シルト	ややしまっている。黄褐色地山を斑状に多く含む。
27	P7	5層	灰黄褐色 (10YR4/2)	シルト	ややしまっている。黄褐色砂質シルト地山ブロックを少量含む。
28	P7	6層	黄褐色 (2.5Y5/3)	砂質シルト	しまっている。黒褐色シルト小ブロックを少量含む。
29	SK3033	1層	灰黄褐色 (10YR4/2)	シルト	ややしまっている。炭化物を少量含む。
30	SK3033	2層	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	ややしまっている。炭化物を少量含む。
31	P9	1層	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	しまっている。炭化物を微量に含む。黄褐色地山ブロックを少量含む。
32	P9	2層	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	しまっている。炭化物を微量に含む。黄褐色地山を斑状に含む。
33	P9	3層	黒褐色 (10YR4/2)	シルト	しまっている。炭化物を微量に含む。黄褐色地山を斑状に多く含む。
34	P8	1層	灰黄褐色 (10YR4/2)	シルト	ややしまっている。黄褐色地山ブロックを微量含む。
35	P8	2層	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	ややしまっている。黄褐色地山ブロックを少量含む。炭化粒を少量含む。
36	P8	3層	灰黄褐色 (10YR4/2)	シルト	ややしまっている。炭化物を微量に含む。
37	P8	4層	灰黄褐色 (10YR4/3)	シルト	ややしまっている。炭化物を少量含む。
38	P8	5層	暗灰黄色 (2.5Y5/2)	砂質シルト	ややしまっている。黒褐色シルトブロックを含む。
39	P17	1層	黒褐色 (2.5Y3/1)	シルト	しまっている。粘性やや有り。炭化物を少量含む。
40	SD3035	1層	灰黄褐色 (10YR4/2)	シルト	ややしまっている。炭化物を微量含む。黄褐色地山ブロック少量含む。
41	SD3035	2層	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	ややしまっている。黄褐色地山ブロック含む。
42	SD3035	3層	黒褐色 (10YR3/1)	シルト	ややしまっている。黄褐色地山を斑状に含む。

第5図 調査区西壁断面図

P 8 (第3、5図)

【位置】調査区の西壁沿いやや南側に位置している。

【重複】P 7、P 9より古い。

【方向・規模】検出した範囲では、径約0.6mで、深さ約40cmの規模である。

【遺物・年代】土師器と須恵器片が出土しているが、正確な年代は不明。

P 16 (第3、6図)

【位置】調査区の南側に位置している。

【重複】P 28よりも新しい。

【方向・規模】約0.5m×約0.5mの不定形で、深さ約30cmの規模である。

【遺物・年代】 遺物は出土していない。検出層が S X 3034 性格不明遺構と同じ層なので、同時期とみられる。周囲の P 13、14、15 ピットも同時期とみられる。

【VI c・VI d 層上面検出遺構】

S E 3032 井戸跡（第3、4図）

【位置】 調査区の南壁沿いほぼ中央に位置している。

【重複】 重複関係はない。

【方向・規模】 検出した範囲では、直径約 2 m の円形とみられる。現地表面からの深さ約 2.6 m、検出面から深さ約 1.2 m まで掘り下げたが、安全管理上の理由で、それ以上の精査作業は断念した。

【埋土】 1 層は自然堆積とみられるが、2 ~ 4 層までは地山ブロックを多く含んでおり、灰白色火山灰が 2 次堆積しているので、人為的に埋め戻された層と考えられる。それより下層は、土質がほぼ均質であり、自然木の枝木を含むことから自然堆積と考えられる。井戸枠の痕跡は確認できなかった。

【遺物・年代】 内外面の摩耗が激しく、詳しい調整は不明である土師器の壺 2 点（第7図 1・2）と図示していないが、砥石が出土している。他にも、須恵器の壺や蓋、甕の他にも須恵系土器の底部破片なども出土している。のことから、10 世紀前葉以降の時期と推測される。

P 7（第3、5図）

【位置】 調査区の西壁沿いやや南側に位置している。

【重複】 S K 3033 土坑、P 8 より新しい。

【方向・規模】 検出した範囲では、径約 1.8 m で、深さ約 90cm の規模である。

【遺物・年代】 遺物は出土していないが、基本層序との関係より、平安時代の遺構と考えられる。

S K 3033 土坑（第3、5図）

【位置】 調査区の西壁沿いほぼ中央に位置している。

【重複】 P 7 より古く、P 6、17、SD 3035 溝跡より新しい。

【方向・規模】 検出した範囲では、長軸約 1.7 m、短軸約 1 m の楕円形で、深さ約 50cm の規模である。

【遺物・年代】 遺物は出土していない。基本層序との関係より、平安時代の遺構と考えられる。

P 6（第3、6図）

【位置】 調査区の西壁近くほぼ中央に位置している。

【重複】 S K 3033 土坑より古い。

【方向・規模】 検出した範囲では、長軸約 1 m、短軸約 0.6 m の楕円形で、深さ約 40cm である。

【遺物・年代】 平安時代の土師器の壺や甕の小破片が出土しているが、正確な年代は不明。

【VI a・VI b 層上面検出遺構】

P 26（第3、4図）

【位置】 調査区の東壁沿いに位置している。

【重複】 P 27 より新しい。

【方向・規模】 検出した範囲では、径約 0.5 m で、深さ約 40cm の規模である。

【遺物・年代】遺物は出土していないが、基本層序との関係より、近世の遺構と考えられる。

P 27 (第3、4図)

【位置】調査区の西壁沿いに位置している。

【重複】SK 3031 土坑より新しく、P 26 より古い。

【方向・規模】検出した範囲では、径約 0.4 m で、深さ 15cm の規模である。

【遺物・年代】遺物は出土していないが、基本層序との関係より、近世の遺構と考えられる。

SK 3031 土坑 (第3、4、6図)

【位置】調査区の西やや南寄りに位置し、西側は調査区外に延びている。

【重複】SD 3030 溝跡、P 27 より古く SD 3035 溝跡より新しい。

【方向・規模】確認した範囲では、長方形で長軸約 3.3 m、短軸約 0.9 m、深さ約 60cm の規模である。

【埋土】粘質シルトが主で、炭化物や腐植を多く含む。堆積層に針葉樹の枝葉など腐植を含む層が多い。詳しい用途は不明ではあるが、水を常時溜めた施設の跡と考えられる。平面と層序から、完掘状態の1期、2層まで埋まつた2期の、大きく2つの時期があつたと考えられる。

【遺物・年代】平安時代の土師器、須恵器片も出土しているが、近世の陶器の皿や碗、瓦片、瓦質土器の火鉢の破片が出土している(第7図7)。また、別の個体と考えられる下駄が片方ずつ出土している(第8図19・20)。

[Vc・VIb 層上面検出遺構]

SD 3030 溝跡 (第3、4、6図)

【位置】調査区の東から中央部に位置し、北側と東側は調査区外に延びている。

【重複】SK 3031 土坑、SD 3035 溝跡より新しい。

【方向・規模】検出した範囲では、長さ約 9 m、幅約 0.6 m、深さ約 20cm の規模で、湾曲している。

【遺物・年代】一部、壁際から木材が出土しており、機能時には板材により護岸が施されていたと思われる。19世紀前半頃とみられる近世の陶磁器片や木製品が出土している(第8図16・17)。

P 4 (第3、6図)

【位置】調査区のほぼ中央部に位置し、SD 3030 溝跡に隣接している。

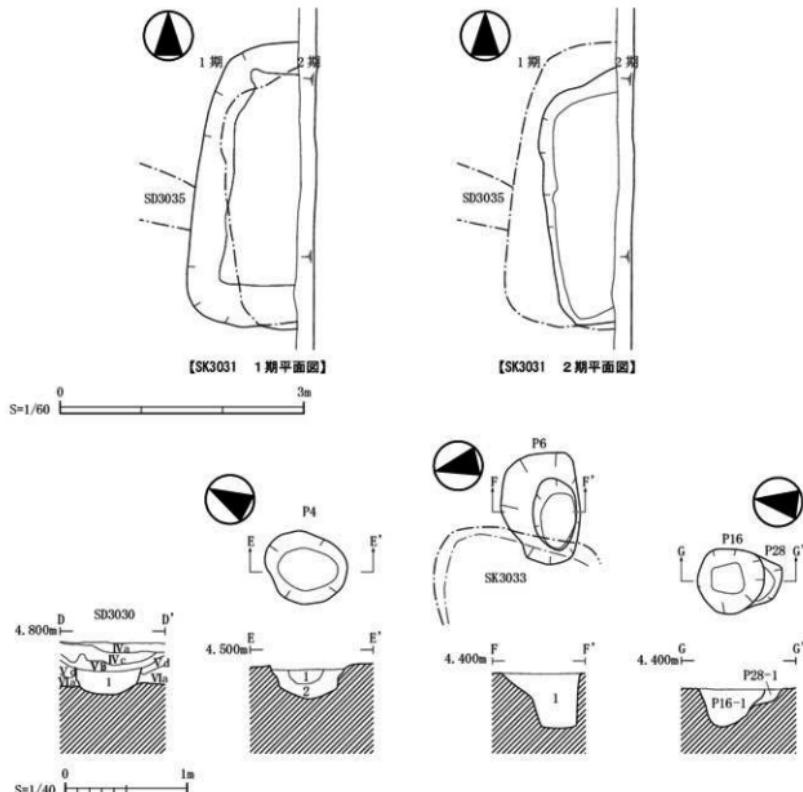
【重複】SD 3035 溝跡より新しい。

【方向・規模】長径 0.7 m、短径 0.5 m の楕円形で深さ約 20cm の規模である。

【遺物・年代】平安時代と考えられる須恵器の片が出土しているが、SD 3030 溝跡と同じ層で検出されたことから、近世の遺構と考えられる。

3 まとめ

今回の調査の結果、近世の溝跡と土坑とピット、平安時代の井戸跡と溝跡と土坑とピットなどの遺構を検出した。遺物は空箱(590mm × 386mm × 75mm)で2箱出土している。多くは近世から近代にかけての陶磁器であるが、平安時代の須恵器や土師器なども出土した。ただし、ほとんど図化するのが困難



遺構	層位	土色	土性	備考
SD3030	1層	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	砂質シルト	ややしまっている。炭化物を多く含む。
P4	1層	灰黄褐色 (10YR4/2)	シルト	しまっている。炭化粒を少量含む。
P4	2層	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	非常にしまっている。炭化粒を少量含む。
P6	1層	黒褐色 (2.5Y3/1)	粘質シルト	しまっている。青灰色地山ブロックを大量に含む。
P16	1層	灰色 (7.5Y5/1)	砂質シルト	しまっている。黒褐色シルトを斑状に多く含む。
P28	1層	灰色 (7.5Y4/1)	砂質シルト	しまっている。黒褐色シルトを斑状に多く含む。

第6図 遺構平断面図

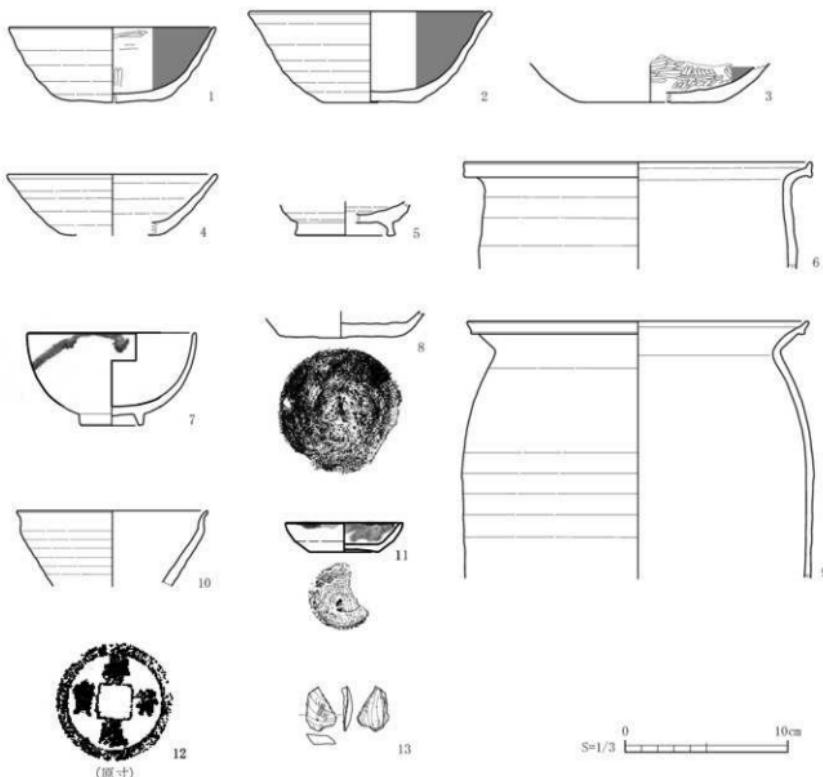
な小片である。

主要遺構の新旧関係や重複関係は第9図のとおりで、矢印は重複関係があることを示す。

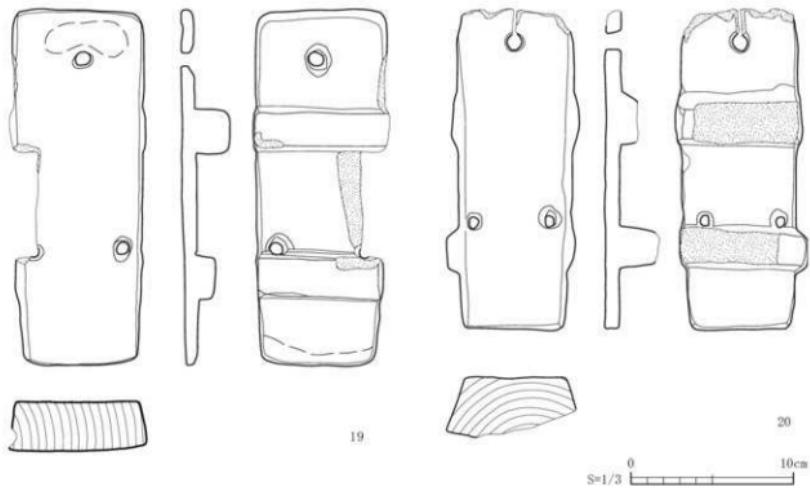
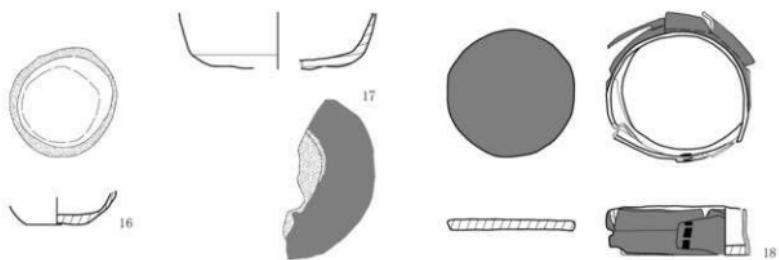
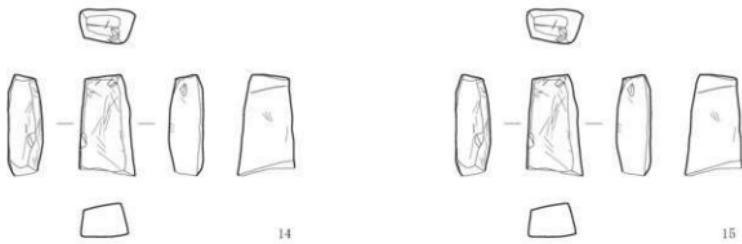
各層の概要については、I層が現代の盛土層である。炭化材を多く含むIII層は近代の遺物を含むことから、近隣の第106次調査などで確認された明治32年に南宮地域で発生した大火による層と同一と考えられる。

Va層は炭化物を多く含んでおり、近世末の火災層と考えられる。Vb層からは19世紀前半頃の遺物が出土しているので、V層は近世の整地層と考えられる。近世の遺構は、SD3030溝跡とP4を検出した層が同じであることから、同時期とみられ、それより下層のSK3031土坑は大きく2時期に分けられる。

VI層は、陶磁器が出土しなくなり、土師器や須恵器などの古代の遺物が出土する層である。VI層から出土する遺物は、概ね9~10世紀代に収まるとみられることから、遺構も同じ年代とみられ、数



第7図 出土遺物



0
S=1/3
10cm

第8図 出土遺物2

出土遺物観察表

(単位:cm)

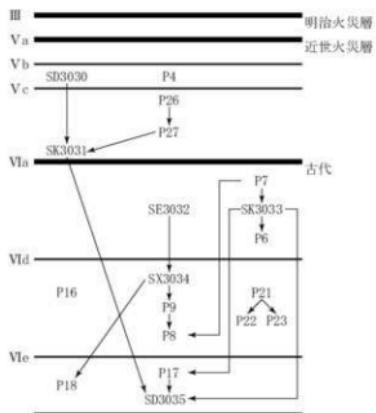
番号	種類	遺構	層位	特徴		法量			備考	登録番号
				外面	内面	口径 残存率	底径 残存率	器高		
1	土師器 壺	SE3032	①	ロクロナデ 底部: 摩滅のため不明	ヘラミガキ→黒色処理	(12.6) 8/24	(6.4) 16/24	4.6		R11
2	土師器 壺	SE3032	①	ロクロナデ 底部: 回転系切	ヘラミガキ→黒色処理	(14.8) 4/25	(6.0) 14/24	5.6		R9
3	土師器 壺	P21	①	摩滅のため不明	ヘラミガキ→黒色処理	-	(8.8) 10/24	-		R19
4	須恵器土器 壺	SD3034	①	ロクロナデ	ロクロナデ	(12.8) 5/24	-	-		R22
5	須恵器 高台付壺	SD3034	①	ロクロナデ 回転ヘラ切→高台貼付け	ロクロナデ	-	(5.4) 8/24	-		R21
6	土師器 壺	SD3034	①	ロクロナデ	ロクロナデ	(21.2) 3/24	-	-		R23
7	陶器 碗	SK3031	①	ロクロナデ・灰釉・鉄輪減し 底部: 回転系切 高台内無輪	ロクロナデ→灰釉	(10.2) 14/24	3.5 24/24	5.7		R16
8	須恵器 壺	-	Vc	ロクロナデ 底部: 回転ヘラ切	ロクロナデ	-	(7.2) 18/24	-		R2
9	土師器 壺	-	Vc	ロクロナデ	ロクロナデ	(20.9) 4/24	-	-		R1
10	陶器 天日茶碗	-	Va	ロクロナデ→鉄輪	ロクロナデ→鉄輪	(11.6) 1/24	-	-	瓶戸・美濃?	R7
11	カワラケ 灯明皿	-	Vb	ロクロナデ 底部: 回転ヘラ切	ロクロナデ	(7.0) 10/24	(4.4) 17/24	1.8	油煙あり	R4
12	古鏡	-	Vla	-	-	-	-	-	祥符通寶	M1
13	石器 剥片	SK3031	①	-	-	2.8	1.8	0.8	黒曜石 (湯の食産)	R24
14	砥石	-	Va	-	-	(6.1)	3.4	2.1		R5
15	砥石	-	Va	-	-	(7.8)	4.2	2.6		R5
16	木製品 挽物	SD3030	①	ロクロ挽き	ロクロ挽き	-	3.8	-		R1
17	木製品 漆器椀	SD3030	①	黒漆	ロクロ挽き→黒漆	-	(8.0)	-		R2
18	木製品 円形曲物	SK3031	①	赤漆	-	上蓋7.7 容8.8	-	3.0		R3
19	木製品 下駄	SK3031	①	-	-	21.8	8.4	2.9		R4
20	木製品 下駄	SK3031	①	-	-	19.6	7.9	3.7		R5

度にわたる整地が実施されたと推測される。VI c・d層上面で10世紀前葉の遺物を伴うSE 3032井戸跡とSK 3033土坑、P 7、6などの遺構を検出した。VI e層上面で、9世紀中盤から後半とみられるSD 3034溝跡やP 8、9などを検出した。もっとも古いVII層上面で検出したのは、9世紀前半ごろと想定される遺物を伴うSD 3035溝跡とP 17、P 18である。

当調査区が面している南側の市道新田浮島線は、近世の塩竈街道と同一であり、当調査区周辺のこれまでの調査でも、近世の遺構や遺物が多数確認され、塩竈街道沿いに集落が形成されていた。また、平安時代の遺構遺物については、町地区では9世紀になると増加する傾向があることが報告されており、今回の調査でも同様の傾向は確認できた。また、遺構は確認していないが、中世の遺物も出土している。

参考文献

多賀城市教育委員会 2018『新田・山王道路ほか一震災復興関係跡跡発掘調査報告書1-』多賀城市文化財調査報告書第137集



第9図 遺構新旧関係



調査区全景（南から）



S D 3030 溝跡完掘状況（北西から）



S D 3034 溝跡完掘状況（西から）



S K 3031 土坑・S D 3035 溝跡完掘状況（西から）



P 7 完掘状況（東から）

写真図版 1



S K 3033 土坑・P 6 完掘・S D 3035 溝跡検出状況(東から)



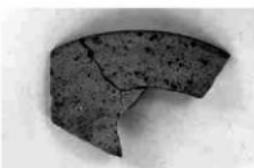
S E 3032 井戸跡全景(南東から)



3 S E 3032 井戸跡出土土師器壊



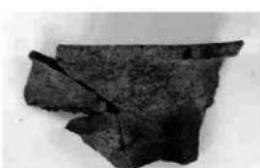
4 S E 3032 井戸跡出土土師器壊



5 S D 3034 溝跡出土須恵系土器



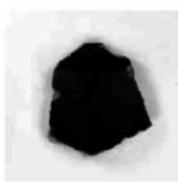
6 S D 3034 溝跡出土須恵器高台付壊



7 S D 3034 溝跡出土土師器壊



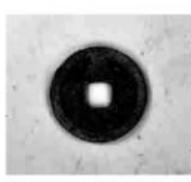
8 S K 3031 土坑出土陶器碗



9 V c 層出土天目茶碗



10 V b 層出土灯明皿



11 VI a 層出土銭貨

写真図版 2

III 高崎遺跡第127次調査

1 調査に至る経緯と経過

本件は東田中一丁目地内における個人住宅新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査である。令和2年11月26日、事業者から当該事業計画と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。計画では、現地表から最大約40cmの掘削を行うことから、遺跡への影響が懸念された。

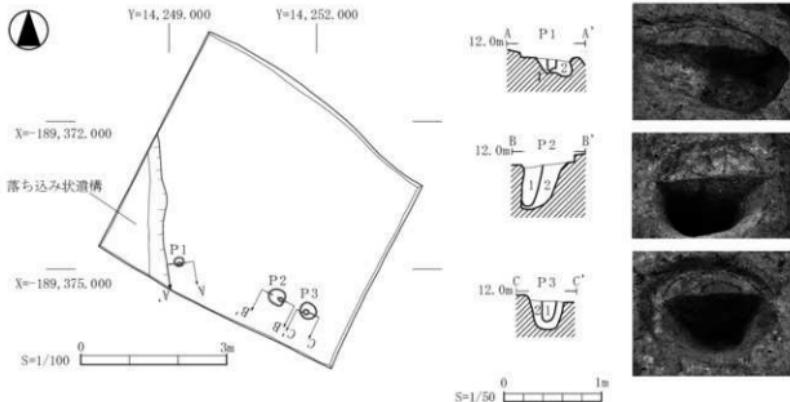
同年12月7日に地権者から発掘調査の依頼を受け、12月9日には作業員を動員して人力での表土掘削を開始した。

地表面より約30cmの深さで時期不明の遺構を確認したため、遺構の掘削及び写真撮影、平面・断面図作成を行った。

12月25日には発生土による埋め戻しを行い、本調査の一切を終了した。

2 調査成果

調査区西側端部で性格不明の落ち込み状遺構を、南半部で柱穴3基を発見した。調査区内からは遺物は出土しておらず^a、いずれの遺構も年代不明である。



第2図 調査区平面・断面図

IV 東田中窪前遺跡第9次調査

1 調査に至る経緯と経過

本件は、東田中一丁目地内における個人住宅新築工事に伴う確認調査である。令和2年10月21日に、事業者から当該事業計画と埋蔵文化財のかかわりについて協議書が提出された。計画では、住宅基礎部分に柱状改良杭の打設は予定されていないものの、申請地南側近接地で平成17年度に第3・4次調査を実施し、遺構が確認されているため、当該工事においても遺跡への影響が懸念された。このため、工法変更による遺跡の保存協議を行ったが、提出された基礎工法以外への変更是困難であると判断されたことから、発掘調査による記録保存を行うこととなった。

その後、地権者から発掘調査の承諾書が提出されたことから12月10日より作業員を動員し、建物基礎部分の表土掘削を人力で行った。

調査区壁面の土層観察から、当該地は過去に削平を受けており、遺構が残存していないと判断されたため、調査区の写真撮影及び図面作成を行い、12月11日に埋戻して現地作業的一切を終了した。

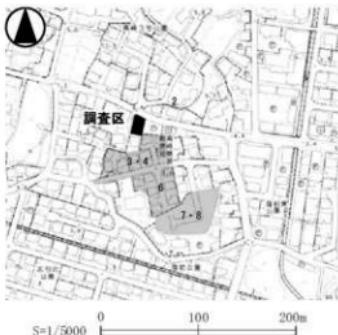
2 調査成果

I a層：現代の住宅整地層。青灰色砂石（5B5/1）。層厚約15cmである。

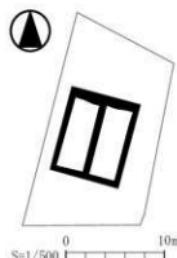
I b層：現代の住宅整地層。黄色粘質土（2.5Y7/8）。層厚約15cmである。

暗褐色砂層が互層状に混じる。

II 層：地山。明黄褐色岩盤（2.5Y6/8）。



第1図 調査区位置図



第2図 調査区配置図



調査区全景（南西から）



調査区全景（北から）

V 小沢原遺跡第21次調査

1 調査に至る経緯と経過

本件は、浮島二丁目地内における介護施設建築に伴う確認調査である。

令和2年11月11日、地権者より当該地での介護施設建築に伴う伐根、掘削、整地計画と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。計画では、3,292m²の範囲において、既存盛土を90cm削平し、同敷地内へ150～190cm盛土して整地した上に、ベタ基礎で建物を建築するものである。約1,400m²を超える開発が見込まれ、小沢原遺跡への影響が懸念されるため確認調査を行うこととなった。

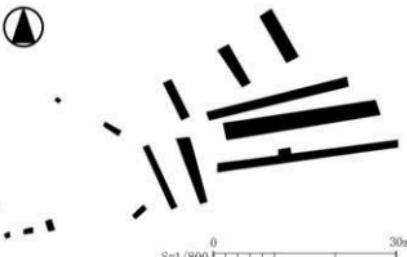
地権者から令和2年11月25日に発掘調査の依頼書と承諾書の提出を受け、11月30日から発掘調査に着手した。計画地内に14箇所の調査区を設定した。表土を除去し、III層上面で遺構の検出作業を行ったが、遺構や遺物は確認できなかった。12月25日に掘削及び平面図作成、写真撮影などの記録を終了した。

2 調査成果

- I層：現代の盛土。周辺の造成時に盛られたと推定される。計画地西側で確認した。
- II層：灰黄褐色土（10YR4/2）。表土で、厚さは8cmある。
- III層：明黄褐色土（10YR6/6）。大小の礫を含む地山（ローム層）である。



第1図 調査区位置図



第2図 調査区配置図



調査区全景（北から）



調査区全景（西から）

VI 留ヶ谷遺跡第10次調査

1 調査に至る経緯と経過

本件は留ヶ谷一丁目地内における個人住宅新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査である。令和2年9月2日、事業者から当該事業計画と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。計画地では、過去の造成工事により遺構は削平されている可能性が高いことから、慎重工事の対応が妥当と考えられた。

しかし、県文化財課と協議を重ねた結果、削平により遺構が失われている確証が得られず、遺跡への影響が懸念されることから、発掘調査を行うこととなった。

12月7日には、重機による掘削を開始したが、遺構・遺物は発見されなかった。また、調査区西壁の断面観察により、調査区南端部から北側にかけて、当初の予想と同様に基盤層が大きく削平されている状況を確認した。その後、同日中に埋め戻しを完了し、現地作業的一切を終了した。



第1図 調査区位置図



調査区全景（北から）



基盤層削平状況（西から）

VII～IX 新田遺跡第151～153次調査

1 調査に至る経緯と経過

本件は、南宮字一里塚地内における個人住宅新築工事3件に伴う埋蔵文化財発掘調査である。令和2年11月25日（151・152次）及び12月3日（153次）に、事業者から当該事業計画と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。計画では、住宅基礎部分に柱状改良杭の設置が予定されており、それぞれ長さ7.5mを42か所（151次）、長さ8.3mを28か所（152次）、長さ4.2mを27か所に打ち込む工事を行うものである。

申請地周辺では、北側隣接地で令和2年度に第150次調査を実施しており、現表土から約1mで遺構を発見しているため、遺跡への影響が懸念された。このため、工法変更による遺跡の保存協議を行ったが、提出された基礎工法以外では十分な地盤強度を得られないとの判断され、発掘調査による記録保存を行うこととなった。

その後、各地権者から令和3年1月7日に埋蔵文化財発掘の届出、4月5日に発掘調査の依頼書及び承諾書が提出されたことを受け、4月12日（151次）、4月16日（152次）、4月19日（153次）に重機による表土掘削を行い、発生土の大部分を場外へ搬出した。

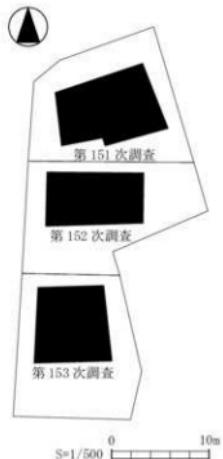
表土掘削の結果、現代の盛土及び近世以降の耕作土の下層で、古代末頃と想定される基本層を確認した。表土掘削完了後は作業員を動員して、調査区環境整備を開始した。

その後、4月15日（151次）、4月27日（152次）、5月12日（153次）にそれぞれ遺構検出作業を終え、写真撮影を行った。遺構検出の結果、古代の溝跡やピット、小溝群を確認した。5月12日には平面図作成のため任意の測量基準杭を設置し、5月14日～5月20日にかけて平面図・断面図の作成を行いながら、順次遺構の掘り下げを行った。また、調査区外周壁面や、サブトレーナーの土層観察により、Ⅲ層以下に古墳時代以前の遺構は存在しないと判断される。

5月25・26日には調査用器材を搬出し、6月1日に全ての調査区の埋め戻しを行い、現地作業の一切を終了した。



第1図 調査区位置図



第2図 調査区配置図

2 調査成果

(1) 基本層序 (第6図)

- I a層：現代の盛土層。黄褐色砂質土（10YR5/6）。全調査区で層厚約50cmである。
- I b層：近世以降の耕作土層。暗褐色砂質土（10YR3/4）、全調査区で層厚約20～40cmである。
- I c層：近世以降の盛土層。にぶい黄褐色砂質土（10YR4/3）、全調査区で層厚約10～30cmである。
- II a層：中世以降の堆積層。褐灰色粘質土（10YR4/1）。全調査区で層厚約10cmである。
- II b層：古代末頃の堆積層。黒色粘質土（10YR1.7/1）。全調査区で層厚約10～15cmである。
- III a層：古代の遺構検出面である。褐灰色粘土（10YR5/1）。全調査区で層厚約15cmである。151次では灰白色火山灰（十和田a）が部分的に混入する。
- III b層：古代の基盤層である。褐灰色粘土（10YR4/1）。151・152次調査で確認し、層厚は約10cmである。
- III c層：古代の基盤層である。暗灰黄色土（2.5Y4/2）。153次調査で確認し、層厚約20cm以上である。
- IV 層：古代以前の堆積層。暗灰黄色砂質土（2.5Y5/2）。全調査区で層厚約30～45cmである。
- V 層：古代以前の堆積層。灰黄褐色砂層（10YR4/2）。全調査区で層厚約15cm以上と考えられる。

(2) 発見遺構と遺物

S D2335溝跡 (151次：第3・4図)

【位置】調査区南側で発見した東西方向の溝跡である。方向は西で北に13度偏している。

【調査状況・重複】重複関係は認められない。

【形状・規模】上幅は224cm、深さ28cmである。底面は皿状であり、立ち上がりは非常に緩やかである。

【埋土】3層に区分される。1層は基本層 II a層に相当し、部分的に土色は違うものの、黒褐色粘質土（10YR3/2）で、粘性やや強く、締まりは中、白色砂粒を少量含む。2層は基本層 II b層に相当し、黒色粘土（10YR1.7/1）で、粘性強く、締まりは密、φ 1～2 cm黄褐色ブロック少量含む。3層は黒色粘土（10YR2/1）で、粘性強く、締まりは密、φ 5 cm黄褐色ブロック多量含む。

【遺物】遺物は出土していない。

S X2336小溝跡 (153次：第7図)

【位置】調査区北部で発見した小溝跡である。方向は南東から北西に伸びた後に北方向へ約32度屈曲する。

【調査状況・重複】SX2337・SX2338と重複しており、それらより新しい。

【形状・規模】上幅は36cm、深さは約15cmである。底面はU字状であり、壁は緩やかに立ち上がる。

【埋土】単層の暗褐色土（10YR3/4）である。粘性なし。締まり中。φ 2 cm程度の褐色ブロックを多量含む。

【遺物】遺物は出土していない。

S X2337小溝跡 (153次：第7図)

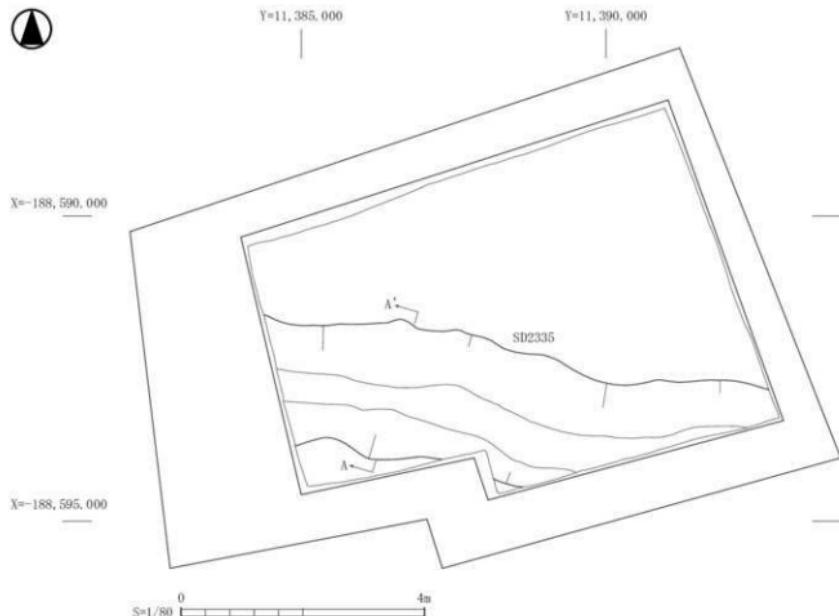
【位置】調査区中央部で発見した小溝跡である。方向は北で東に約5度偏している。

【調査状況・重複】SX2336・SX2338と重複しており、前者より古く後者より新しい。

【形状・規模】上幅は約30cm、深さは7cmである。底面はU字状であり、壁は緩やかに立ち上がる。

【埋土】単層の暗褐色土（10YR3/3）である。粘性なし。締まり中。φ 2 cm程度の褐色ブロックを少量含む。

【遺物】遺物は出土していない。



第3図 第151次 調査区平面図



第4図 第151次 遺構断面図

S X2338小溝跡 (153次: 第7・8図)

【位置】調査区全域で発見した小溝群で、7条確認した。方向は北で西に約0度から5度偏している。

【調査状況・重複】SX2336・SX2337・SX2339と重複しており、SX2336・SX2337より古く、SX2339より新しい。

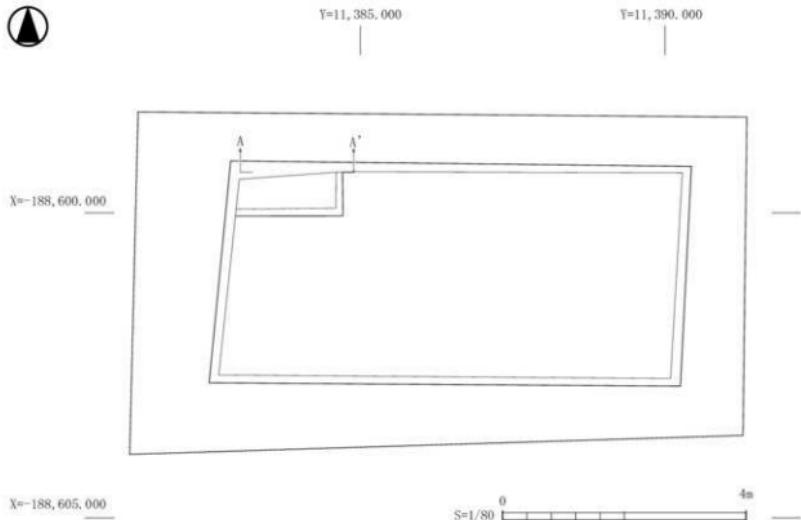
【形状・規模】上幅は36cmから68cm、深さ16cmから28cmである。底面はU字状であり、壁は緩やかに立ち上がる。

【埋土】単層の黒褐色土(10YR3/2)。粘性なし。締まり中。φ1～3cm程度の暗褐色ブロックを少量含む。

【遺物】遺物は土師器片2点、土師器甕2点が出土しているが、いずれも小破片である。

S X2339小溝群 (153次: 第7図)

【位置】調査区西部で発見した小溝群で、2条確認した。方向は北で東に約16度から44度偏している。



第5図 第152次 調査区平面図

【調査状況・重複】SX2338と重複しており、それより古い。

【形状・規模】上幅は30から40cm、深さ8cmから12cmである。底面はU字状であり、壁は緩やかに立ち上がる。

【埋土】単層の黒褐色土(10YR3/2)。粘性なし。縮まり中。φ5cm程度の暗褐色ブロックを少量含む。

【遺物】遺物は出土していない。

(3) その他の発見遺物

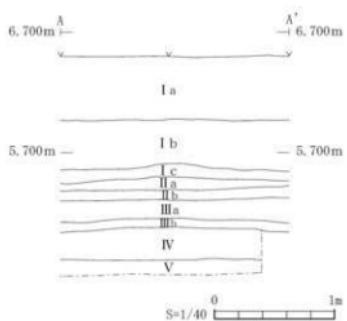
【151次】基本層Ⅲa層から、須恵器甕4点、須恵器瓶類10点が出土しているが、いずれも小破片である。

【152次】基本層Ⅲa層から、須恵器甕1点が出土しているが、いずれも小破片である。

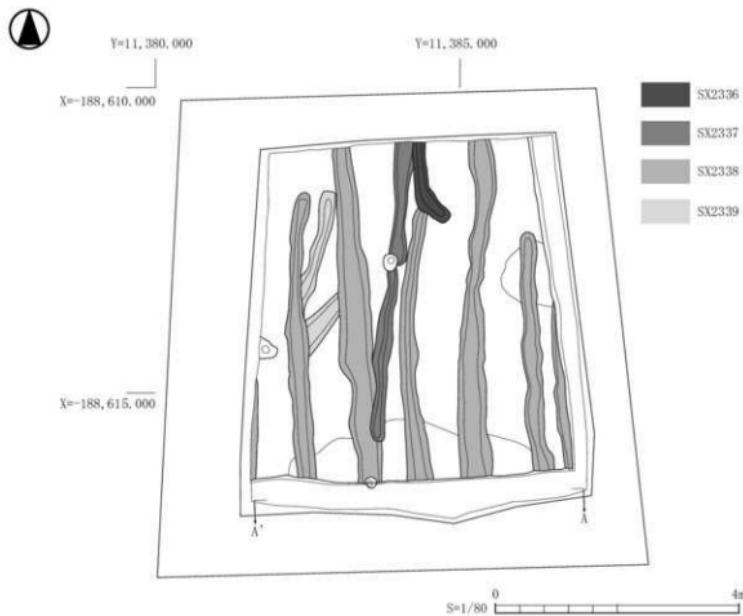
【153次】基本層Ⅰc層から、土師器壺8点、土師器甕4点が出土しているが、いずれも小破片である。

3まとめ

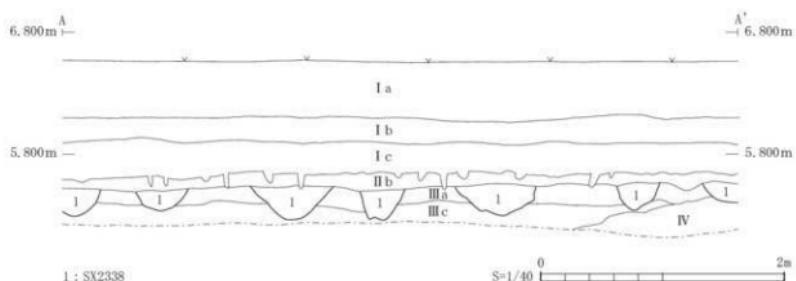
- (1) 古代の溝跡と小溝群、ピットを発見した。
- (2) 出土遺物の様相から古代を中心とした遺構が分散していると考えられる。



第6図 152次 基本層



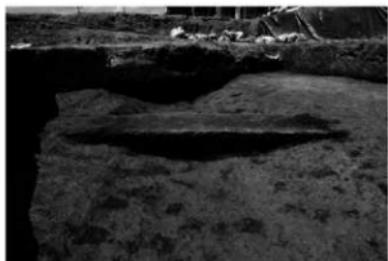
第7図 第153次 調査区平面図



第8図 第153次 遺構断面図



第151次 遺構検出状況（南西から）



第151次 SD 2335 断面（南東から）



第151次 平面図作成状況（西から）



第151次 調査区完掘状況（北西から）



第151次 作業状況（北西から）

写真図版 1



第152次 調査区全景（南西から）



第152次 作業状況（南西から）



第152次 基本層序（南から）

写真図版2



第153次 遺構検出状況（北東から）



第153次 平面図作成状況（北西から）



第153次 調査区完掘状況（南西から）

写真図版3

X 新田遺跡第154次調査

1 調査に至る経緯と経過

本件は、新田字後における賃貸住宅6軒及び道路造成工事に伴う確認調査である。

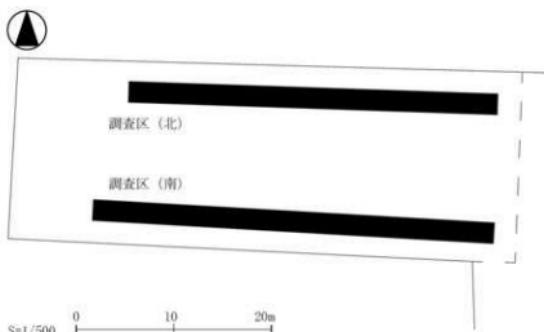
令和2年11月27日、事業者から当該地での当該事業計画と埋蔵文化財の関わりについての協議書が提出された。計画は、993m²の敷地内で賃貸住宅6軒の新築及び位置指定道路を造成するものである。賃貸住宅の基礎は、1軒につき柱状改良杭27本を設置し、道路は長さ52.2m、幅6mを敷設し、給排水管を埋設する。また、道路部分には排水溝の設置も計画されている。これらの工事の際に、遺跡へ影響を与える可能性が考えられる。当該地周辺では、平成4年度に第13次調査が実施されており、現地表面より約100cmで遺構を検出している。そのため確認調査を実施することとなった。

事業者より発掘調査の依頼書及び承諾書が提出されたことから、4月13日より現地調査を開始した。北と南にそれぞれ1つ調査区を設定し、4月13日から重機による表土掘削を行った。4月14日より作業員を動員し、北側の調査区から精査を開始した。その後、遺構の分布が確認できた段階で記録作業を行った。

4月27日に重機で埋め戻しを行った後に、休憩施設と発掘器材等の撤収を行い、5月7日に確認調査を終了した。



第1図 調査区位置図



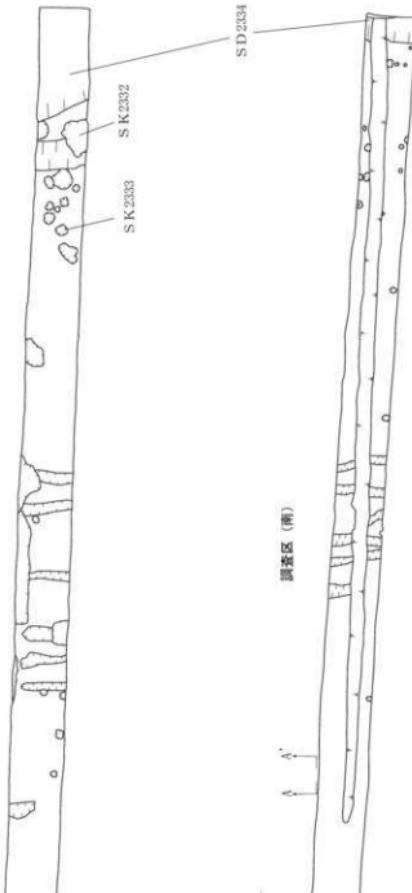
第2図 調査区配置図



Y=10,955,000
X=188,795,000

Y=10,985,000
X=188,810,000

調査区（北）



小溝群跡

S=1/200 0 10m

第3図 調査区平面図

2 調査成果

(1) 基本層序 (第4図)

I 層：現代の耕作土。層厚約35cmである。

II a層：オリーブ褐色砂層 (2.5Y4/3)。やや黒みを帯びて
いる。層厚約20cmである。II 1層上面が遺構検出面。

II b層：にぶい黄褐色砂層 (10YR4/3)。やや粘土質である。
層厚約20cmである。

II c層：にぶい黄褐色砂層 (10YR4/3)。II b層よりやや明る
く砂粒も大きい。層厚約20cmである。

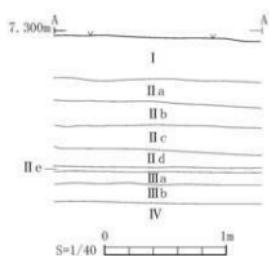
II d層：にぶい黄褐色砂層 (10YR4/3)。II c層よりやや明る
く砂粒もさらに大きい。層厚約10cmである。

II e層：暗灰黄色砂質シルト層 (2.5Y4/2)。やや粘性がある。層厚約4cmである。

III a層：黒褐色粘土層 (10YR3/1)。植物由来と考えられる黒色粒を多く含む。層厚約10cmである。

III b層：褐灰色粘土層 (10YR4/1)。層厚約15cmである。

IV 層：灰黄褐色粘土層 (10YR5/2)。



第4図 基本層序

(2) 発見遺構と遺物 (第3・5図)

今回の調査では、南北に2つの調査区を設定し、それぞれ遺構検出面まで50cm程度掘削を行った。その結果、2つの調査区の東端で連続する大溝跡 (SD2334)、小溝群跡、土坑、柱穴を確認した。なお、調査区（南）の中央には、東西方向に長い搅乱が存在している。小溝群跡は、畑の痕跡と推定される。

また、下層における遺構の有無を確認するため、調査区（南）の遺構が検出されなかった西端部を現地表面から1m 30cm程度深掘りし、下層の状況を確認した。

【調査区（北）】

S K2332土坑（第3図）

【位置】調査区（北）の東側。

【平面形・規模】不整形。規模南北約1m、東西約1m50cm。

【遺物】内面に黒色処理を施した土師器壊の底部片（第5図3）が出土した。

S K2333土坑（第3図）

【位置】調査区（北）の東側。

【平面形・規模】円形を基調とする。規模南北約40cm、東西約40cm。

【遺物】須恵系土器小型壊（第5図2）が出土した。

【調査区（北・南）】

S D2334溝跡（第3図）

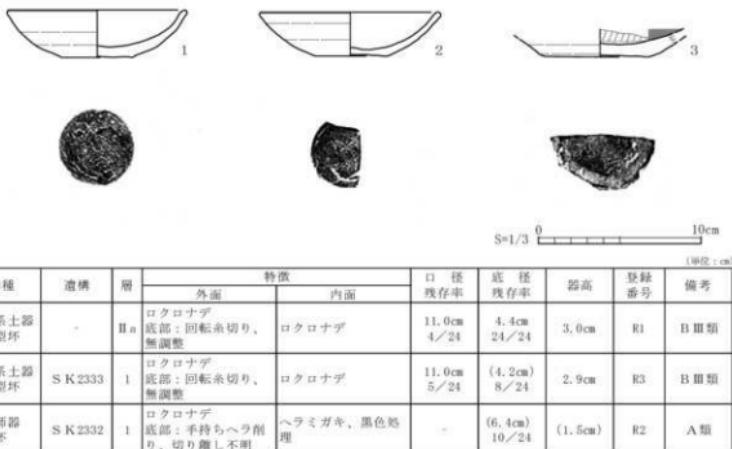
【位置】調査区（北）の東端、調査区（南）の東端。

【平面形・規模】調査区（北）の幅4m 70cm以上、調査区（南）幅1m 10cm以上。

【遺物】遺物は出土していない。

3 まとめ

- (1) 出土した遺物から9～10世紀の遺構が分布している可能性が高い。
- (2) 小溝群跡は焼の痕跡であると考えられる。



第5図 出土遺物実測図

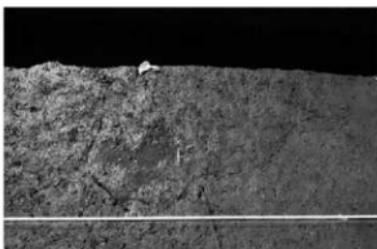


出土遺物写真

写真図版 1



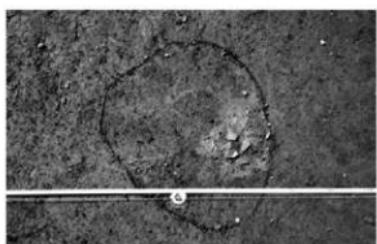
調査区（北）全景（東から）



SK2332 検出状況



調査区（南）全景（西から）



SK2333 検出状況



調査区（南）大溝（南から）

写真図版 2

XI 新田遺跡第155次調査

1 調査に至る経緯と経過

本件は、南宮一里塚地内における宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査である。

令和2年12月25日に、事業者から当該事業計画と埋蔵文化財の関わりについての協議書が提出された。計画では、1776.74m²の敷地内に現地表面から最大1mの盛土を施した後、幅6mの道路と9区画の宅地の造成を行うものである。申請地周辺では、北側近接地で令和2年度に第150次調査を実施しており、現地表面から約0.7mで遺構を発見しており、道路部分について遺構の分布を把握するため確認調査を実施することになった。

令和3年4月6日に地権者から発掘調査の依頼書及び承諾書が提出されたことを受け、令和3年4月13日から発掘調査に着手した。

今回の調査では、調査区内に5箇所のトレンチを設定し、トレンチ1から順に重機による掘削を開始した。4月14日から作業員を入れてトレンチ1から遺構検出作業を開始した。22日には平面図の作成を開始した。これ以降、写真撮影や図面作成を隨時行い、5月25日には5箇所のトレンチ全ての作業が終了し、6月2日から6月3日にかけて重機による埋戻しを行い、調査を終了した。

2 調査成果

(1) 基本層序

I a層：現代の耕作土。暗褐色シルト(2.5YR4/2)。

厚さは14～22cmである。

I b層：現代の耕作土。暗褐色シルト(2.5YR5/2)。厚さは約50cmである。

II層：旧表土。褐色シルト(10YR4/1)。炭化物を含む。厚さは10～14cmである。

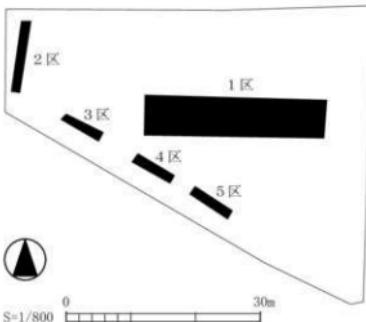
III層：古代の遺構検出面。灰褐色粘質シルト(10YR4/2)。酸化鉄を含む。厚さは約26cmである。

IV層：黄褐色シルト(2.5YR5/3)。マンガン粒を含む。厚さは8～16cmである。

V層：黄褐色砂(10YR5/3)。厚さは約30cmである。



第1図 調査区位置図



第2図 調査区配置図

(2) 発見遺構と遺物

S K 2325 土坑（第3図）

【位置】1区北側壁面中央で発見した土坑である。

【重複】S X 2327より新しい。

【規模】東西約4m、深さが80cmである。

【埋土】5層に分けられる。全て自然堆積である。2層には灰白色火山灰が一次堆積層する。

【遺物】出土していない。

S K 2326 土坑（第3図）

【位置】1区東側で発見した土坑である。

【重複】他の遺構との重複はない。

【規模】平面では南北約3.3m、東西約3.4mの隅丸方形である。深さは最大約76cmである。

【埋土】9層に分けられる。全て自然堆積である。5層には灰白色火山灰が一次堆積層する。

【遺物】2層から土師器壺、須恵系土器高台付皿が出土している。

S X 2327 小溝群（第3図）

【位置】1区西側で発見した、東西方向の小溝群である。（第5図）

【重複】S K 2325より古く、SD2329より新しい。

【方向】東で北に15度偏している。

【規模】全長約5～7m、上幅約30cm、深さは約20cmである。

【埋土】黒褐色粘質シルト(10YR3/1)の単層である。

【遺物】出土していない。

S D 2328 溝跡（第3図）

【位置】1区東端で発見した、南北方向の溝跡である。

【重複】他の遺構との重複はない。

【方向】北で東に10度偏している。

【規模】調査区内では約5mの長さを確認した、上幅約30cm、深さは約10cm。

【埋土】灰黄褐色粘質シルト(10YR4/2)の単層である。

【遺物】出土していない。

S D 2329 溝跡（第3図）

【位置】1区西側で発見した、南北方向の小溝跡である。

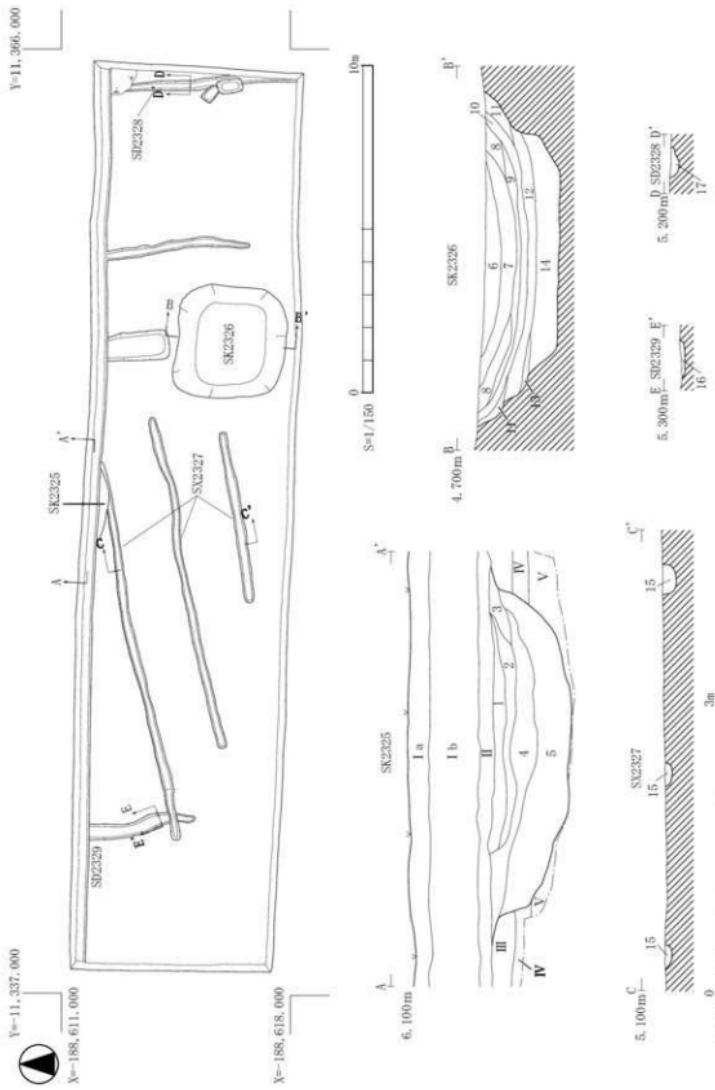
【重複】S X 2327より古い。

【方向】北で東に5度偏している。

【規模】調査区内では約3mの長さを確認した、上幅約50cm、深さは約5cm。

【埋土】褐灰色粘質シルト(7.5YR4/1)の単層である。

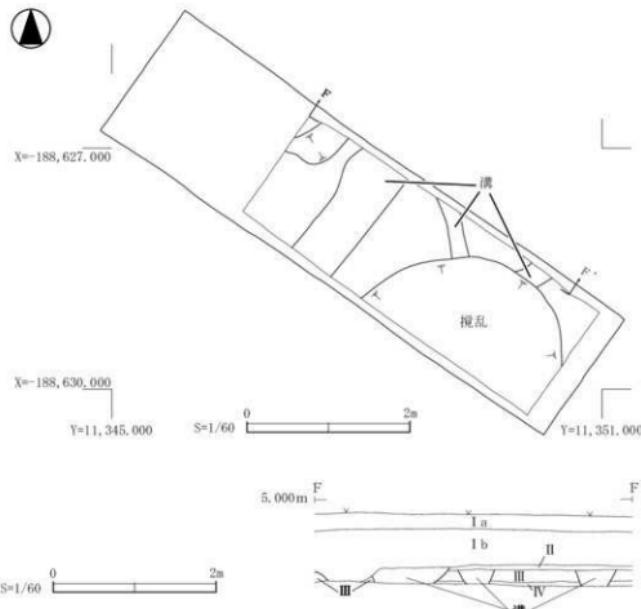
【遺物】出土していない。



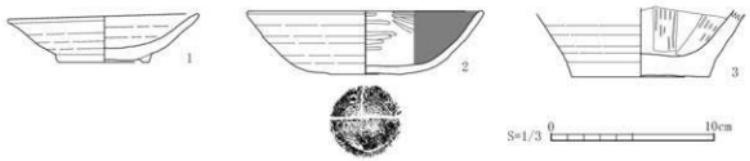
第3図 1区調査区平面・断面図

第3図 土層注記表

No.	遺構	層位	土色	土性	備考
1	SK2325	1	褐色 (7.5YR 4/3)	シルト	酸化鉄、礫を少量含む。自然堆積層。
2	SK2325	2	灰白色 (10YR8/2)	シルト	灰白色火山灰の自然堆積層。
3	SK2325	3	黄褐色 (10YR5/6)	砂質シルト	酸化鉄を含む。自然堆積層。
4	SK2325	4	褐灰色 (10YR4/1)	粘土	酸化鉄を含む。自然堆積層。
5	SK2325	5	暗灰黄色 (2.5Y5/2)	砂	黄灰色 (2.5Y4/1) の粘土がスジ状に混在。自然堆積層。
6	SK2326	1	黒褐色 (7.5YR3/2)	粘質シルト	縮りあり、粘性あり、小礫を含む。自然堆積層。
7	SK2326	2	黒色 (10YR1.7/1)	粘土	縮りあり、粘性あり。うすい黄橙色の粘土層が間に入る。自然堆積層。
8	SK2326	3	黄褐色 (2.5YR5/3)	砂質シルト	縮りあり。小礫を含む。自然堆積層。
9	SK2326	4	黄灰色 (2.5Y5/1)	粘土	縮りあり、粘性あり。炭を含む。
10	SK2326	5	灰白色 (5Y8/1)	シルト	縮りあり。灰白色火山灰の自然堆積層。
11	SK2326	6	灰黄色 (2.5Y6/2)	シルト	縮りあり。小礫と酸化鉄を含む。自然堆積層。
12	SK2326	7	にぶい黄橙色 (10YR6/4)	砂質シルト	IV層に由来する土(地山の崩落土)。自然堆積層。
13	SK2326	8	褐灰色 (10YR4/1)	粘土	縮りあり、粘性あり。カベに近くにつれて砂が混じる。自然堆積層。
14	SK2326	9	にぶい黄橙色 (10YR5/4)	粘質シルト	縮りあり。砂、IV層ブロックを含む。自然堆積層。
15	SX2327	1	黒褐色 (10YR3/1)	粘質シルト	縮りあり。酸化鉄、マンガン、黄褐色シルトブロックを含む。
16	SD2328	1	灰黃褐色 (10YR4/2)	粘質シルト	縮りあり。IV層のブロックを含む。
17	SD2329	1	褐灰色 (7.5YR4/1)	粘質シルト	縮りあり、粘性あり。酸化鉄、小礫、砂を含む。



第4図 5区調査区平面図・断面図



(単位: cm)

番号	種類	遺構	層位	特徴		法量			写真	備考	登録番号
				外面	内面	口径	底径	器高			
1	須恵系土器 高台付皿	SK2326	2層	ロクロナデ 底部:回転ヘラ切り	ロクロナデ	(11.5) 17/24	5.5 24/24	2.8	1~7		R1
2	土師器 环	SK2326	2層	ロクロナデ 底部:回転系切り	ヘラミガキ 黒色処理	(14.3) 6/24	4.4 24/24	3.9	1~8		R3
3	陶器 擂鉢	-	L II	ロクロナデ	おろし目	-	(8.3) 10/24	3.9			R5

第5図 1区出土遺物

3まとめ

今回の調査では、1区で土坑2基、溝跡2条と小溝群を発見した。SK2326の年代については中層に灰白色火山灰の一次堆積が認められることから、灰白色火山灰が降下した10世紀前葉以前から自然に堆積していたと考えられるが、詳細な時期は不明である。1区の西側で、畑に関連すると考えられるSX2327小溝群が検出されている。

また、計画地南側と西側において、遺構確認面であるIII層上面までの深さを確認するため2~5区の試掘を行ったが、2~4区ではIII層上面まで掘削したが遺構は確認されなかった。5区では南北方向に伸びる溝跡を3条確認したが、遺物は出土しなかった。今回試掘を行った箇所は、盛土工事により遺構面が保護されるため、遺構の完掘は行ってない。そのため、5区で確認した溝跡の遺構の性格は不明である。これらの結果から、地表面から75cm~94cmの深さでIII層上面となる状況を確認した。



1区全景写真（東から）



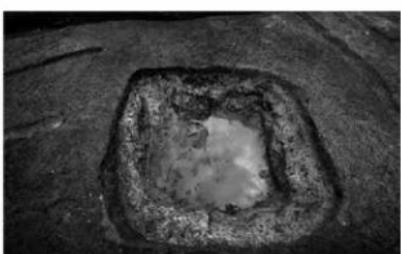
1 SK2325断面（南から）



2 SX2327完掘状況（北から）



3 SK2326断面（東から）



4 SK2326完掘状況（南から）



5 5区検出状況（東から）



6 SK2326土器出土状況（東から）



7 須恵系土器高台付皿（第5図-1）



8 土師器壺（第5図-2）

写真図版 1

XII 新田遺跡第157次調査

1 調査に至る経緯と経過

本件は、新田字後地内における個人住宅新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査である。令和3年3月4日に、事業者から当該事業計画と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。計画では、住宅基礎部分において、40か所に9mの柱状改良杭の設置が予定されており、申請地の北側隣接地では、昭和56年度に実施した第1次調査時に、堅穴建物跡や掘立柱建物跡等の遺構を発見している。そのため、当該工事により遺跡への影響が懸念されることから、工法変更による遺跡の保存協議を行ったが、提出された基礎工法以外では十分な地盤強度を得られない判断され、発掘調査による記録保存を行うこととなった。

その後、地権者から令和3年3月17日に埋蔵文化財発掘の届出、9月9日に発掘調査の承諾書が提出されたことを受け、9月15日に重機による表土掘削を行い、発生土の大部分を場外へ搬出した。

表土掘削完了後は作業員を動員して、調査区環境整備を開始した。9月29日に遺構検出作業を終え、写真撮影を行った。遺構検出の結果、古代の溝跡や柱穴等を確認した。9月30日から10月11日にかけて順次遺構の掘り下げを行い、平面図・断面図の作成を行いながら、10月6日に測量を実施した。また、調査区外周壁面や、サブトレーナーの土層観察により、Ⅲ層以下に古墳時代以前の遺構は存在しないと判断された。10月18日には調査用器材を搬出し、10月19日に全ての調査区の埋め戻しを行い、現地作業的一切を終了した。

2 調査成果

(1) 基本層序 (第4図)

I a層：現代の住宅盛土層。にぶい黄褐色砂質土 (10YR4/3)。層厚約60cmである。

I b層：現代の耕作土層。暗褐色砂質土 (10YR3/3)。層厚約70～80cmである。

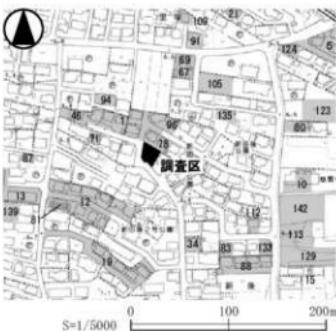
II 層：中世以降の堆積層。黒褐色粘質土 (10YR3/1)。層厚約5cmである。上面は後世の削平を受けている。

III 層：古代の遺構検出面。黄褐色粘質土 (2.5Y5/3)。層厚約20cmである。

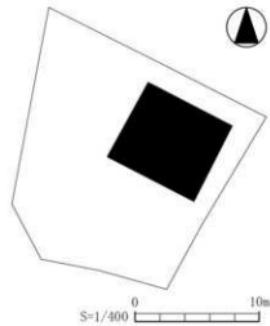
IV 層：古代の堆積層。黒褐色粘質土 (2.5Y3/1)。V層由来の砂粒少量含む。層厚約10cmである。

V 層：古代以前の堆積層。暗灰黄色砂質土 (2.5Y5/2)。酸化鉄多量含む。層厚約20～30cmである。

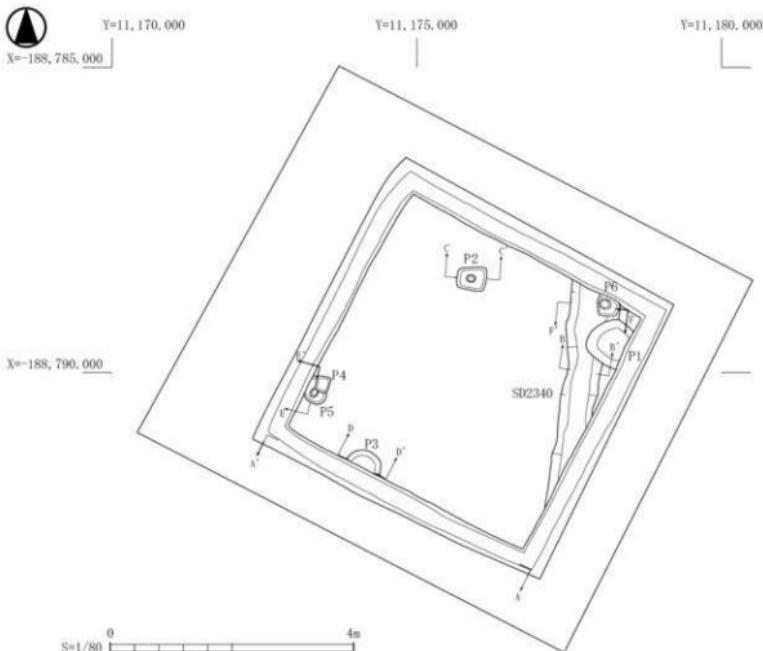
VI 層：古代以前の基盤層。黄褐色粘質土 (2.5Y5/4)。層厚約10cm以上である。



第1図 調査区位置図



第2図 調査区配置図



第3図 調査区平面図

(2) 発見遺構と遺物

S D2340溝跡（第3・5図）

【位置】調査区東側で発見した南北方向の溝跡である。方向は北で東に10度偏している。

【調査状況・重複】P1・P6と重複し、前者より古く、後者より新しい。

【形状・規模】上幅は50cm、深さ7cmである。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。

【遺物】遺物は出土していない。

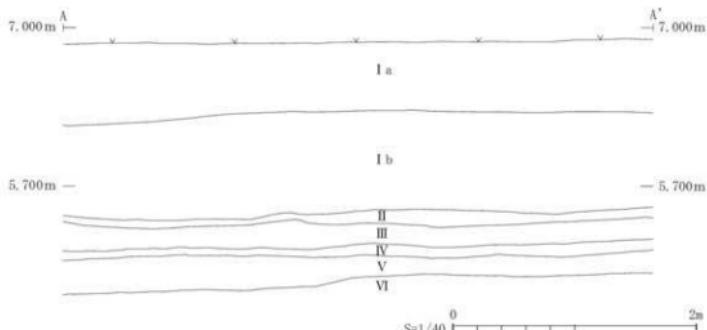
(3) その他の発見遺物

基本層III層から、須恵器壺1点（第6図）の他、須恵器甕2点が出土しているが、いずれも小破片である。

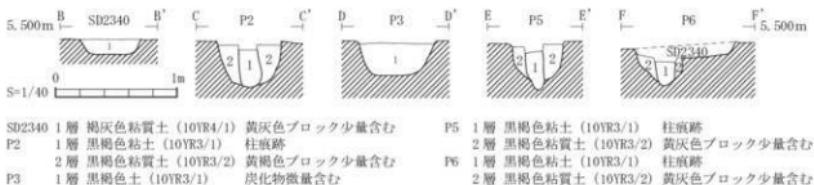
3 まとめ

（1）古代の溝跡や柱穴・ピットを発見した。出土遺物の様相から古代の遺構と考えられる。

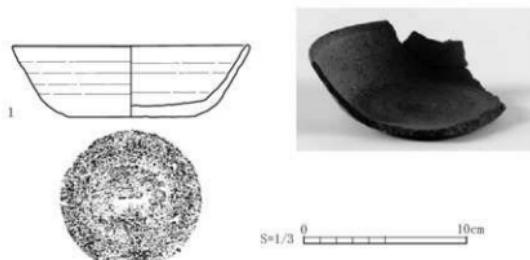
（2）北側に隣接する第1次調査においては多数の遺構が確認されたが、本調査において遺構の確認は少数であるため、当該地は遺構が希薄な区域にあたると考えられる。



第4図 調査区南壁土層断面図



第5図 遺構断面図



番号	種類	遺構	層位	特徴		法量			備考	登録番号
				外面	内面	口 残存率	底 残存率	器高		
1	須恵器環	遺構検出面	III	ロクロナデ 底部：回転ヘラ切り無調整	ロクロナデ	(14.6) 6/24	8 24/24	4.4	底部ヘラ記号 「×」	R1

第6図 出土遺物



遺構検出状況（北東から）



作業状況（南東から）



P 1 断面（東から）



S D2340 断面（南から）

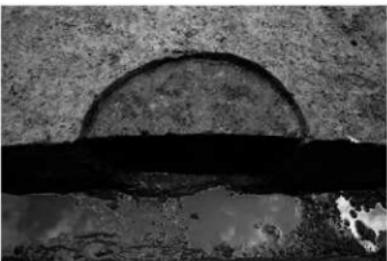


S D2340 完掘状況（南から）

写真図版 1



P 2 断面（北から）



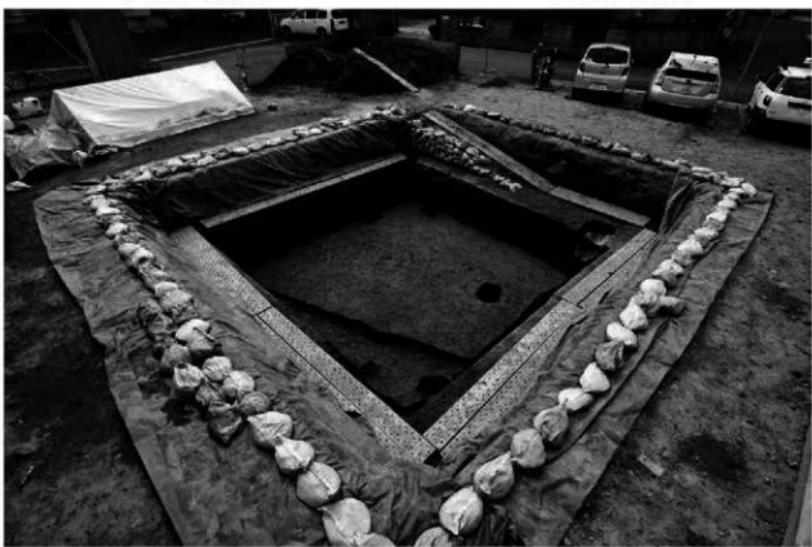
P 3 断面（南西から）



P 5 断面（東から）



P 6 断面（北から）



調査区完掘状況（北東から）

写真図版 2

13 新田遺跡第158次調査

1 調査に至る経緯と経過

本件は、南宮字庚申地内における個人住宅新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査である。令和3年6月2日に、事業者から当該事業計画と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。計画では住宅基礎部分において42か所に7.5mの柱状改良杭の設置が予定されているが、申請地付近では令和2年度に第140次調査を実施しており、現地表面から約1.2mで遺構を確認している。そのため、当該工事により遺跡への影響が懸念されることから、工法変更による遺跡の保存協議を行ったが、提出された基礎工法以外では十分な地盤強度を得られないと判断され、発掘調査による記録保存を行うこととなった。

その後、地権者から承諾書が提出されたことを受け、10月20日に重機による表土掘削を行い、発生土の大部分を場外へ搬出した。表土掘削完了後は作業員を動員して、調査区環境整備を開始した。10月25日に遺構検出作業を終え、写真撮影を行った。検出作業の結果、遺構や遺物は発見されなかった。11月12日には調査区外周壁面や、サブレンチの土層観察により、IV層以下に古墳時代以前の遺構は存在しないと判断した。11月15日から16日にかけて図面作成のため任意の測量基準杭を設置し、平面図・断面図の作成を行った。11月18日に調査区完掘状況の写真撮影、11月19日に機材撤収、11月28日に調査区の埋戻しを行い、現地作業的一切を終了した。

2 調査成果

(1) 基本層序 (第4図)

I a層：現代の宅地造成時盛土層。黄褐色砂層（2.5Y5/4）。層厚約75cmである。

I b層：現代の宅地造成時盛土層。黒褐色土（10YR3/2）。層厚約10～25cmである。

I c層：現代の耕作土。暗褐色土（10YR3/4）。層厚約30～55cmである。

II 層：中世以降の堆積層。黒褐色粘質土（10YR2/2）。層厚約10cmである。

III 層：古代の堆積層。灰黄褐色粘質土（10YR4/2）。層厚約20～30cmである。

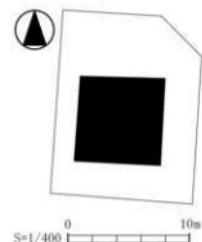
IV 層：古代の基盤層。オリーブ褐色砂質土（2.5Y4/3）。層厚約25cmである。第140次調査時の遺構検出面。

V 層：古代以前の基盤層と考えられる。黄褐色粘質土（2.5Y5/3）。層厚は約30cmである。

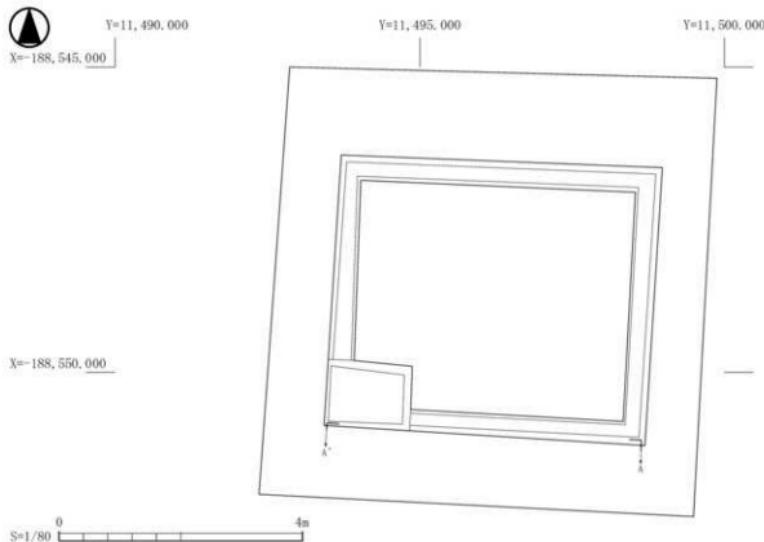
VI 層：古代以前の堆積層と考えられる。暗灰黄色粘質土（2.5Y4/2）。層厚約25cmである。有機物腐食層が互層状に堆積する。



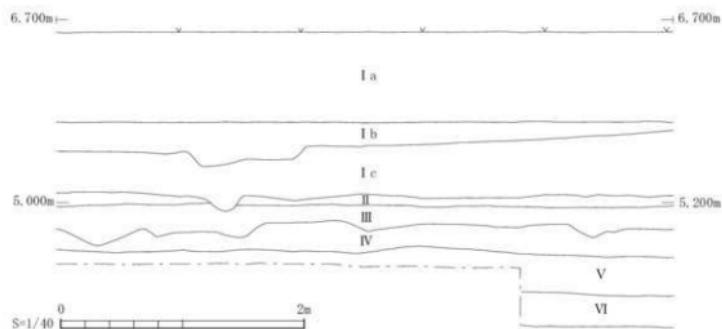
第1図 調査区位置図



第2図 調査区配置図



第3図 調査区平面図



第4図 調査区南壁土層断面図

3 まとめ

- (1) 今回の調査において、遺構・遺物は発見されなかった。
- (2) 新田遺跡第140次調査においては希薄ながら遺構が確認されているが、当該地は遺構が認められない範囲にあたると考えられる。



調査区完掘状況（北東から）



調査区南壁断面（北から）



作業状況（南東から）

写真図版

14 新田遺跡第159次調査

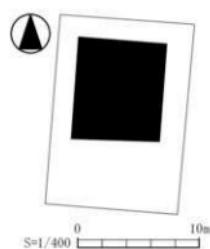
1 調査に至る経緯と経過

本件は、南宮字庚申地内における個人住宅新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査である。令和3年7月26日に、事業者から当該事業計画と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。計画では住宅基礎部分において34か所に7.59mの柱状改良杭の設置が予定されているが、申請地付近では令和2年度に第140次調査を実施しており、現地表面から約1.2mで遺構を確認している。そのため、当該工事により遺跡への影響が懸念されることから、工法変更による遺跡の保存協議を行ったが、提出された基礎工法以外では十分な地盤強度を得られないと判断され、発掘調査による記録保存を行うこととなった。

その後、地権者から承諾書が提出されたことを受け、10月21日に重機による表土掘削を行い、発生土の大部分を場外へ搬出した。表土掘削完了後は作業員を動員して、調査区環境整備を開始した。11月4日に構造検出作業を終え、写真撮影を行った。検出作業の結果、古代の溝跡と考えられる遺構を発見し、随時掘下げを行った。11月12日には調査区外周壁面や、サブトレレンチの土層観察により、IV層以下に古墳時代以前の遺構は存在しないと判断した。11月15日から16日にかけて図面作成のため任意の測量基準杭を設置し、平面図・断面図の作成を行った。11月18日に調査区完掘状況の写真撮影、11月19日に機材撤収、11月26日に調査区の埋戻しを行い、現地作業の一切を終了した。



第1図 調査区位置図

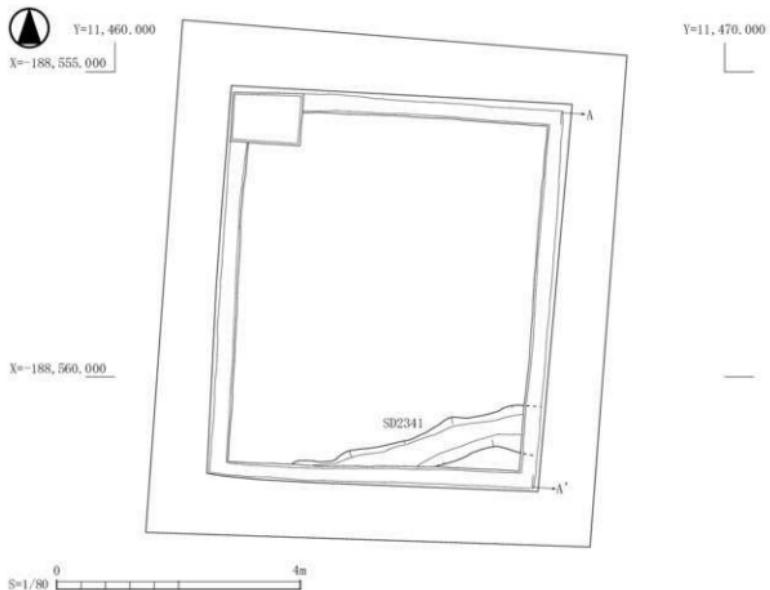


第2図 調査区配置図

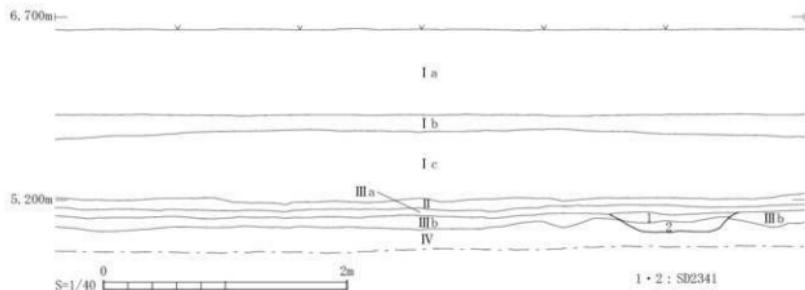
2 調査成果

(1) 基本層序 (第4図)

- I a層：現代の宅地造成時盛土層。黄褐色砂層（2.5Y5/4）。層厚約70cmである。
- I b層：現代の宅地造成時盛土層。黒褐色土（10YR3/2）。層厚約15cmである。
- I c層：現代の耕作土。暗褐色土（10YR3/4）。層厚約60cmである。
- II 層：中世以降の堆積層。黒褐色粘質土（10YR2/2）。層厚約10cmである。
- IIIa層：古代の堆積層。灰黄褐色粘質土（10YR4/2）。層厚約5cmである。
- IIIb層：古代の遺構検出面。黒褐色土（10YR2/2）。層厚約10cmである。褐色砂質ブロック少量含む。
- IV 層：古代の基盤層。オリーブ褐色砂質土（2.5Y4/3）。層厚約25cmである。酸化鉄多量含む。
- V 層：古代以前の基盤層と考えられる。黄褐色粘質土（2.5Y5/3）。層厚は約30cmである。
- VI 層：古代以前の堆積層と考えられる。暗灰黄色粘質土（2.5Y4/2）。層厚約25cmである。有機物腐食層が互層状に堆積する。



第3図 調査区平面図



第4図 調査区東壁土層断面図

(2) 発見遺構と遺物

S D2341溝跡（第3・4図）

【位置】調査区南側で発見した東西方向の溝跡である。方向は東で北に13度偏している。

【調査状況・重複】重複関係は認められない。

【形状・規模】上幅は107cm、深さ15cmである。底面は平坦であり、壁は緩やかに立ち上がる。

【埋土】2層に区分される。1層は黒褐色粘質土(10YR3/2)で、粘性やや強く、締まりは密、混入物をあまり含まない均質な堆積層。2層は黒褐色粘質土(10YR3/2)で、粘性やや強く、締まりは密、黄褐色砂質ブロック少量含む。

【遺物】遺物は出土していない。

3まとめ

- (1) 古代の溝跡を発見した。
- (2) 新田遺跡第140次調査成果と同様に、当該地においても希薄ながら遺構が分布している。



遺構検出状況（南西から）



SD2341 溝跡断面（西から）



調査区北壁土層断面（南から）

写真図版

15 新田遺跡第161次調査

1 調査に至る経緯と経過

本件は、新田字六歳地内における個人住宅新築工事に伴う確認調査である。令和3年9月28日に、事業者から当該事業計画と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。計画では、住宅基礎部分において、54か所に8mの柱状改良杭の設置が予定されており、当該工事により遺跡への影響が懸念された。このため、工法変更による遺跡の保存協議を行ったが、提出された基礎工法以外では十分な地盤強度を得られないと判断されたことから、発掘調査による記録保存が必要となった。

その後、地権者から発掘調査の承諾書が提出され、重機提供の申し出を受けたことから、12月22日に2箇所のトレンチを設定し、重機により表土掘削を行った。

トレンチ壁面の土層観察から当該地は谷地であり、遺構が残存していないと判断されるため、トレンチの写真撮影及び図面作成を行い、同日中に埋戻して現地作業の一切を終了した。

2 調査成果

I a層：現代の住宅盛土層。褐色灰色碎石（10YR6/1）。層厚約30cmである。

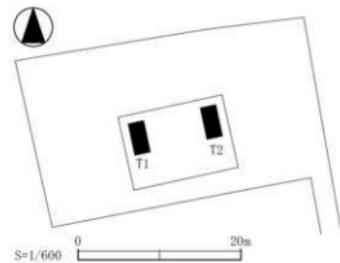
I b層：近代以降の耕作土層。灰黄褐色土（10YR5/2）。層厚約40cmである。ビニールが混入する。

II 層：湿地状堆積層。黒褐色粘質土（10YR3/1）。層厚約30cmである。

III 層：河川堆積層。黄褐色砂質土（2.5Y5/4）。層厚約40cm以上である。



第1図 調査区位置図



第2図 調査区配置図



T 2 掘削状況（南から）



T 2 調査区東壁断面（西から）

16 山王遺跡第225次調査

1 調査に至る経緯と経過

本件は、南宮字町における個人住宅新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査である。令和2年9月29日、事業者から当該事業計画と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。計画は、基礎工事で現地表から42cmの深さで掘削した後、6.5mの深さまで35か所に杭工事を行うものである。

申請地周辺では、東側近接地で平成28年度に第177次調査を実施しており、現表土から約2.3mで遺構を発見しているため、遺跡への影響が懸念された。このため、工法変更による遺跡の保存協議を行ったが、提出された基礎工法以外では十分な地盤強度を得られない判断したことから、発掘調査による記録保存を行うこととなった。

その後、4月2日に地権者から発掘調査の依頼書及び承諾書が提出されたことを受け、4月13日には重機による掘削を開始した。申請地の敷地範囲が狭隘であることから、発生土の大部分は場外へ搬出した。

掘削の結果、現代の盛土及び近世以降の耕作土の下層で、小規模な柱穴や溝跡を確認し、表土中から近世の捕鉢や古代の須恵器片が出土したことから、古代及び近世の遺構の存在が想定された。同日夕方には概ね掘削を完了し、調査区南東部に出入用のスロープを造成した後、環境整備作業に移った。

同月14日には作業員を動員して土嚢作り及びシートの設置、排水用側溝の切り回しを行った。

その後16日には遺構検出作業を終え、写真撮影を行った。同月21日には平面図作成のため任意の測量基準杭を設置し、同月22日～5月6日にかけて平面図・断面図の作成を行いながら、順次遺構の掘り下げを行った。また、調査区外周壁面の土層観察により、IV層以下に古墳時代以前の遺構は存在しなかった。

同月7日には調査用器材を搬出し、同月10日に調査区の埋め戻しを行った。同月11日に標高移動を行い、現地作業の一切を終了した。

2 調査成果

(1) 基本層序（第2図）

I層：現代の盛土層。碎石を主体とするIa層は調査区全体で層厚約70cmであり、粘質土を主体とするIb層は約55cmである。

II層：旧耕作土層。暗褐色シルト(10YR3/4)。層厚約10cm～35cmである。

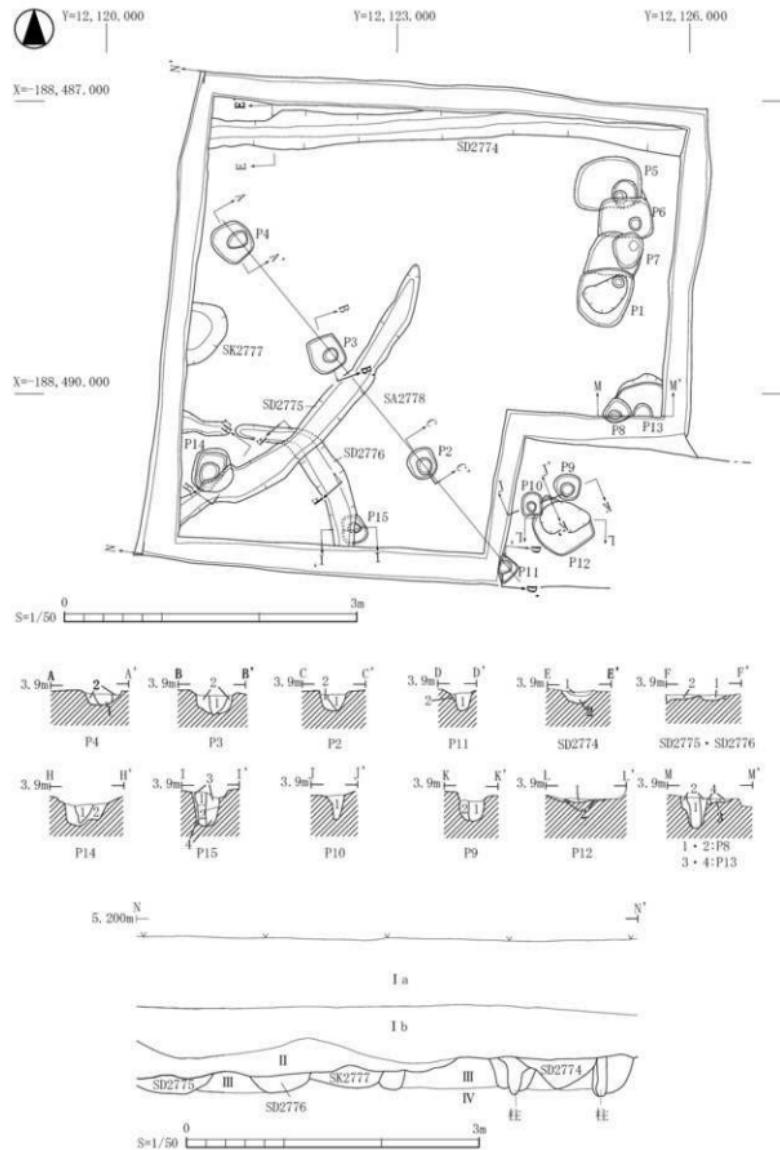
III層：古代及び近世の遺構検出面である。にぶい黄褐色シルト(10YR4/3)。層厚約14cm～16cmである。

IV層：黒褐色シルト(10YR2/2)。層厚約10cmである。

V層：灰黄褐色シルト(10YR4/2)。層厚約10cmである。



第1図 調査区位置図



第2図 調査区平面図・断面図

(2) 発見遺構と遺物

S D2774溝跡（第2図）

【位置】調査区北端部で発見した東西方向の溝跡である。方向は東で北に12度偏している。

【調査状況・重複】西壁面で柱穴と重複しており、これらより新しい。

【形状・規模】幅は約45cmである。底面はV字形であり、壁は緩やかに立ち上がる。

【埋土】単層の褐灰色(10YR4/1)シルトである。粘性無し。縮まり弱。

【遺物】土師器坏、須恵器坏が出土している。

S D2775溝跡（第2図）

【位置】調査区南西部で発見した溝跡である。方向は東で北に50度偏している。

【調査状況・重複】S D2776、P14と重複しており、それより新しい。

【形状・規模】幅は約35cmである。底面は概ね平坦であり、壁は緩やかに立ち上がる。

【埋土】褐色(10YR3/1)シルトの单層である。粘性弱。縮まり強。

【遺物】遺物は出土していない。

S D2776溝跡（第2図）

【位置】調査区南西部で発見した溝跡である。調査区南東部で直角気味に屈曲する。

【調査状況・重複】S D2775、P15と重複しており、前者より古く後者より新しい。

【形状・規模】上幅は約35cmである。底面は概ね平坦であり、壁は緩やかに立ち上がる。

【埋土】褐灰色(10YR4/1)シルトの单層である。粘性弱。縮まり中。φ 2mm程度の炭化物を少量含む。

【遺物】遺物は出土していない。

S K2777土坑（第2図）

【位置】調査区中央西端部で発見した土坑である。

【調査状況・重複】西壁でSD2776及び小ピットと重複しており、前者より古く後者より新しい。

【形状・規模】平面楕円形であり、長軸約75cm、短軸約45cmである。

【埋土】単層の褐灰色シルト(10YR5/1)である。縮まり弱。粘性弱。φ 2mm程度の炭化物及びφ 4mm程度の焼土を多量に含む。

【遺物】土師器甕A類2点、須恵器坏B II類2点が出土している。

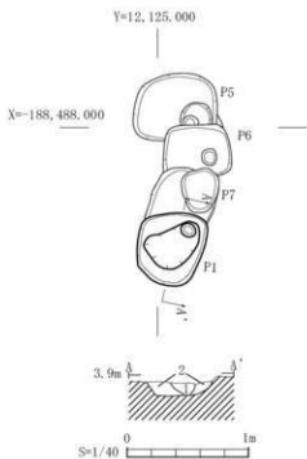
S A2778柱列跡（第2図）

【位置】調査区中央西寄りで発見した柱列跡である。掘立柱建物を構成する可能性もあるが、調査範囲内では確認できず、全容は不明である。

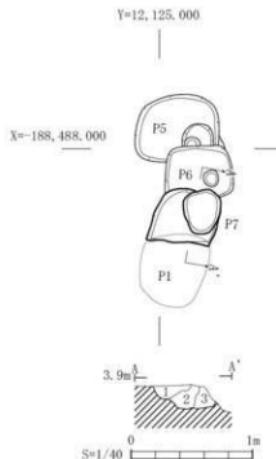
【調査状況・重複】他の遺構との重複はない。

【形状・規模】調査区内で確認できた規模は、東西3間以上である。柱はいずれも抜き取られている。掘方直径はP 4で測ると30～45cmである。

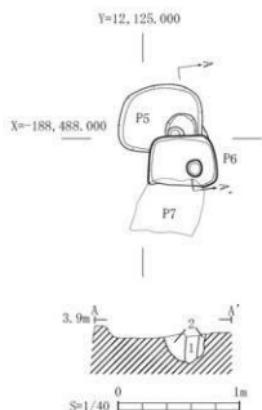
【埋土】1層は柱抜き取り穴である。均質な黒褐色粘土(10YR3/2)である。縮まり弱。粘性強。2層は掘方埋土である。黒褐色粘土(10YR3/2)を主体とし、φ 3mm程度の淡黄色シルト(2.5Y8/3)を斑状に含む。



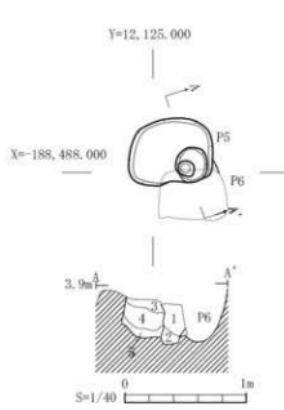
第3図 P1 平面・断面図



第4図 P7 平面・断面図



第5図 P6 平面・断面図



第6図 P5 平面・断面図

【遺物】抜き取り穴から土師器壺A類及び近世以降の陶器が出土している。

P 1 (第3図)

【位置】調査区北東部で発見した柱穴である。柱は切り取られており、底面付近にのみ柱痕跡が残存している。

【調査状況・重複】P 7と重複しており、これより新しい。

【形状・規模】方形を基調としており、掘方直径は約65cm、柱痕跡の直径は約13cmである。

【埋土】1層は柱痕跡である。黒褐色粘土(10YR3/2)。締まり弱。粘性弱。2層は掘方埋土である。暗灰黄色シルト(2.5Y4/2)を主体とし、 ϕ 6mm程度の斑状淡黄色シルト(2.5Y8/3)を多量に含む。

【遺物】1層から陶器塊(小野相馬写真図版1-4)、2層から染付磁器碗(肥前系写真図版1-7)が出土している。

P 7 (第4図)

【位置】調査区北東部で発見した柱穴である。柱は抜き取られた後人為的に埋め戻されている。

【調査状況・重複】P 1・P 6と重複しており、前者より古く後者より新しい。

【形状・規模】方形を基調としており、掘方直径は残存部分で約48cm、抜取り穴の直径は約40cmである。

【埋土】1・2層は抜き取り穴である。1層は微量の酸化鉄を含む黄灰色シルト(2.5Y4/1)である。締まり強。粘性強。2層は灰色シルト(5Y5/1)を主体とし、 ϕ 2mm程度の淡黄色シルト(5Y8/3)を少量含む。締まり強。粘性弱。3層は掘方埋土である。灰色シルト(5Y5/1)を主体とし、 ϕ 5mm程度の浅黄色シルト(5Y8/3)を多量に含む。

【遺物】1層から瓦質土器、加工石が出土している。

P 6 (第5図)

【位置】調査区北東部で発見した柱穴である。柱は抜き取られている。

【調査状況・重複】P 7・P 5と重複しており、前者より古く後者より新しい。

【形状・規模】方形を基調としており、掘方直径は約55cm、抜き取り穴の直径は約14cmである。

【埋土】1層は柱抜き取り穴である。黄灰色シルト(2.5Y4/1)を主体とし、 ϕ 5mm程度の浅黄橙色シルトブロック(10YR8/4)を多量に含む。橙色焼土(7.5YR6/6)を少量含む。締まり弱。粘性弱。2層は掘方埋土である。黄灰色シルト(2.5Y4/1)を主体とし、浅黄橙色シルト(10YR8/4)、焼土(7.5YR6/6)、炭化物、灰白色火山灰を少量含む。締まり強。粘性中程度。

【遺物】須恵器蓋が出土している。

P 5 (第6図)

【位置】調査区北東部で発見した柱穴である。柱は切り取られている。

【調査状況・重複】P 6と重複しており、これより古い。

【形状・規模】方形を基調としており、掘方直径は約56cmである。柱痕跡の直径は約16cmである。

【埋土】1層は切り取り穴、2層は柱痕跡である。3～5層は掘方埋土である。1層は黄灰色シルト(2.5Y4/1)である。焼土(7.5YR6/6)を少量含む。2層は黒褐色粘土(10YR3/1)である。浅黄色シルト

(10YR8/3)を少量含む。3層は浅黄橙色シルト(10YR8/3)を主体とし、黄灰色シルト(2.5Y4/1)を少量含む層、4層は黄灰色シルト(2.5Y4/1)を主体として浅黄橙色シルト(10YR8/3)を少量含む層、5層は3層と相似する層である。

【遺物】遺物は出土していない。

3まとめ

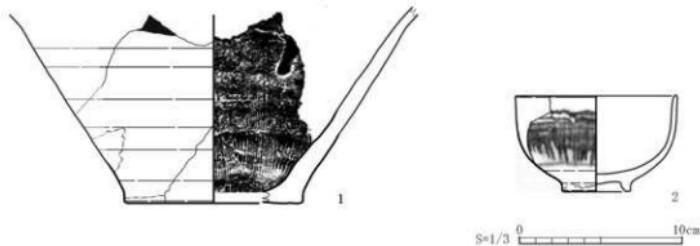
- (1) 古代及び近世の柱穴、溝跡を発見した。
- (2) 当地区付近には伊達家臣の成田氏の屋敷が所在したとされる（多賀城市教育委員会2021a）。今回の調査区及び周辺で発見された近世の掘立柱建物は、成田氏の屋敷と関わる可能性がある。

参考文献

多賀城市教育委員会2018「山王遺跡第177次調査」『新田・山王遺跡ほか一震災復興関係遺跡発掘調査報告Ⅰ—』多賀城市文化財調査報告書第137集, pp. 231-290

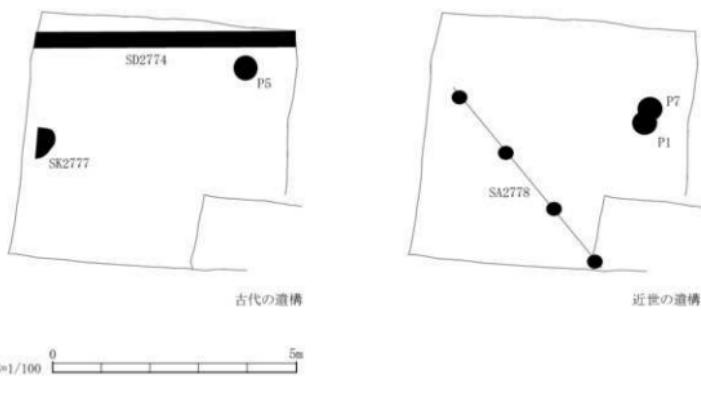
多賀城市教育委員会2021a『多賀市の歴史遺産 南宮村 山王村』多賀城市文化財調査報告書第147集

多賀城市教育委員会2021b「IX 山王遺跡第221次調査」『多賀城市内の遺跡2—令和2年度発掘調査報告書—』, pp. 25-32

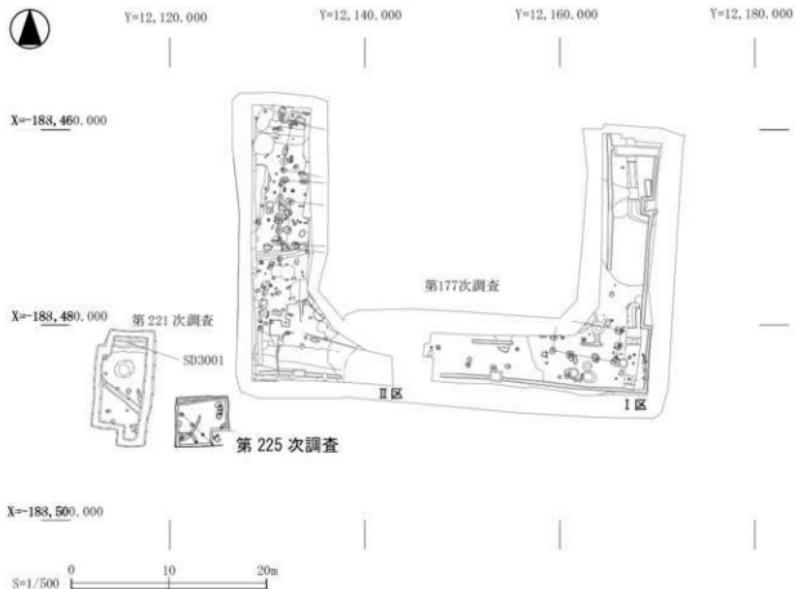


番号	種類	遺構	層位	特徴		法量			備考	登録番号
				外面	内面	口径 底径 残存率	器高			
1	無袖陶器 擂鉢	-	L1	体部下半まで鉄サビ 後、上半に鉄軸。 おろし目 14本 工具	体部下半まで鉄サビ 後、上半に鉄軸。 おろし目 14本 工具	- (11.0) 17/24	8.0	-	岸	R1
2	施釉陶器 丸壺	-	L1	下地に灰オリーブ釉 鉄軸流し掛け	灰オリーブ釉	(10.0) 13/24	(4.3) 22/24	5.9	大堀相馬	R2

第7図 第225次調査出土遺物



第8図 造構変遷模式図

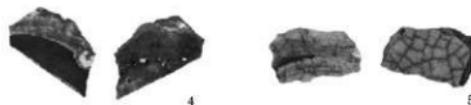


第9図 第225次調査と近隣の調査区合成図



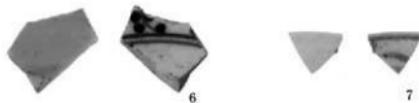
S=1/3 0 10cm

- 1 : 施釉陶器壙林 (岸 L1 第 7 図-1 R-1)
 2 : 施釉陶器小塊 (大堀相馬 L1 第 7 図-2 R-2)
 3 : 施釉陶器壙皿類 (志野 L1 R-4)



4

5



6

7

- 4 : 施釉陶器壙 (小野相馬 P1 挿取穴 R-7)
 5 : 施釉陶器壙皿類 (志野 R-5)
 6 : 磁器碗 (肥前系 L1 R-3)
 7 : 磁器碗 (肥前系 P1 插方埋土 R-8)

S=1/2 0 10cm

写真図版 1



遺構検出状況（東から）



P 4 断面（西から）



P 8・P 13 重複状況（南から）



P 3 断面（西から）



P 2 検出状況（西から）

写真図版 2



S D2775・S D2776 重複状況（北東から）



S D2776・P 15 重複状況（北から）



P 9 断面（北から）



P 14 断面（東から）



P 1 断面（西から）



P 7 断面（西から）



P 6 断面（西から）



P 5 断面（西から）

写真図版 2

17 山王遺跡第227次調査

1 調査に至る経緯と経過

本件は、山王字西山王における個人住宅新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査である。令和3年3月17日、事業者から当該事業計画と埋蔵文化財の関わりについての協議書が提出された。計画は、対象面積1222.08m²の事業地内において、約120m²の住宅を建築するものである。基礎部分の工事では、現地表から9mの深さまで46か所にパイプを打設するものである。

申請地周辺では、東側近接地で平成17年度に第88次調査を実施しており、現表土から約1mで遺構を発見しているため、遺跡への影響が懸念された。このため、工法変更による遺跡の保存協議を行ったが、提出された基礎工法以外では十分な地盤強度を得られないと判断されたことから、発掘調査による記録保存を行うこととなった。

その後、5月24日に地権者から発掘調査の依頼書及び承諾書が提出されたことを受け、5月28日には重機による掘削を開始した。なお本事業については、東日本大震災の復興に伴う住宅建設工事であることから、第一面の確認調査に留め、遺跡を性格付ける重要な遺構のみ完掘の対象とした。

掘削の結果、現代の盛土及び近世以降の耕作土の下層で、T字に接続する区画溝や井戸跡を確認した。同日夕方には概ね掘削を完了し、調査区南西部に出入用のスロープを造成した後、環境整備作業に移った。6月1日には作業員を動員して土壌作り及びシートの設置、排水用側溝の切り回しを行った。

その後同月2日には遺構検出作業を終え、写真撮影を行った。同月6月8日には平面図作成のため任意の測量基準杭を設置し、同月9日～25日にかけて平面図・断面図の作成を行いながら、順次遺構の掘り下げを行った。

同月30日には調査用器材を搬出し、7月1日に調査区の埋め戻しを行い、現地作業の一切を終了した。

2 調査成果

(1) 基本層序 (第3図)

I 層：現代の耕作土。暗灰黄色シルト(2.5Y4/2)。近代の陶磁器片を含む。層厚約60～70cmである。

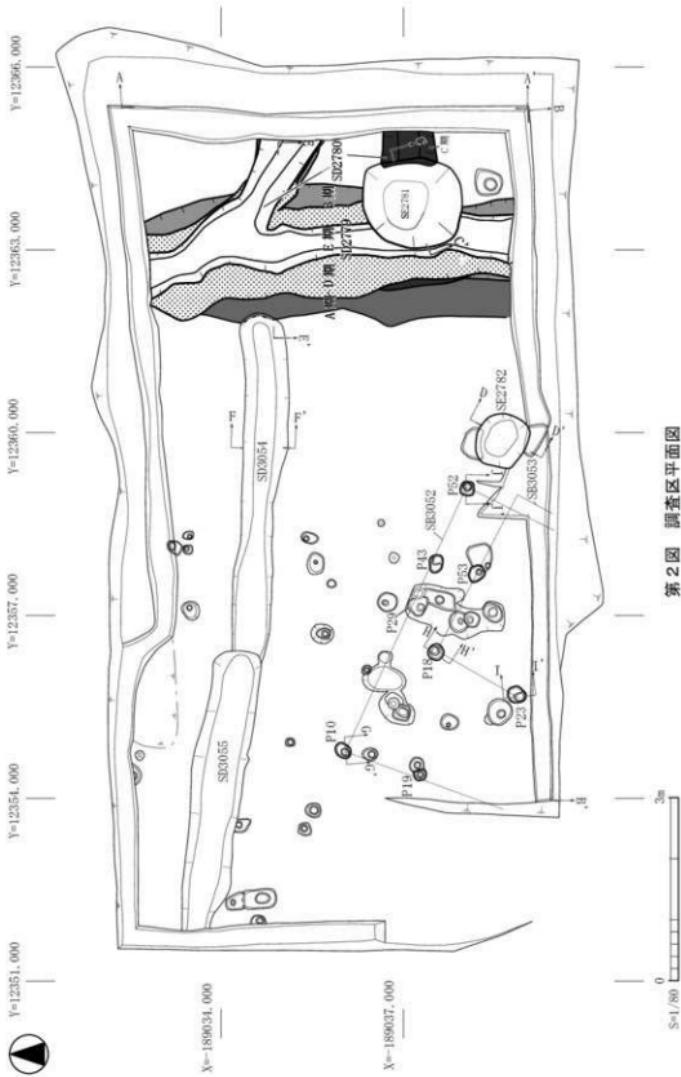
II 層：古代の最終堆積層。黒色粘土(2.5Y2/1)。SD2779・2780廃絶後の堆みに薄く堆積する。層厚約6～10cmである。

IIIa層：黄灰色シルト(2.5Y4/1)。粘性中程度。微量の酸化鉄を含む。層厚約18～20cmである。

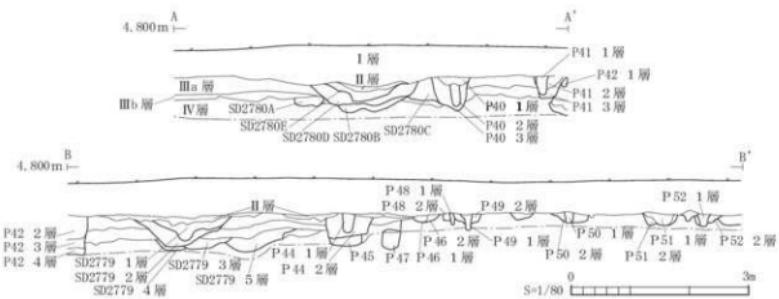
IIIb層：黄灰色砂質シルト(2.5Y4/1)。粘性弱。φ1～2mm程度の白色粒を少量含む。

IV 層：淡黄色細砂(2.5Y8/3)。層厚は50cm以上である。



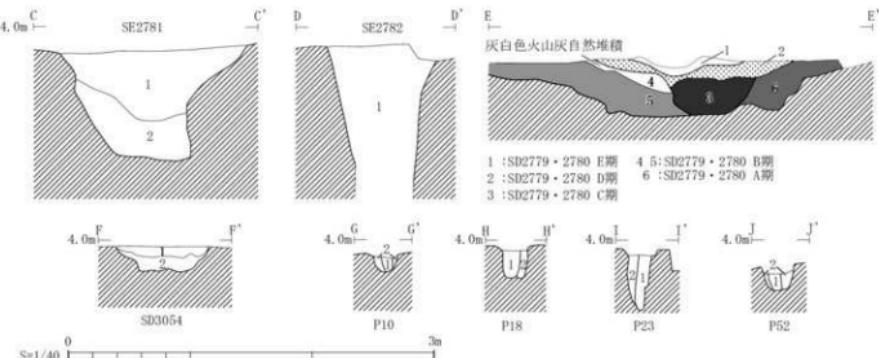


第2図 調査区平面図



道 構	層 位	土 色	土 性	備 考
P40	1層	黒灰色 (2, 5Y 4/1)	シルト	柱状取り抜き穴、綿毛り強、粘性弱。
	2層	黒褐色 (2, 5Y 3/1)	粘土	柱状強、綿毛り強、粘性強。
	3層	黒灰色 (2, 5Y 3/1)	シルト	触力強、綿毛り強、粘性弱。φ 2 mm程度の灰白色火山灰を少量含む。
P41	1層	黒褐色 (2, 5Y 3/1)	シルト	柱状取り抜き穴、綿毛り中弱、粘性弱。φ 2 ~ 5 mm程度の化成物及び堆土粒を含む。
	2層	黒灰色 (2, 5Y 4/1)	シルト	触力強、綿毛り強、粘性弱。φ 2 ~ 5 mm程度の白色粘土ブロック (10YR2/1) を少量含む。
	3層	黒灰色 (2, 5Y 4/1)	シルト	触力強、綿毛り強、粘性弱。φ 2 ~ 5 mm程度の地山ブロック (5YR2/3) を少量含む。
P42	1層	黒褐色 (2, 5Y 4/1)	シルト	触力強、綿毛り強、粘性弱。φ 2 mm程度の黑色粘土ブロック (10YR2/1) を少量含む。
	2層	黒灰色 (2, 5Y 4/2)	シルト	触力強、綿毛り強、粘性弱。φ 3 ~ 4 mm程度の黒色粘土ブロック (5YR2/3) を多量含む。
P44	1層	黒褐色 (2, 5Y 4/1)	シルト	触力強、綿毛り強、粘性弱。φ 2 ~ 3 mm程度の地山ブロック (5YR2/3) を少量含む。
	2層	黒灰色 (2, 5Y 4/1)	シルト	柱状強、綿毛り強、粘性弱。φ 2 ~ 3 mm程度の化成物・堆土粒を少量含む。
	3層	黒褐色 (2, 5Y 4/1)	シルト	触力強、綿毛り強、粘性弱。φ 2 ~ 3 mm程度の黑色粘土ブロック (10YR2/1) を少量含む。
P45	1層	黒褐色 (2, 5Y 4/1)	シルト	触力強。
P46	1層	黒灰色 (2, 5Y 6/2)	シルト	柱状取り抜き穴、綿毛り強、粘性弱。
P47	1層	灰褐色 (2, 5Y 6/2)	シルト	触力強、綿毛り強、粘性弱。φ 2 mm程度の堆土粒を少量含む。
P48	1層	黒褐色 (2, 5Y 6/1)	粘土	触力強。
P49	1層	黒灰色 (2, 5Y 6/1)	シルト	柱状取り抜き穴、綿毛り強、粘性弱。φ 3 ~ 4 mm程度の地山ブロック (5YR2/3) を微量含む。
	2層	黒褐色 (2, 5Y 6/1)	シルト	触力強、綿毛り強、粘性弱。φ 1 ~ 2 mm程度の黒褐色粘土 (2, 5Y 6/1) を多量含む。
P50	1層	黒褐色 (2, 5Y 6/1)	シルト	柱状取り抜き穴、綿毛り強、粘性弱。φ 3 ~ 4 mm程度の地山ブロック (5YR2/3) を微量含む。
	2層	黒灰色 (2, 5Y 6/1)	シルト	触力強、綿毛り強、粘性弱。φ 2 ~ 3 mm程度の地山ブロック (5YR2/3) を微量含む。
P51	1層	黒褐色 (2, 5Y 6/1)	シルト	柱状取り抜き穴、φ 2 ~ 3 mm程度の地山ブロック (5YR2/3) を微量含む。
	2層	黒灰色 (2, 5Y 6/2)	シルト	触力強、綿毛り強、粘性弱。φ 2 ~ 3 mm程度の地山ブロック (5YR2/3) を微量含む。
P52	1層	黒褐色 (2, 5Y 6/1)	シルト	柱状取り抜き穴、φ 2 ~ 3 mm程度の地山ブロック (5YR2/3) を微量含む。
	2層	黒灰色 (2, 5Y 6/1)	シルト	触力強、綿毛り強、粘性弱。φ 2 ~ 3 mm程度の地山ブロック (5YR2/3) を微量含む。

第3図 調査区断面図



第4図 遺構断面図

（2）発見遺構と遺物

SD2779・2780溝跡（第2・3・4・6図）

南北溝S D2779と東西溝S D2780は、調査区東壁付近で接続し、ともに5時期の変遷を確認したことから、ここでは一連の区画溝として記述する。

【位置】調査区東半部で発見した。

【変遷】それぞれ古い順にA～E 5時期の変遷を確認した。東西方向のSD2780はC期で一端南側に付け替えが行われるもの、D・E期にはB期とほぼ同一地点に作り直される（第6図）。

【重複】S E2781と重複しており、これより古い。

A期

【規模】上幅は東壁で測ると50.4cmである。

【方向】SD2779はほぼ真北であり、SD2780は東で南に約8度偏している。

【壁・底面】壁は緩やかに立ち上がり、底面はU字形である。

【埋土】暗灰黄色粘土（2.5Y4/2）である。縮まり強。粘性中。底面付近にφ 3～4mm程度の淡黄色細砂ブロックを少量含む。粘性弱。縮まり強。

【遺物】須恵器壺（B V類 第5図-1）が出土している。

B期

【規模】上幅は東壁で測ると1.14mである。

【方向】SD2779はほぼ真北であり、SD2780は東で南に約16度偏している。

【壁・底面】壁は緩やかに立ち上がり、底面はU字形である。

【埋土】上層は灰白色火山灰の自然堆積層であり、下層は黒褐色粘土（2.5Y3/1）である。縮まり弱。

【遺物】須恵器壺、土師器壺B類、骸骨が出土している。

C期

【規模】上幅は東壁で測ると49.4cmである。

【方向】SD2779はほぼ正方位であり、SD2780はほぼ真西に伸びる。

【壁・底面】壁は緩やかに立ち上がり、底面はU字形である。

【埋土】黄灰色シルト（2.5Y4/1）。φ 3～4mm程度の地山ブロックを多量に含む。人為堆積か。

【遺物】土師器壺（B V類 墨書「大？」 第5図-3）が出土している。

D期

【規模】上幅は東壁で測ると約1.79mである。

【方向】SD2779はほぼ正方位であり、SD2780は東で南に約18度偏している。

【壁・底面】壁は緩やかに立ち上がり、底面はおよそ平坦である。

【埋土】黄灰色シルト（2.5Y4/1）φ 3～4mm程度の灰白色火山灰ブロックを少量含む。縮まり中。粘性弱。

【遺物】土師器壺（B V類 第5図-2）、須恵器壺、不明土製品（写真図版2-10）が出土している。

E期

【規模】上幅は東壁で測ると最大約1.21mである。

【方向】SD2779はほぼ正方位であり、SD2780は東で南に約18度偏している。

【壁・底面】壁は緩やかに立ち上がり、底面はおよそ平坦である。

【埋土】黒褐色シルト（2.5Y3/1）。縮まり中。粘性弱。φ 1～2mm程度の白色粒を少量含む。

【遺物】須恵系土器高台付皿（第5図-4）が出土している。

S D3054溝跡（第2・4図）

【位置】調査区中央北寄りで発見した東西方向の溝跡である。S D2780の延長に位置しており、B～E期のいずれかの時期に機能した区画溝とみられる。

【方向】東で約3度南に偏している。

【重複】S D3055、S D2779Aと重複しており、前者より古く後者より新しい。

S D3055溝跡（第2図）

【位置】調査区北西隅で発見した東西方向の溝跡である。S D2780の延長に位置しており、B～E期のいずれかの時期に機能した区画溝とみられる。

【方向】東で約10度南に偏している。

【重複】S D3054、小ピットと重複しており、これより新しい。

S B3052掘立柱建物跡（第2・4図）

【位置】調査区中央部やや南西寄りで発見した掘立柱建物である。

【桁行・梁行】桁行3間以上、梁行2間以上である。

【柱痕跡・柱抜取穴の有無】P 52、P 10、P 19で柱痕跡を確認した。

【重複】S B3053と重複しているが、直接的な新旧関係は不明である。

【掘方】平面形は円形を基調としており、直径はP 10で測ると約20cmである。

【柱痕跡】平面形は円形であり、直径はP 10で測ると約9.1cmである。

【遺物】遺物は出土していない。

S B3053掘立柱建物跡（第2・4図）

【位置】調査区中央部やや南西寄りで発見した掘立柱建物である。

【桁行・梁行】桁行2間以上、梁行2間以上である。

【柱痕跡・柱抜取穴の有無】P 53、P 18、P 23で柱痕跡を確認した。

【重複】S B3052と重複しているが、直接的な新旧関係は不明である。

【掘方】平面形は円形を基調としており、直径はP 23で測ると約30cmである。

【柱痕跡】平面形は円形であり、直径はP 23で測ると約10cmである。

【遺物】遺物は出土していない。

S E2781井戸跡（第2・4図）

【位置】調査区東半部で発見した素掘りの井戸跡である。

【重複】S D2779・2780と重複しており、これより新しい。

【規模】直径は約1.24m、深さは74cmである。

【埋土】埋土は2層に分層される。1層は黒色粘土(10YR2/1)、2層は黒褐色粘土(10YR3/1)である。いずれも植物遺体(葉・樹木枝等)を多量に含む。

【遺物】S D2779 E由来とみられる須恵系土器高台付皿(第5図-6)が出土している。

S E2782井戸跡（第2・4図）

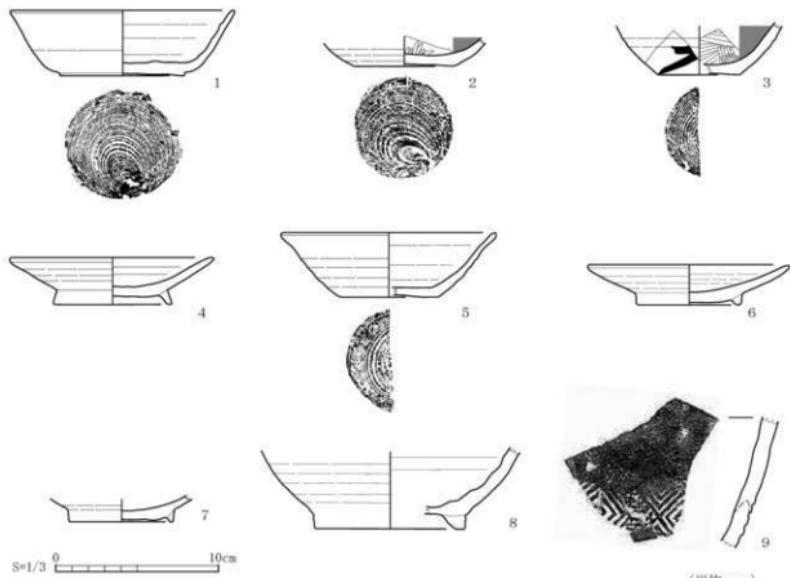
【位置】調査区中央部やや南東寄りで発見した素掘りの井戸跡である。

【重複】柱穴と重複しており、これより新しい。

【規模】直径は約88cm、深さは120cm以上である。

【埋土】黒色粘土(10YR2/1)。粘性強。締まり強。炭化物、黄褐色土ブロック、木片を少量含む。

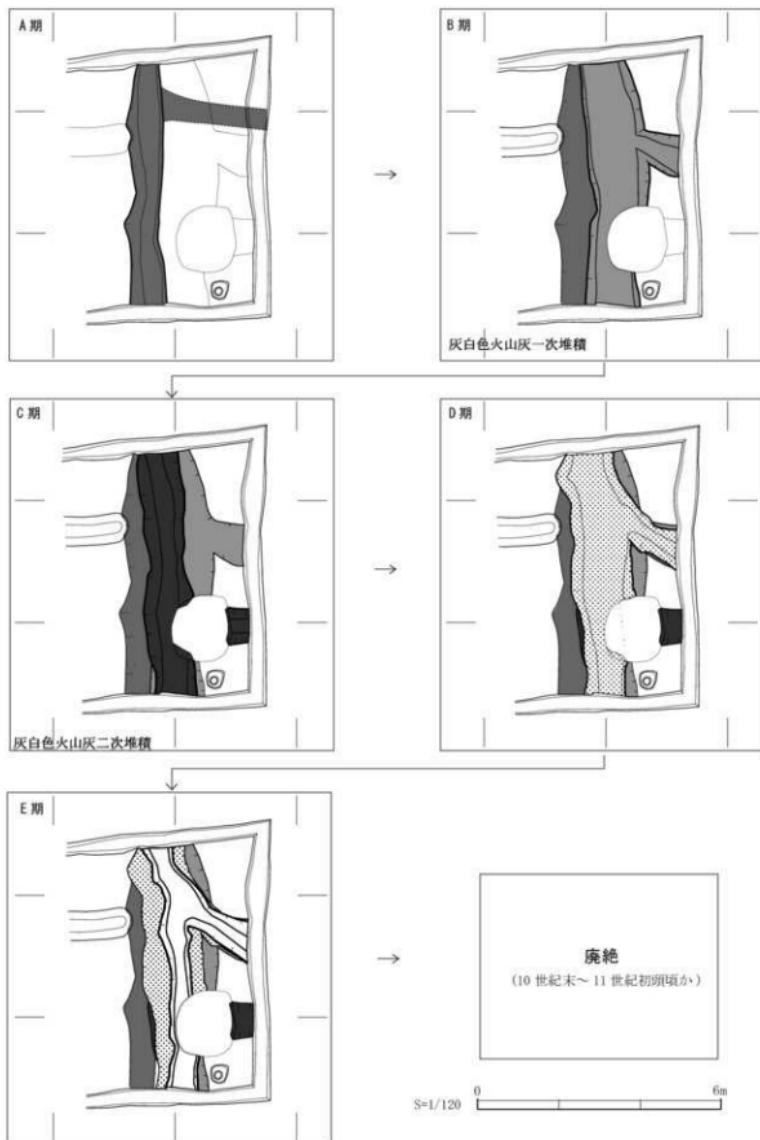
【遺物】棒状木製品、加工石材(写真図版2-9)、鉄滓が出土している。



(単位: cm)

番号	種類	遺構	層位	特徴		法量			備考	登録番号
				外面	内面	口径 残存率	底径 残存率	器高		
1	須恵器坏	SD2780E	-	ロクロナデ 底部:回転糸切り無調整	ロクロナデ (13.7) 4/24	7.6 24/24	4.0	写真図版2-2	R8	
2	土師器坏	SD2779D	-	ロクロナデ 底部:回転糸切り無調整	ヘラミガキ後 黒色処理	- 24/24	6.1	-	写真図版2-3	R7
3	土師器坏	SD2779C	-	ロクロナデ 底部:回転糸切り無調整 墨書き「大?」	ヘラミガキ後 黒色処理	- 10/24	(4.9) 10/24	-	写真図版2-6	R5
4	須恵器土器 高台付皿	SD2779A	-	ロクロナデ 底部:切り離し不明 高台貼付	内面平滑	(12.3) 1/24	7.0 24/24	2.9	写真図版2-1	R6
5	須恵器坏	SD3054	1層	ロクロナデ 底部:回転糸切り無調整	-	(13.1) 12/24	-	3.9	写真図版2-4	R3
6	須恵器土器 高台付皿	SE2781	1層	ロクロナデ	内面平滑	(12.2) 1/24	6.3 24/24	2.4	写真図版2-5	R1
7	須恵器土器 高台付皿	-	I	ロクロナデ 底部:回転糸切り無調整	ロクロナデ	- 24/24	6.3	-		R5
8	須恵器 長頸瓶	-	I	ロクロナデ 底部:回転ヘラケズリ	ロクロナデ	- 5/24	(9.1) 5/24	-	写真図版2-7 大戸	R9
9	無釉陶器 壺	-	I	自然釉 重角押印文	粘土帯接合痕	-	-	-	写真図版2-8 混美	R10

第5図 出土遺物



第6図 S D2779・2780 変遷図

3まとめ

(1) 古代

南北方向の大溝 S D 2779及びそれに接続する東西方向の溝跡 S D 2780、S D 2779以西に延びる溝跡 S D 3054・3055を発見したほか、古代のものとみられる大型の掘方を持つ柱穴を南壁の断面観察により複数確認している。

本調査区は多賀城南面に広がる方格地割のうち、最も西側で確認した南北道路である西9道路推定線から約130m西側に位置している。S D 2779・2780溝跡は、規模や変遷が道路側溝と類似していることから、未知の道路である可能性も想定されたが、S D 2779の西側に同様の南北溝が確認できること、東側には古代の掘立柱建物の一部とみられる柱穴を複数確認していることから、道路側溝ではなく単独の区画溝と判断した。

変遷は、それぞれA～E 5時期を確認した（第6図）。最も古いA期区画溝から、回転糸切り無調整の須恵器（第5図-1）が出土しているほか、2番目に古いB期で灰白色火山灰の自然堆積層を確認している。また、B期以降いずれかの時期に、東西方向の区画溝 S D 3054・3055が設けられた。

S D 2780はC期で一端南側に付け替えが行われるもの、D・E期にはB期とほぼ同一地点に作り直される。最も新しいE期区画溝からは、須恵系土器高台付皿が出土している（第5図-4）。これらは市川橋遺跡 S K 565（多賀城市教育委員会1994）出土例等と類似しており、10世紀後半以降のものとみられる。

以上のことから、S D 2779・2780区画溝は、概ね9世紀中頃から後半頃に構築され、数度の改修を経ながら、10世紀後半頃までは機能していたと考えられる。

(2) 中世

調査区西半部を中心に、不整形の掘立柱建物 S B 3052・3053及び小柱穴群を確認したほか、素掘りの井戸跡 S E 2781・2782を確認した。いずれも古代の遺構より新しく、遺物をほとんど含まない。規模・構造及び遺物包含量などから、概ね中世のものと考えた。

S E 2781は、調査区東半部で発見した素掘りの井戸跡である。第2層は有機物を多く含む自然堆積層であり、堆積中位から採取した有機物片（葉）についてAMS年代測定を行ったところ、12世紀後半から13世紀前半を中心とする年代が得られた（詳細は附章に記載）。

また、表土（L1）中から渥美窯製品とみられる陶器片が出土している（第5図-9）。胎土はやや黒みのある砂質土で、外面には自然釉が認められる。粘土帶接合部外面では、重角押印文が帶状に連続施文されている。同様の意匠を持つものとして、『愛知県史』編年2b期（12世紀末～13世紀初頭頃）に位置づけられる坪沢10号窯跡出土例（第7図）が挙げられる（田原町教育委員会1971、愛知県史編さん委員会2012）。

以上、断片的な資料に基づく推定ではあるものの、当地区内所在する中世の遺構については、平安時代末～鎌倉時代を中心とするものと考えられる。

参考文献

愛知県史編さん委員会2012『愛知県史』別編 室業3 中世・近世 常滑系

多賀城市教育委員会1994『市川橋遺跡ほか－平成5年度発掘調査報告書－』多賀城市文化財調査報告書第35集

田原町教育委員会1971『渥美半島における古代・中世の窯業遺跡－田原町坪沢古窯址の発掘を中心として－』



第7図 参考資料 重角押印文
(田原町教育委員会 1971)



S D 3054断面



S D 3054 須恵器坏（第5図-5）出土状況



S D 2779・2780D 完掘状況



S D 2779・2780接続部分断面



S E 2781断面



S E 2782断面

遺構検出状況（東から）

写真図版 1



1 ~ 2: 縦尺任意



1 : 須恵系土器高台付皿 (SD2779E 第5図-4 R6)
2 : 須恵器坏 (SD2780A 第5図-1 R8)



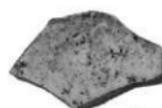
3



4



5



6



7



8



9



10

- 3 : 土師器坏 (SD2779B 第5図-2 R7)
- 4 : 須恵器坏 (SD2054 I層 第5図-5 R3)
- 5 : 須恵系土器高台付皿 (SE2781 I層 第5図-6 R1)
- 6 : 土師器坏 (SD2779C 第5図-3 R5)
- 7 : 須恵器長腹瓶 (大戸 LI 第5図-8 R11)
- 8 : 無鉢陶器蓋 (蓮実 LI 第5図-9 R10)
- 9 : 加工石器 (P-29抜取り穴 R9)
- 10 : 不明土製品 (SD2779D R12)

3 ~ 7・9: S=1/4

8 : S=1/3

10 : 縦尺任意

S=1/4

0 10cm

S=1/3

0 10cm

写真図版2

附章 山王遺跡（第 227 次調査）における放射性炭素年代 (AMS 測定)

(株) 加速器分析研究所

1 測定対象試料

宮城県多賀城市に所在する山王遺跡 (SN227) の測定対象試料は、SE2781 から出土した集 1 点である (表 1)。

2 化学処理工程

- (1) メス・ピンセットを使い、付着物を取り除く。
- (2) 鹽-アルカリ-酸 (AAA : Acid Alkali Acid) 処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA 処理における酸処理では、通常 1mol/l (IM) の塩酸 (HCl) を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム (NaOH) 水溶液を用い、0.001M から 1M まで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が 1M に達した時には「AAA」、IM 未満の場合は「AaA」と表 1 に記載する。
- (3) 試料を燃焼させ、二酸化炭素 (CO₂) を発生させる。
- (4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- (5) 精製した二酸化炭素を、鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト (C) を生成させる。
- (6) グラファイトを内径 1mm のカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み。測定装置に装着する。

3 測定方法

加速器をベースとした ¹⁴C-AMS 専用装置 (NEC 社製) を使用し、¹⁴C の計数、¹⁴C 濃度 (¹⁴C/¹²C)、¹⁴C 濃度 (¹⁴C/¹³C) の測定を行う。測定では、米国国立標準局 (NIST) から提供されたシウ酸 (HO₂H) を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

4 算出方法

- (1) $\delta^{14}\text{C}$ は、試料換算の ¹⁴C 濃度 (¹⁴C/¹²C) を測定し、基準試料からのずれを千分偏差 (‰) で表した値である (表 1)。AMS 装置による測定値を用い、表中に「AMS」と記述する。
- (2) ¹⁴C 年代 (Libby Age : yrBP) は、過去の大気中 ¹⁴C 濃度が一定であったと仮定して測定され、1950 年を基準年 (0yrBP) として測る年代である。年代値の算出には、Libby の半減期 (5568 年) を使用する (Stuiver and Polach 1977)。¹⁴C 年代は $\delta^{14}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表 1 に、補正していない値を参考値として表 2 に示した。¹⁴C 年代と誤差は、下 1 術を丸めて 10 年単位で表示される。また、¹⁴C 年代の誤差 ($\pm 1\sigma$) は、試料の ¹⁴C 年代がその誤差範囲に入る確率が 68.2% であることを意味する。
- (3) pMC (percent Modern Carbon) は、標準現代炭素に対する試料炭素の ¹⁴C 濃度の割合である。pMC が小さい (¹⁴C が少ない) ほど古い年代を示し、pMC が 100 以上 (¹⁴C の量が標準現代炭素と同等以上) の場合 Modern とする。この値も $\delta^{14}\text{C}$ によって補正する必要があるため、補正した値を表 1 に、補正していない値を参考値として表 2 に示した。
- (4) 历年較正年代とは、年代が既知の試料の ¹⁴C 濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の ¹⁴C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。历年較正年代は、¹⁴C 年代に対応する較正曲線上の曆年代範囲であり、1 標準偏差 ($1\sigma = 68.3\%$) あるいは 2 標準偏差 ($2\sigma = 95.4\%$) で表示される。グラフの縦軸が ¹⁴C 年代、横軸が历年較正年代を表す。历年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{14}\text{C}$ 補正を行い、下 1 術を丸めない ¹⁴C 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、历年較正年代の計算に、IntCal20 較正曲線 (Reimer et al. 2020) を用い、OnCalv4.4 較正プログラム (Bronk Ramsey 2009) を使用した。曆

年較正年代については、特定の較正曲線、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表2に示した。曆年較正年代は、 ^{14}C 年代に基づいて較正(calibrate)された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」または「cal BP」という単位で表される。

5 測定結果

測定結果を表1、2に示す。

試料No.1の ^{14}C 年代は 840 ± 20 yrBP、曆年較正年代(1 σ)は 1176~1228 cal AD の範囲で示される。

試料の炭素含有率は60%を超える十分な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

表1 放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 補正値)

測定番号	試料名	採取場所	試料 形態	処理 方法 (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
					Libby Age (yrBP)	pMC (%)	
IAAA-210303	No.1	遺構: SE2781 層位:t2	植物片(集)	AaA	-28.13 ± 0.22	840 ± 20	90.02 ± 0.24

[IAA 登録番号 : #A732-1]

表2 放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 未補正値、曆年較正用 ^{14}C 年代、較正年代)

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		曆年較正用(yrBP)	1σ 曆年年代範囲	2σ 曆年年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-210303	900 ± 20	89.44 ± 0.23	844 ± 21	1176calAD - 1228calAD (68.3%)	1165calAD - 1261calAD (95.4%)

[参考値]

文献

Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, *Radiocarbon* 51(1), 337-360

Reimer, P.J. et al. 2020 The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 cal kBP), *Radiocarbon* 62(4), 725-757

Suiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, *Radiocarbon* 19(3), 355-363

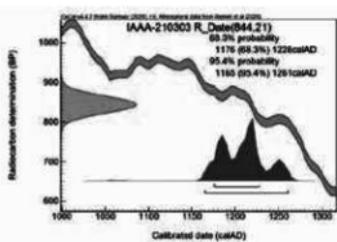


図1 曆年較正年代グラフ (参考)

18 山王遺跡第228次調査

1 調査に至る経緯と経過

本件は、南宮字町地内における個人住宅新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査である。

令和3年1月5日に地権者から当該地における個人住宅新築計画と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。計画では住宅の基礎工事の際、直径約21cm、長さ6.5mの杭を35本打ち込むというものである。

申請地周辺では南側で平成28年度に第163次調査を実施しており、現地表から60cmのところで遺構が発見されていることから、埋蔵文化財への影響が懸念された。

その後、令和3年6月に事業者より発掘調査の依頼書及び承諾書の提出を受け、本発掘調査を行うこととなった。

令和3年6月8日から調査に着手した。重機で表土等を除去し、IV層上面まで掘削した。IV層上面で遺構の検出作業を行い、溝跡と土坑、柱穴を発見した。平面図・断面図作成、写真撮影などの記録は7月16日までに終了した。19日に埋戻しを行い、すべての調査を終了した。

2 調査成果

(1) 基本層序

I-a層：現代の盛土。山砂を含む。調査区東側で層が厚くなる。厚さは約25～50cmである。

I-b層：現代の盛土。厚さは35cmである。

II層：にぶい赤褐色シルト（2.5YR5/3）。炭化物を含む。III層の高さに揃えるような整地層である。

層厚は約20cmである。

III層：灰黄褐色シルト（10YR4/2）。炭化物を含む。層厚は約20～25cmである。

IV層：古代～近世の遺構検出面。にぶい黄褐色シルト（10Y4/3）。炭化物を含む。調査区北側と東側では確認出来ない。層厚は約10～25cmである。

V層：黄褐色粗砂（2.5Y5/3）。層厚は約30cmである。

(2) 発見遺構と遺物

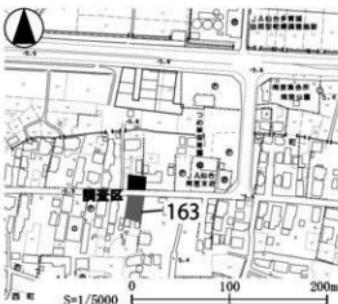
S X 3051 整地層（第4図）

【位置】調査区北側でIV層と同レベルで確認した整地層である。

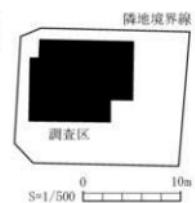
【重複】P 26より新しい。

【規模】長軸が約2.9m、短軸が約1.6m、深さが約30cmである。

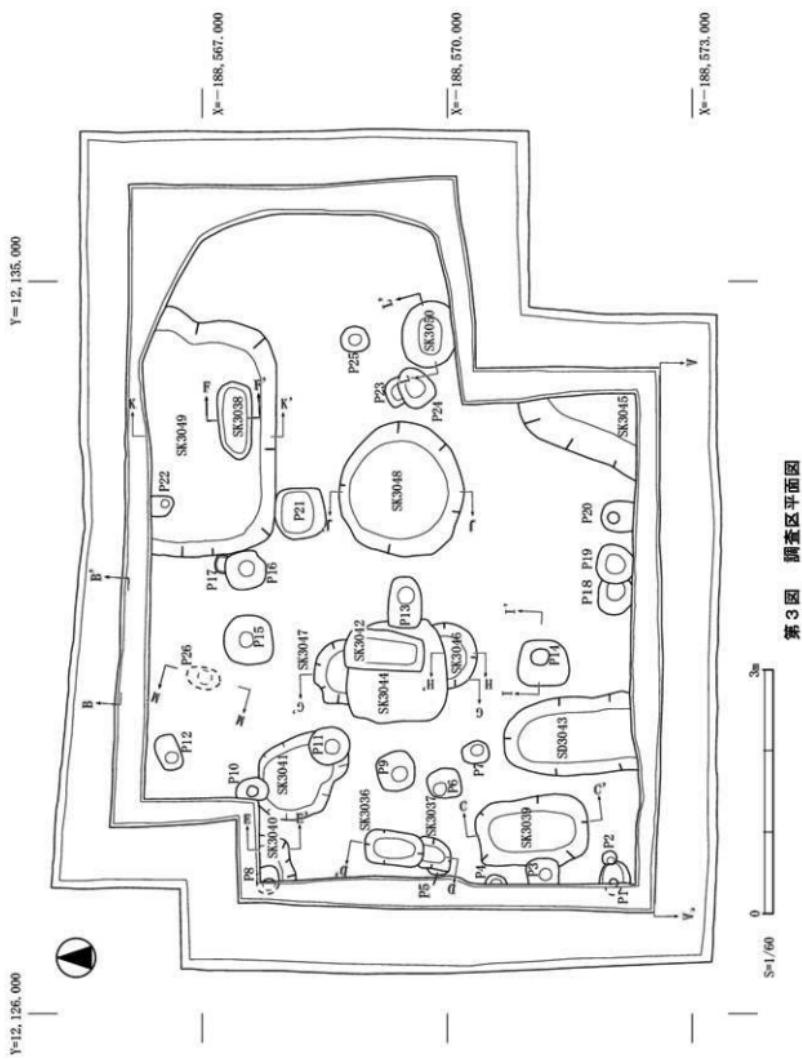
【埋土】埋土はにぶい褐色の砂質シルトである。



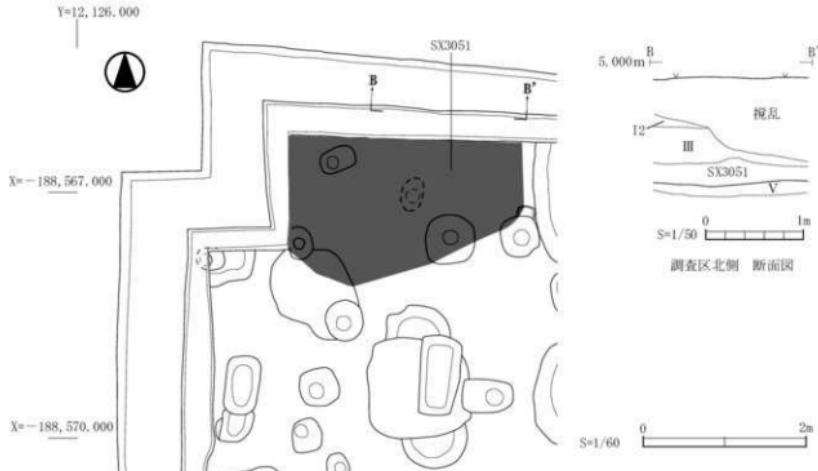
第1図 調査区位置図



第2図 調査区配置図



第3図 調査区平面図



第4図 SX3051整地層範囲

【遺物】土師器甕や平瓦、その他土師器片が少量出土している。

S D 3043 溝跡（第3図）

【位置】調査区南側で発見した。

【重複】無し。

【規模】南北方向の溝跡で西に4度偏している。確認した長さが約1.6m、幅が約1m、深さが40cm。遺構の南側が調査区の外に伸びているため、全体の規模は不明である。

【埋土】2層確認し、全て人為堆積である。

【遺物】1層から須恵器の小片が出土している。

S K 3036 土坑（第3図）

【位置】調査区西側で発見した。

【重複】S K 3037より新しい。

【規模】南北方向に長い土坑である。確認した長さが約70cm、幅が約45cm、深さが12cmである。

【埋土】2層確認し、全て人為堆積である。

【遺物】2層から鉄製の刀子が1点出土している（第7図）。

S K 3037 土坑（第3図）

【位置】調査区南側で発見した。

【重複】S K 3036よりも古く、P 6よりは新しい。

【規模】南北方向に長い、楕円形の土坑である。確認した長さが約40cm、幅が35cm、深さが12cmである。
遺構の北側がSK 3036によって壊されている。

SK 3037 土坑（第3図）

【位置】調査区南側で発見した。

【重複】SK 3036よりも古く、P 6よりは新しい。

【規模】南北方向に長い、楕円形の土坑である。確認した長さが約40cm、幅が35cm、深さが12cmである。
遺構の北側がSK 3036によって壊されている。

【埋土】1層確認し、人為堆積である。

【遺物】出土していない。

SK 3038 土坑（第3図）

【位置】調査区北東側で発見した。

【重複】SK 3049より新しい。

【規模】東西方向の土坑である。確認した長さが約1m、幅が約40cm、深さが10cmである。

【埋土】1層確認し、人為堆積である。

【遺物】陶器小片が少量出土している。

SK 3039（第3図）

【位置】調査区南側で発見した。

【重複】P 3より古い。

【規模】南北方向の土坑である。確認した長さが約1.3m、幅が約80cm、深さが10cmである。

【埋土】1層確認し、人為堆積である。

【遺物】磁器、陶器の小片が少量出土している。

SK 3040 土坑（第3図）

【位置】調査区西側で発見した。

【重複】P 8より古い。

【規模】確認した長さが約60cm、幅が約40cm、深さが18cmである。

【埋土】1層確認し、人為堆積である。

【遺物】出土していない。

SK 3041 土坑（第3図）

【位置】調査区北側で発見した。

【重複】P 10、11より古い。

【規模】確認した長さが約1.2m、幅が約1m、深さが18cmである。

【埋土】1層確認し、人為堆積である。

【遺物】出土していない。

S K 3042 土坑（第3図）

【位置】調査区中央で発見した。

【重複】S K 3044 より新しい。

【規模】南北方向に長い土坑である。確認した長さが約90cm、幅が約50cm、深さが12cmである。

【埋土】2層確認し、全て人為堆積である。

【遺物】出土していない。

S K 3044 土坑（第3図）

【位置】調査区中央で発見した。

【重複】S K 3042 より古く、S K 3046、3047 より新しい。

【規模】1.2×1.2mの大きさである。深さは約40cmで、それより下層については湧き水のため、確認することは出来なかった。

【埋土】3層確認し、1層が人為堆積で、2、3層が自然堆積である。

【遺物】1層から土師器、須恵器の小片が少量出土している。

S K 3045 土坑（第3図）

【位置】調査区南側で発見した、土坑である。

【重複】無し。

【規模】長軸が約1.5m、短軸が約1.2m、深さが約40cmである。

【埋土】2層確認し、全て人為堆積である。

【遺物】1層から須恵器、磁器、陶器の小片が少量出土している。

S K 3046 土坑（第3図）

【位置】調査区中央で発見した。

【重複】S K 3044 より古い。

【規模】楕円形で確認した長さが約80cm、幅が約40cm、深さが約22cmである。

【埋土】1層確認し、人為堆積である。

【遺物】出土していない。

S K 3047 土坑（第3図）

【位置】調査区南側で発見した。

【重複】S K 3042、3044 より古い。

【規模】確認した長さが約75cm、幅が約40cm、深さが約28cmである。

【埋土】1層確認し、人為堆積である。

【遺物】出土していない。

S K 3047 土坑（第3図）

【位置】調査区南側で発見した。

【重複】S K 3042、3044より古い。

【規模】確認した長さが約75cm、幅が約40cm、深さが約28cmである。

【埋土】1層確認し、人為堆積である。

【遺物】出土していない。

S K 3048 土坑（第3図）

【位置】調査区中央で発見した。

【重複】無し。

【規模】梢円形である。確認した長さが約1.65m、幅が約1.5m、深さが約36cmである。

【埋土】2層確認し、全て人為堆積である。

【遺物】1層から土師器小片が1点出土している。

S K 3049 土坑（第3図）

【位置】調査区北側で発見した。

【重複】S K 3038、P 22より古い。

【規模】確認した長さが約3m、幅が約1.5m、深さが約22cmである。

【埋土】2層確認し、全て人為堆積である。

【遺物】1層から陶器擂鉢の小片や陶器碗の小片、2層から須恵器甕や平瓦が出土している。

S K 3050 土坑（第3図）

【位置】調査区東側で発見した。

【重複】無し。

【規模】確認した長さが約80cm、幅が約60cm、深さが約15cmである。

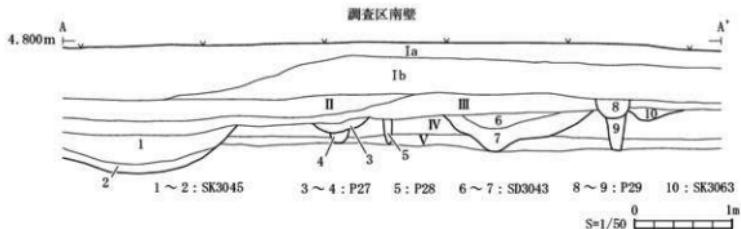
【埋土】1層確認し、人為堆積である。

【遺物】出土していない。

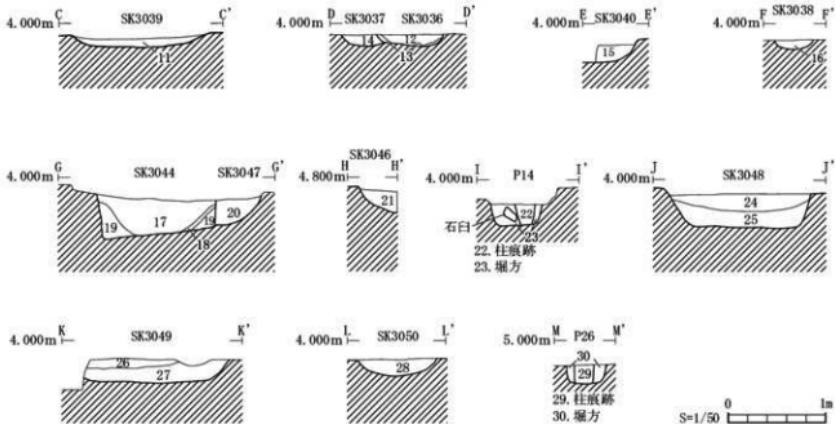
3 まとめ

今回の調査では、古代の遺構と近世の遺構を確認した。古代の遺構としてはS X 3051とその下層から見つかったP 26が挙げられる。S X 3051から出土した遺物には土師器甕や平瓦が出土しており（第6図-1、3）、近世の遺物は出土していない。土師器甕は摩耗がはげしいが非ロクロ整形で、外内面共にハケメ調整が見られることから、およそ9世紀前葉頃のものと考えられる。

また、S K 3036土坑、S K 3039土坑、S K 3038土坑、S K 3045土坑、S K 3049土坑、P 14、P 15からは近世の遺物が出土しているため、近世の遺構と考えられる。その中でも、P 14からは寛永通宝（第7図-11）が出土していることから、遺構の年代は江戸時代前半以降であると考えられる。他の溝跡や土坑からは年代決定できるものが出土していないため、詳細は不明である。



No.	遺構	層位	土色	土性	備考
1	SK3045	1	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	炭化物を含む。人為堆積。
2	SK3045	2	黒褐色 (10YR3/1)	シルト	地山砂ブロックを多く含む。人為堆積。
3	P27	1	褐色 (7.5YR4/3)	シルト	炭化物を含む。柱抜取穴。人為堆積。断面でのみ検出。
4	P27	2	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	柱抜取穴。炭化物を含む。断面でのみ検出。
5	P28	1	灰褐色 (10YR4/2)	シルト	柱抜取穴。断面でのみ検出。
6	SD3043	1	オリーブ褐色 (2.5Y4/3)	シルト	炭化物、褐色のシルトブロックを含む。人為堆積。
7	SD3043	2	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	炭化物、褐色シルトブロックを含む。人為堆積。
8	P29	1	黒褐色 (7.5YR3/2)	シルト	柱抜取穴。焼土、灰色シルトブロックを含む。
9	P29	2	灰褐色 (10YR4/2)	シルト	柱穴掘方。黄褐色シルトブロックを含む。
10	SK3063	1	オリーブ褐色 (2.5Y4/3)	シルト	褐色シルトブロックを含む。人為堆積。



第5図 遺構断面図

第5図 遺構断面図土層注記表

No.	遺構	層位	土色	土性	備考
11	SK3039	1	黄褐色 (2.5Y5/3)	砂質シルト	人為堆積。
12	SK3036	1	褐色 (7.5YR4/3)	シルト	燒土、炭化物を含む。人為堆積。
13	SK3036	2	黄褐色 (2.5Y5/4)	砂	燒土、炭化物を含む。人為堆積。
14	SK3037	1	にぶい黄褐色 (10YR5/3)	シルト	燒土、炭化物を含む。人為堆積。
15	SK3040	1	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	炭化物、黄褐色シルトブロックを含む。人為堆積。
16	SK3038	1	褐色 (10YR4/4)	シルト	炭化物を含む。人為堆積。
17	SK3044	1	褐色 (7.5YR4/3)	シルト	炭化物、燒土、明褐色シルトブロックを含む。人為堆積。
18	SK3044	2	にぶい黄褐色 (10YR5/3)	砂	自然堆積。
19	SK3044	3	黒褐色 (10YR3/1)	シルト	自然堆積。
20	SK3047	1	黒褐色 (7.5YR3/1)	シルト	炭化物、褐色シルトブロックを含む。自然堆積。
21	SK3046	1	灰褐色 (10YR4/2)	シルト	炭化物、黃褐色シルトブロックを含む。人為堆積。
22	P14	1	褐色 (10YR4/4)	シルト	柱痕跡。
23	P14	2	灰褐色 (10YR4/2)	シルト	柱穴掘方。
24	SK3048	1	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	シルト	炭化物、砂ブロックを含む。人為堆積。
25	SK3048	2	黒褐色 (2.5Y3/2)	シルト	炭化物、砂ブロック、褐色粘土ブロックを含む。人為堆積。
26	SK3049	1	オリーブ褐色 (2.5Y4/3)	シルト	炭化物、黄褐色シルトブロックを含む。人為堆積。
27	SK3049	2	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	炭化物、地山砂を含む。人為堆積。
28	SK3050	1	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	炭化物、砂を含む。人為堆積。
29	P26	1	暗オリーブ褐色 (2.5Y3/3)	シルト	柱痕跡。
30	P26	2	暗灰褐色 (2.5Y4/2)	シルト	褐色シルトブロックを含む。柱穴掘方。

本調査区は旧県道泉塩釜線沿いに位置し、江戸時代の南宮村にあたり、街道沿いには集落があったとされている。「伊達世臣家譜」によれば南宮村は17世紀初頭に伊達家家臣成田左馬重勝が持領した土地であり、周辺には屋敷があったとされている。そのため、今回の調査で確認した近世の遺構に関しては前述の集落や成田氏の屋敷に関する可能性がある。

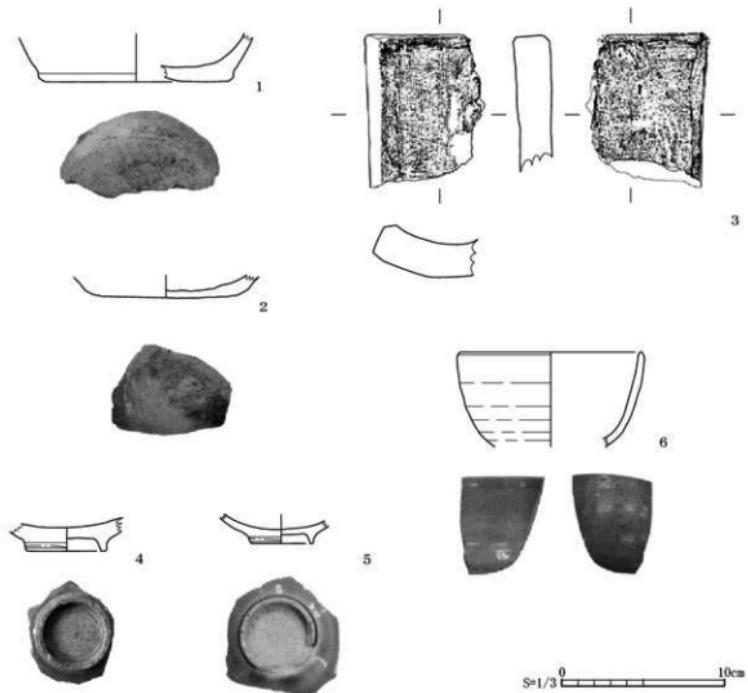


調査区全景（北から）



調査区北壁断面（南から）

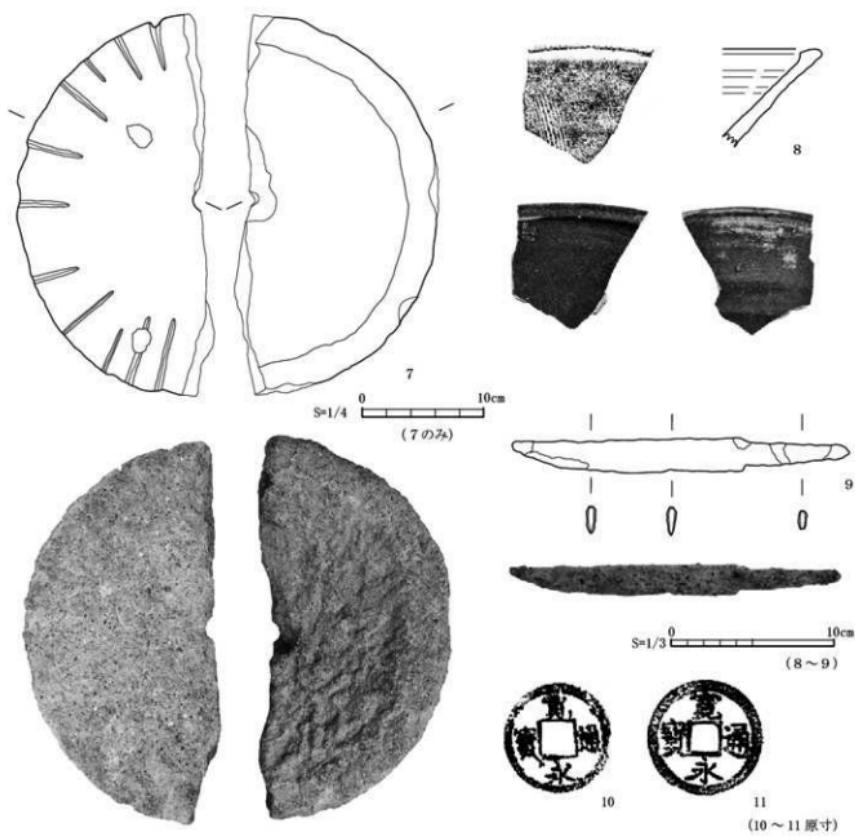
写真図版



(単位: cm)

番号	種類	遺構	層位	特徴		法量				備考	登録番号
				外面	内面	口 径 残存率	底 径 残存率	種 類	器高		
1	土師器 甕	SX3051	—	摩滅	摩滅	—	(11) 3/24	(2.9)		R9	
2	須恵器 环	P26	壠方	ロクロナデ 底部：回転ヘラ切り		—	(8.4) 3/24	(1.5)		R4	
3	平瓦	SX3051	—	最大長9.3、最大幅7.3、最大厚21。凸面にヘラケズリ、凹面に布目。						R10	
4	施釉陶器 碗	SK3049	01	底部：回転ヘラ切り→高台 貼り付け 釉色：灰白 底部無釉	釉色：灰白	—	(4.8) 24/24	(2.1)		R5	
5	施釉陶器 碗	SK3049	01	底部：回転ヘラ切り→高台 貼り付け 釉色：オリーブ灰 底部無釉	釉色：オリーブ灰	—	—	(1.8)		R6	
6	施釉陶器 碗	SK3049	02	釉色：にぶい黄色	釉色：にぶい黄色	(11.2) 4/24	—	(5.8)		R7	

第6図 出土遺物 1



(単位: cm)

番号	種類	造構	層位	特徴		法量			備考	登録 番号
				外面	内面	口 径 残存率	底 径 残存率	器高		
7	石製品 石臼	P14	堆方	径30.7、厚さ11、残存12/24						82
8	脚踏 すり鉢	P13	堆方	ロクロナデ	かき目アリ	—	—	6		83
9	刀子	SK3036	II	最大長27、最大幅3.5(柄部分:3)、最大厚6						82
10	古鏡	造構確認面	IV	寛永通宝(新寛永)、外形2.1					完形	
11	古鏡	P14	堆方	寛永通宝(古寛永)、外形2.3					完形	

第7図 出土遺物2

19 山王遺跡第229次調査

1 調査に至る経緯と経過

本件は、南宮字町地内における宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査である。

令和3年7月12日に地権者から当該地における宅地造成工事計画と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。計画では約1,200m²の土地で既存の擁壁等の撤去を行ったのち、道路の拡幅を行い、5区画の宅地造成を行うもので、上下水道管理設の為、深さ最大2.02mの掘削を行うものである。道路設置に伴いアスファルト舗装で50cmの掘削が生じ、側溝等の設置で最大80cmの掘削を行う内容である。

申請地周辺では東側隣接地で令和3年度に第228次調査を実施しており、現地表から約1.3mのところで遺構が発見されていることから、埋蔵文化財への影響が懸念された。その後、令和3年7月に事業者より発掘調査の依頼書及び承諾書の提出を受け、確認調査を行うこととなった。

令和3年7月29日から調査に着手した。重機で盛土・表土を除去し、IV層上面で遺構の検出作業を行い、土坑跡と柱穴を発見した。平面図・断面図作成、写真撮影などの記録は9月2日までに終了した。6日に埋戻しを行い、すべての調査を終了した。

2 調査成果

(1) 基本層序

I a層：現代の盛土。調査区東側で層が厚くなる。厚さは約25～50cmである。

I b層：現代の盛土。調査区南側でのみ確認した。厚さは約15～45cmである。

I c層：現代の盛土。調査区南側でのみ確認した。厚さは約5～20cmである。

I d層：現代の盛土。厚さは35cmである。

II 層：黒褐色シルト(10YR4/2)で、炭化物を含む。III層の高さに揃えるような整地層である。厚さは18cmである。調査区南側では確認出来ず。

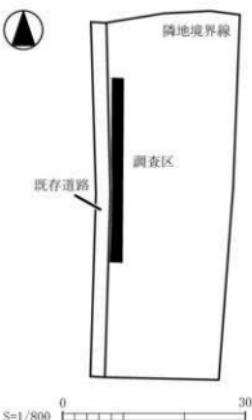
III 層：灰黄褐色シルト(10YR4/2)で、炭化物を含む。厚さは20～25cmである。

IV 層：にぶい黄褐色シルト(10Y4/3)で、炭化物を含む。古代の遺構検出面。厚さは10～26cmである。

V 層：黄褐色粗砂(2.5Y5/3)。厚さは28cmである。



第1図 調査区位置図



第2図 調査区配置図

(2) 発見遺構と遺物

S K 3060 土坑（第4図）

【位置】調査区北側で発見した土坑である。

【重複】なし。

【規模】調査区内で南北方向に約70cmの長さを確認した、深さは最大で約12cm。

【埋土】にぶい黄褐色シルト（10YR4/3）で、炭化物を含んでいる。

人為堆積である。

【遺物】出土していない。

P 1（第4図）

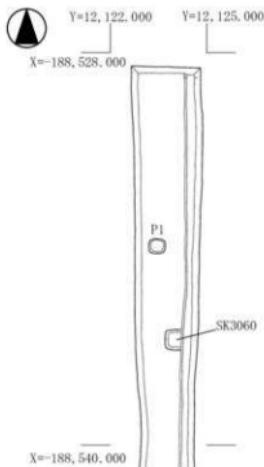
【位置】調査区北側で発見した。

【重複】なし。

【規模】大きさは45cm×50cmほど。深さは最大14cmである。

【埋土】暗オリーブ灰色シルト（2.5GY4/1）で地山ブロックを含む、人為堆積である。

【遺物】出土していない。



S K 3062 土坑（第4図）

【位置】調査区南側で発見した、土坑である。

【重複】なし。

【規模】南北方向で約1.3mの長さを確認した。遺構の西側半分が調査区の外に広がるため、平面の規模は不明である。

【埋土】3層確認した。人為堆積である。

【遺物】出土していない。

P 3（第5図）

【位置】調査区南側東壁で確認した。平面では未確認である。

X=-188, 550.000

【重複】S X 3061よりも新しい。

【規模】大きさは断面で南北方向に約1.1mである。平面ではプランが確認出来なかつたため、全体の規模は不明である。

【埋土】1層は柱痕跡である。2～4層は堀方である。

【遺物】出土していない。

S X 3061（第5図）

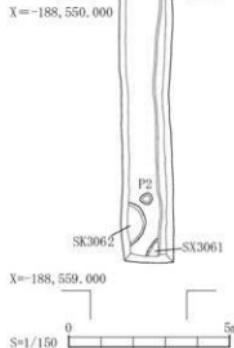
【位置】調査区南側で発見した。

【重複】P 3よりも古い。

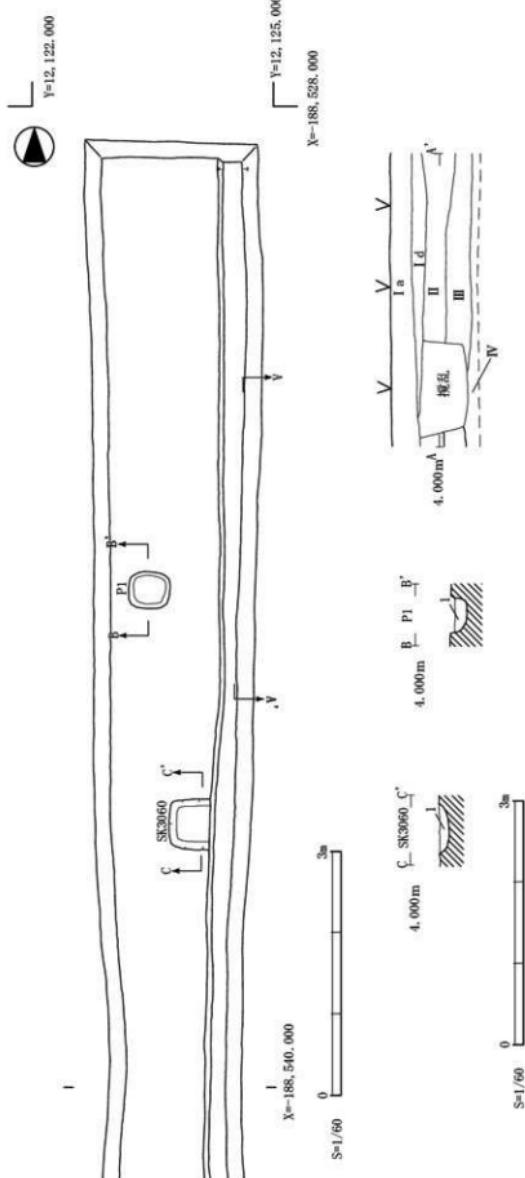
【規模】遺構の半分以上が調査区の外の為、不明である。

【埋土】4層確認した。全て自然堆積である。

【遺物】出土していない。

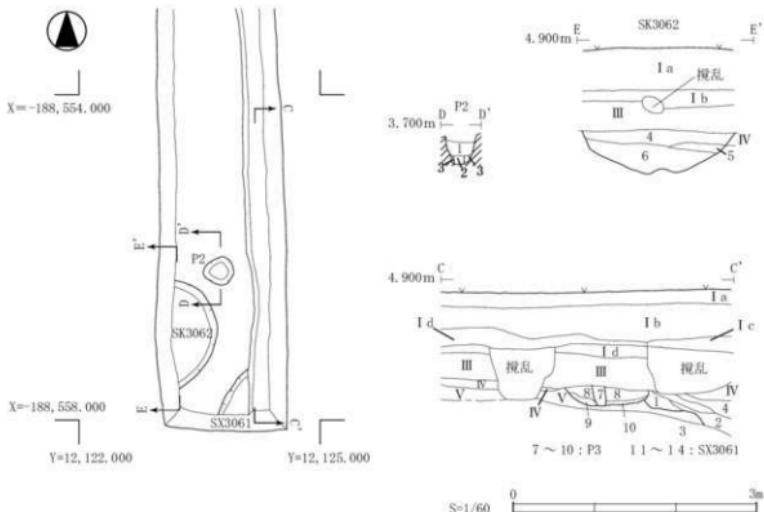


第3図 調査区平面図



No.	遺構	層位	土色	土性	備考
1	P1	1	暗オリーブ灰 (2.5G7/4.1)	シルト	地山ブロックを含む。人為堆積。
2	SK3060	1	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	シルト	炭化物、地山ブロックを含む。人為堆積。

第4図 調査区北側遺構平面図・断面図



No.	遺構	層位	土色	土性	備考
1	P2	1	黒褐 (10YR3/1)	粘質シルト	柱抜取穴。
2	P2	2	黒褐 (10YR3/1)	粘質シルト	柱痕跡。
3	P2	3	黄褐 (2.5Y5/3)	シルト	柱穴掘方。
4	SK3062	1	黒褐 (10YR3/1)	シルト	
5	SK3062	2	暗灰黄 (2.5Y4/2)	砂	
6	SK3062	3	黒褐 (10YR3/1)	シルト	炭化物を含む。
7	P3	1	黒褐 (10YR3/1)	粘質シルト	柱。
8	P3	2	褐灰 (10YR4/1)	粘質土	柱穴掘方。
9	P3	3	褐灰 (10YR5/1)	粘質シルト	炭化物、礫を含む。柱穴掘方。
10	P3	4	灰褐 (7.5YR6/2)	粘質シルト	柱穴掘方。
11	SK3061	1	黒褐 (10YR3/2)	粘質土	自然堆積。
12	SK3061	2	灰黃褐 (10YR4/2)	粗砂	地山ブロックを含む。自然堆積。
13	SK3061	3	黒褐 (10YR3/1)	粘質土	自然堆積。
14	SK3061	4	褐灰 (10YR4/1)	粘質シルト	地山ブロックを含む。自然堆積。

第5図 調査区南側遺構平面図・断面図

P 2 (第5図)

【位置】調査区南側で発見した。

【重複】なし。

【規模】不整円形で、大きさは 40 cm × 40 cm 程である。

【埋土】3 層確認した。

【遺物】出土していない。

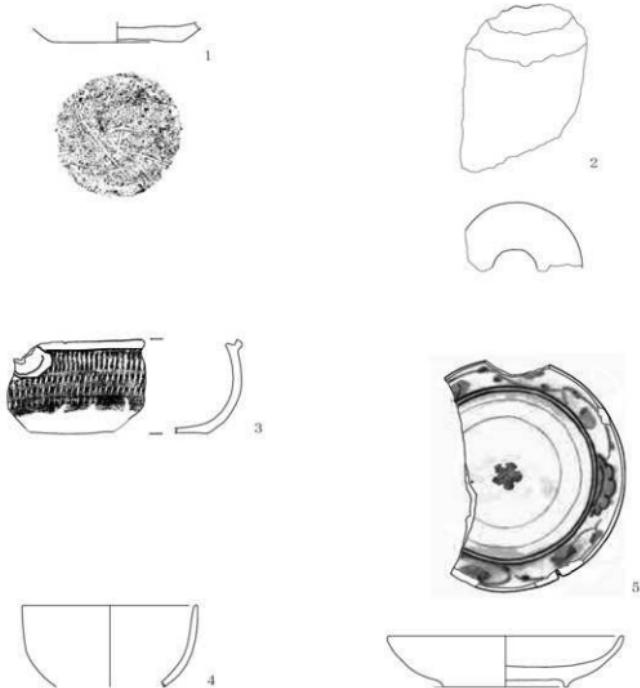
3 まとめ

今回の調査ではIV層上面より遺構の検出作業を行い、土坑2基、柱穴2基、性格不明遺構1基を確認した。出土した遺物は土師器、須恵器、陶器、磁器である。今回確認した遺構からは遺物が出土しなかったが、遺構確認面であるIV層から、陶器や磁器が出土したことから、およそ近世に属する遺構であると考えられる。

また、本調査の南側で実施した第228次調査で確認されたSX3051整地層の続きについては今回確認されなかった。



作業状況



S=1/3 0 10cm
(単位: cm)

番号	種類	遺構	層位	特徴		法量			備考	登録番号
				外面	内面	口径 径 残存率	底径 径 残存率	器高		
1	須恵器 壺	-	L.IV	ロクロナマ 底部: 切り離し不明→ へラ削り		-	(8) 19/24	(1.2)		R2
2	土製品 羽口	-	L.IV	最大長9.2cm、最大幅7.4cm、最大厚3cm。色調灰白色。					鉄滓融着	R3
3	陶器 行平鍋	-	L.III	飛鉈 鉄軸(茶褐色)		-	-	5.8	大堀相馬産か	R4
4	陶器 丸碗	-	L.IV	灰軸		(18) 4/24	-	(5.0)	大堀相馬産か	R6
5	磁器 染付小皿	-	L.III	高台に回線	見込みに蛇の目の輪剥ぎ 五弁花	(14.6) 16/24	(7.6) 18/24	3.2	肥前系か	R7

第6図 出土遺物



調査区全景（南から）



調査区全景（北から）



調査区東壁断面（西から）



調査区南側検出状況（西から）

写真図版

20 山王遺跡第230次調査

1 調査に至る経緯と経過

本件は、南宮宇町、字伊勢地内における個人住宅新築に伴う本発掘調査である。

令和2年12月22日に地権者より当該地での個人住宅新築計画と埋蔵文化財の関わりについての協議書が提出された。計画は、144.95m²の敷地に約58m²の個人住宅を建築するもので、基礎工事において現地表面から36cm掘削したのち、直径20cmの改良杭35本を深さ6.75mまで打ちこむものである。

当該地隣接地において、平成28年度に第177次調査を実施しており、現地表面から約2.3mで遺構を確認しており、遺跡への影響が懸念された。そのため、工法変更による遺跡を保存する協議を行ったが、提出された工法以外では、十分な地盤強度が得られないことから、本発掘調査を実施することになった。

令和3年7月16日に、地権者から発掘調査の依頼書と承諾書の提出を受け、隣接地で実施した第231次調査とともに7月20日から発掘調査に着手した。重機による表土除去から始め、排出した土砂は、調査区内に置けないため場外搬出を行った。掘削は、VI層上面まで行い、遺構があることを確認した。7月29日から作業員を入れ、環境整備を行い、その後、9月7日まで遺構確認作業、遺構の掘削、写真撮影、測量をした。同月15日には調査区の埋め戻し、器材の撤収が終了し、現場作業を完了した。

2 調査成果

(1) 基本層序 (第4図)

I層：現代の盛土層。層厚約50～160cmある。

II層：旧耕作土層で、調査区北側で確認している。黒色粘質土(7.5YR2/1)で、層厚約10cm～20cmである。

III層：調査区北側で確認している。黄褐色粘質土(2.5Y5/1)で、層厚約5～20cmある。

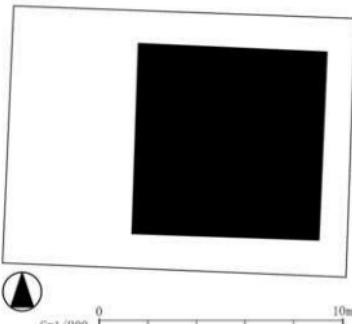
IV層：調査区中央部から北側に広がる。黒褐色粘質土(10YR3/2)で、層厚約10～30cmある。

V層：調査区中央部から北側で確認している。褐灰色粘質土(10YR4/1)で、層厚約15～20cmある。

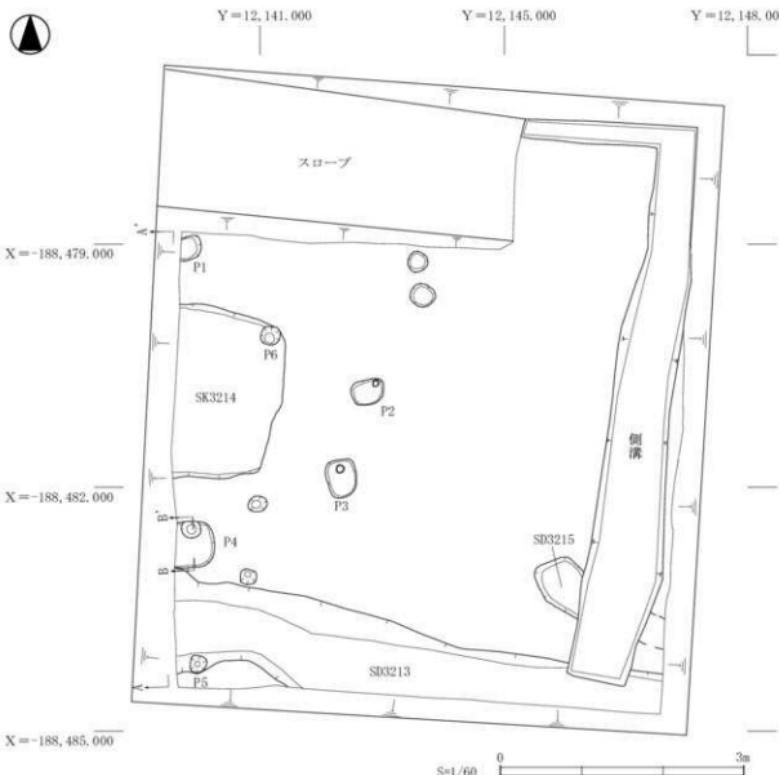
VI層：調査区全体で確認している。にぶい黄褐色砂質土(10YR5/3)で、古代から近世の遺構確認面である。



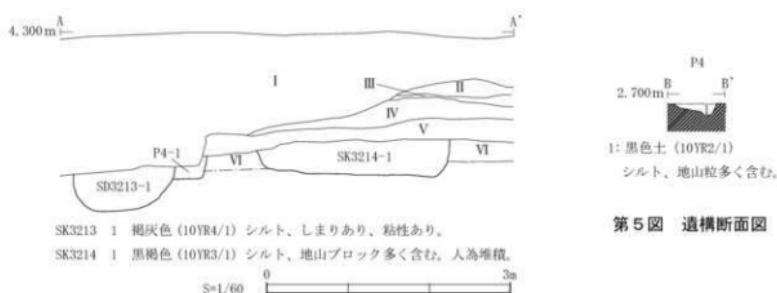
第1図 調査区位置図



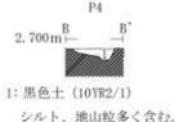
第2図 調査区配置図



第3図 調査区平面図



第4図 調査区西壁断面図



第5図 遺構断面図

(2) 発見遺構と遺物

S D3123溝跡（第3・4図）

【位置】調査区南側に位置する。P 4・5と重複しており、P 5より古く、P 4より新しい。

【形状・規模】東西方向の溝跡で、調査区外に延びる。調査区東側では、溝跡南側が調査区外にある。幅約1.0m、深さ約0.5mある。

【埋土】褐色（10YR4/1）シルトの単層である。

【遺物】小片の古代の土師器や須恵器、平瓦が出土している。また、漆器の碗の蓋等の木製品が出土している（第7図）。

S K3214土坑（第3・4図）

【位置】調査区中央西側に位置する。P 6と重複しており、それより古い。

【形状・規模】遺構西側は、調査区外にあるが、平面形状は方形と思われる。南北約2.1m、深さ約0.4mある。

【埋土】黒褐色（10YR3/1）シルトで、VI層由来のブロックが多く混じる。人為堆積である。

【遺物】土師器の壊が出土している（第6図）。他にも小片であるが須恵器なども出土している。調査区壁際で刀子が出土している（第7図）。

P 1（第3図）

【位置】調査区北西隅に位置する。

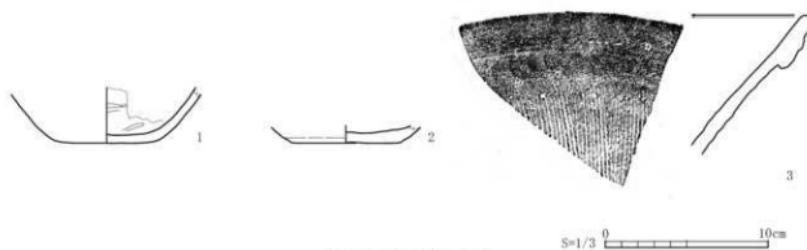
【形状・規模】遺構西側は調査区外にあり詳細は不明であるが、隅丸方形であろう。確認できる軸で約0.3m、深さは約0.2mある。

【埋土】黒褐色（10YR3/1）のシルトの単層である。

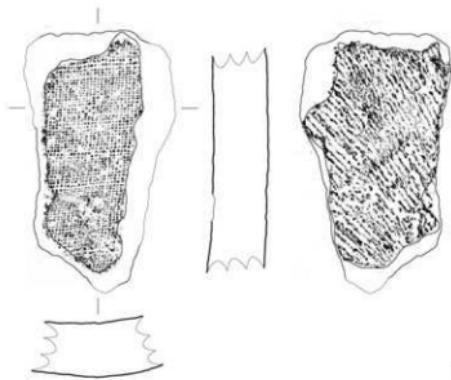
【遺物】須恵器の壊が出土している（第6図）。他に小片であるが、土師器、須恵器が出土している。

3まとめ

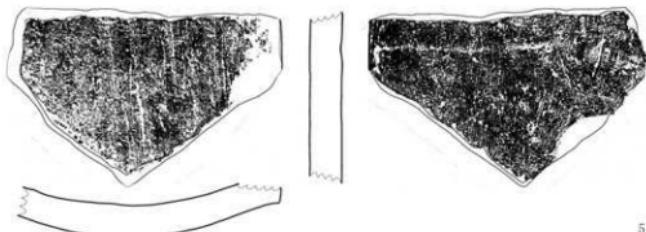
S D3123溝跡は、近世のものと思われる漆器が出土していることから、近世以降の溝跡と考えられる。また、S K3214土坑は、人為的に埋め戻されており、古代の遺物が出土しているものの、この遺構に伴うものかは不明である。しかし、近世の遺物が出土していないことから、中世以前のものと考えられる。



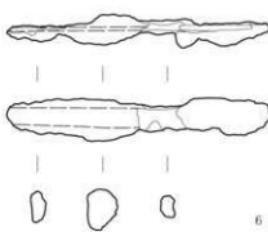
第6図 出土遺物（1）



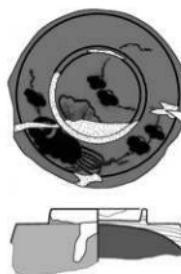
4



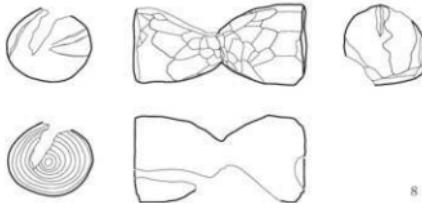
5



6



7



8

S=1/3 0 10cm

第7図 出土遺物(2)

第7図 出土遺物観察表

(単位:cm)

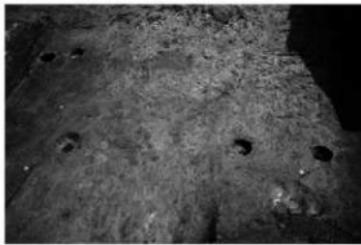
番号	種類	遺構	層位	特徴		法量		備考	登録番号
				外面	内面	口 径 残存率	底 径 残存率		
1	土師器 坪	SK3214	I	摩滅により不明 底部: 摩滅により不明	ヘラミガキ→黒色処理	— (6.0) 10/24	—	—	R2
2	須恵器 坪	P I	I	ロクロナデ 底部: 回転ヘラキリ→ナデ	ヘラミガキ→黒色処理	— (7.0) 8/25	—	—	R1
3	陶器 擂鉢	—	V	ロクロナデ 鉄袖	鉄袖、卯目	— (7.0) 8/26	—	—	R5
4	平瓦	SD3213	I	布目	織目	13.7	6.5	3.4	R3
5	平瓦	SD3213	I	布目→ヘラナデ	布目→ヘラケズリ	10.7	16.8	2.0	R4
6	鉄製品 刀子	SK3214	I			(16.2)	2.5	1.8	本製の柄が残存 R1
7	木製品 漆器蓋	SD3213	I	深緑の地に赤漆で瓜の絵付 計	黒色漆	(10.8)	つまみ径 (6.0)	4.0	W2
8	木製品 木鍤	SD3213	I			(4.9)	10.6	5.2	W1



調査区全景（南から）



SK 3214 完掘貞享（東から）



ピット等検出状況（西から）



調査風景（南から）

21 山王遺跡第231次調査

1 調査に至る経緯と経過

本件は、南宮字町、字伊勢における個人住宅新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査である。

令和3年2月25日、地権者から当該地での事業計画と埋蔵文化財の関わりについての協議書が提出された。計画は、住宅部分の基礎工事において柱状改良杭29本を深さ6.25mまで打設するものである。当該地周辺では、東側近接地で平成28年度に第177次調査を実施しており、現表土から2.3mの深さで遺構が発見されている。そのため遺跡に影響を与える可能性が懸念されることから、事業者と工法変更による保護協議を行った。しかし、提出された工法以外では十分な地盤強度を得られないとの判断されたことから、発掘調査による記録保存を行うこととなった。

地権者より発掘調査の依頼書及び承諾書が提出されたことから、7月20日より現地調査を開始した。なお、重機による表土掘削と埋め戻しは、隣地で実施された山王遺跡第230次調査と合わせて実施した。7月21日から重機による表土掘削を実施し、8月3日より作業員を動員して調査区内の排水溝の造作及びに調査区内の精査に着手した。8月26日に調査区内の遺構の分布の確認を終え、遺構検出状況の写真撮影を実施した。9月2日から遺構の掘り下げ、写真撮影を実施し、その後図面の作成を行った。9月15日に現地作業及び器材の撤収作業が完了し、17日に休憩施設を撤去した。9月22日から重機で埋め戻しを行い、同日に現地調査の一切を終了した。

2 調査成果

(1) 基本層序 (第3図)

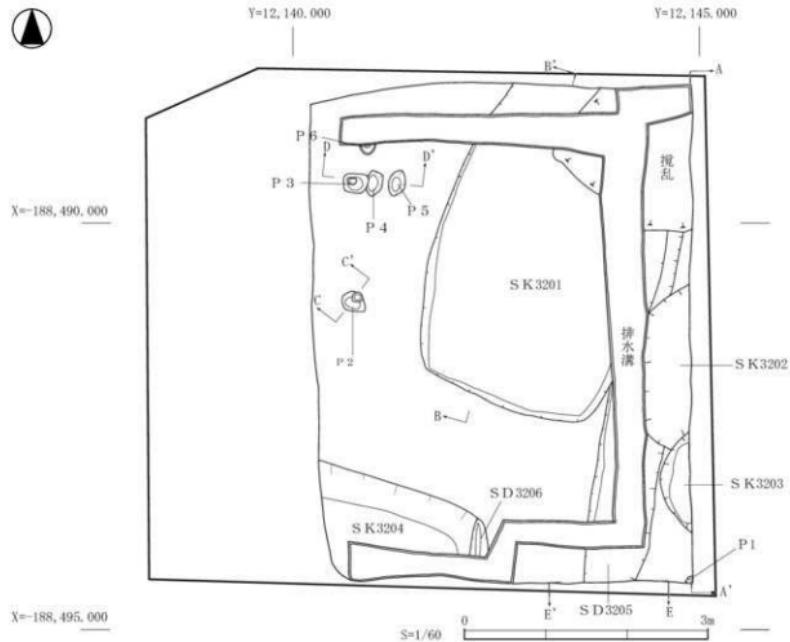
- I層：現代の盛土。層厚1m40cm程度。
- II層：旧表土層。黒色シルト（10YR1,7/1）。層厚10～20cm程度。
- III層：旧耕作土。暗褐色シルト（10YR3/4）。層厚15cm程度。
- IV層：遺構検出面。黄褐色砂質シルト（2.5Y5/3）。層厚1m以上。これより上面は削平を受けている。

(2) 発見遺構と遺物 (第3・4図)

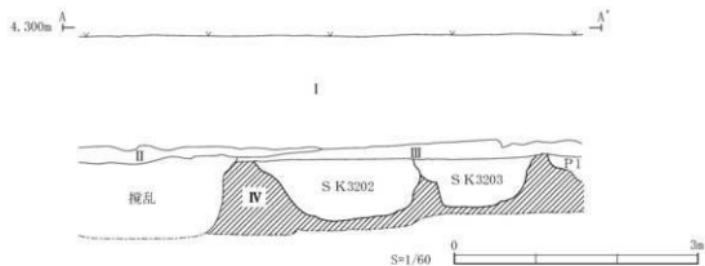
調査区内からは土坑4基、小溝2条、柱穴4基を発見した。



第1図 調査区位置図

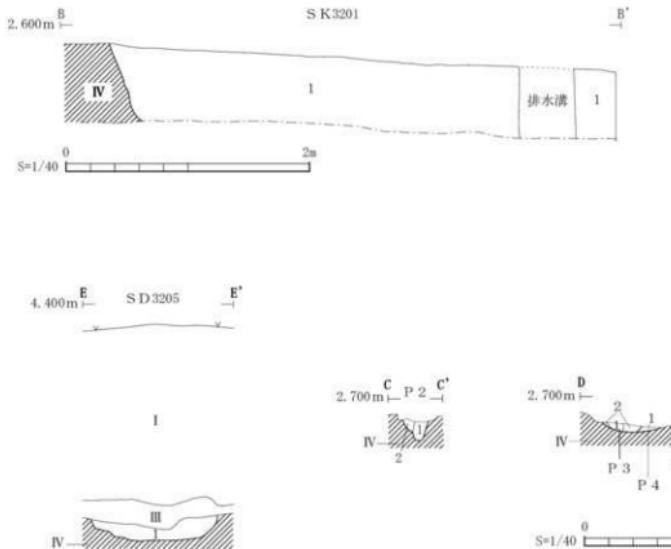


第2図 調査区平面図



造構	土色	粒度	粘性	しまり	備考
S K3202	黒褐色 (10YR3/1)	シルト	中	中	土器小片を少量含む。
S K3203	黒褐色 (7. 5YR3/1)	粘土	中	中	
P 1	黒褐色 (2. 5Y3/1)	シルト	中	中	

第3図 調査区東壁断面図



遺構	No.	土色	粒度	粘性	しまり	備考
SK 3201	1	黄灰色 (2.5Y4/1)	粘土	弱	中	黄系の砂が混じる。
P 2	1	黒褐色 (7.5YR3/1)	シルト	弱	強	抜取穴。
	2	灰褐色 (7.5YR4/2)	シルト	弱	中	地山の粒が混じる。
P 3	1	黒褐色 (10YR3/1)	シルト	強	強	抜取穴。粘質土。
	2	黄灰色 (2.5Y4/1)	シルト	中	中	地山ブロックが混じる。
P 4	1	黄灰色 (2.5Y5/1)	シルト	弱	中	砂質土。
P 5	1	灰黄色 (2.5Y6/2)	シルト	中	中	やや粘質土。
SD 3205	1	褐灰色 (10YR4/1)	シルト	中	中	

第4図 遺構断面図

S K3201土坑（第4図）

【位置】調査区中央に位置する。

【重複】S D3205溝跡と重複し、それより新しい。S K3202との切合は確認できない。

【平面形・規模】平面形は、隅丸長方形。規模は長軸で4m以上、短軸で約2.8m。長軸の方向は北で東に17度偏している。

【壁・底面】壁は直線的に立ち上がる。検出面より80cm程度掘り下げたところで、崩れやすい砂質の地山であったため安全を考慮し、掘削を停止した。そのため、遺構の底面を確認することはできなかった。

【埋土】人為堆積による単層である。

【遺物】土器の小片が少量出土した。

S D3205溝（第4図）

【位置】調査区東側に位置する。

【重複】調査区東半分の重複する遺構の中で最も古い。

【平面形・規模】南北方向の溝である。平面で確認できるのは溝の底部分であり、断面図で確認すると、幅は約1m、深さ約10～16cmである。

【埋土】単層である。

【遺物】遺物は出土しなかった。

3 まとめ

当該調査において、遺構はすべてIV層から掘り込まれているが、遺構の年代決定となる資料は出土していない。しかし、遺構を検出したIV層は、土色や土質等の類似性から、山王遺跡第221次調査における基本層VI層と対応すると考えられる。そのため、当該調査におけるIV層検出遺構も、古代及び近世の遺構であると考えられる。



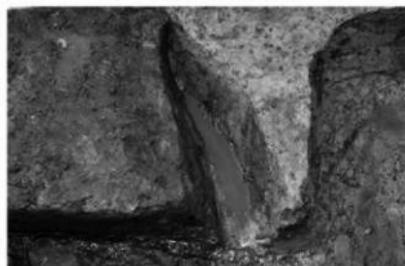
調査区全景（北から）



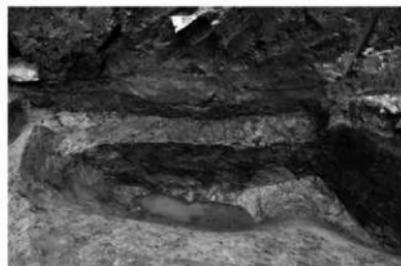
S P3207 断面（南東から）



P2・P3・P4 断面（南から）



S K3204・S D3206 重複状況（南から）



S K3204 断面（北から）

写真図版

22 山王遺跡第232次調査

1 調査に至る経緯と経過

本件は南宮宇伊勢における宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査である。令和3年6月29日、事業者から当該事業計画と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。計画では、現地表から最大約54cmの盛土を施した後、雨水排水側溝の設置を行い、幅約4mの道路を敷設するものであり、遺跡への影響が懸念された。

のことから、対象地における遺構の分布状況を把握する目的で、確認調査を行うこととなった。

その後、9月29日に地権者から発掘調査の依頼書及び承諾書が提出されたことを受け、10月5日には重機による掘削を開始した。

道路部分に2箇所、宅地部分に1箇所の調査区を設定し、それぞれ東からT1、T2、T3と呼称することとした。掘削はT1から西へ向かって通し番号順に行い、発生土は事業地内に仮置きした。

T1及びT2で東西方向に延びる2条の溝を確認した。両遺構は近接する山王遺跡第95次調査及び平成8年度宮城県調査区で発見した北2道路南北両側溝の延長に位置していることから、それらと一連の遺構と考えた。

調査区内における湧水が激しいことから、同月6日には調査区内に排水用側溝及び水中ポンプ設置用の釜場を作成した。その後、調査区全体の荒削りを行ったところ、T2で井戸跡とみられる落ち込み状遺構や、複数の柱穴を確認した。同月7日には全ての調査区の全景写真撮影、任意の測量基準点の設置を完了し、1/100スケールの調査区配置図を作成した。

その後降雨が続いたこともあり、1週間程度現地作業を中断したものの、同月14日から19日にかけて平面・断面図の作成を行い、当初任意で設定した測量基準点に対して世界測地系座標を与えた。同月22日には調査区の埋め戻しを、23日には休憩施設の撤去を行い、現地作業的一切を完了した。

2 調査成果

(1) 基本層序 (第2図)

Ia層：現代の盛土層。拳大の礫が大部分を占める。層厚は約1.25mである。

Ib層：旧耕作土。層厚20～40cmである。

II層：古代の最終堆積層。黒色粘土(10YR2/1)。地形の落ちや壅み等に部分的に堆積する。

III層：古代の遺構検出面。緑灰色シルト(566/1)。

(2) 発見遺構と遺物

S D3056溝跡 (第3・4・5図)



第1図 調査区位置図

【位置】T 1で確認した東西方向の溝跡である。北2道路南側溝とみられる。

【重複】他の遺構との重複はない。

【形状・規模】確認できた規模は、調査区東壁で上幅最大約120cm、深さ最大約60cmである。

【埋土】1層は黒褐色シルト(10YR3/1)である。φ 2~3mm程度の焼土を微量含む。2層は褐灰色シルト(10YR5/1)である。φ 5~6mm程度の灰白色火山灰ブロックを少量含む。3層はオリーブ灰色シルト(2.5GY6/1)である。

S D3057溝跡（第3・4・5図）

【位置】T 2南半部で確認した東西方向の溝跡である。北2道路北側溝とみられる。

【重複】小ビットと重複しており、これより古い。

【形状・規模】確認できた規模は、西壁で上幅最大約110cm、深さ最大約35cmである。

【埋土】1層は黒色粘土(10YR2/1)である。均質な自然堆積層。2層は黒褐色粘土(10YR3/1)である。地山由来のオリーブ灰色シルト(2.5GY6/1)ブロックを少量含む。3層はオリーブ灰色シルト(2.5GY6/1)である。φ 2cm程度の黒色粘土(10YR2/1)ブロックを少量含む。

S E3058井戸跡（第3・4図）

【位置】T 2北半部で発見した井戸跡である。

【重複】他の遺構との重複はない。

【遺物】掘方埋土1層から須恵器坏が出土している（第2図）。

3まとめ

- (1) 古代では、多賀城南面の方格地割を構成する北2道路の南北両側溝 S D3056・3057のほか、S E 3058井戸跡を確認した。
- (2) 小ビットは北2道路と重複しており、これより新しい。隣接地点の調査で同様の状況を確認したものについては、概ね近世のものと解釈されている（多賀城市教育委員会2013、宮城県教育委員会1998）。
- (3) 以上から、当該地点には古代及び近世の遺構が分布すると考えられる。

参考文献

多賀城市教育委員会2013『山王遺跡第9.5次調査』『多賀城市内の遺跡2』多賀城市文化財調査報告書第111集, pp. 18-25

宮城県教育委員会1998『山王遺跡町地区の調査』県道泉塩釜線開通調査報告書II-1』宮城県文化財調査報告書第175集



1

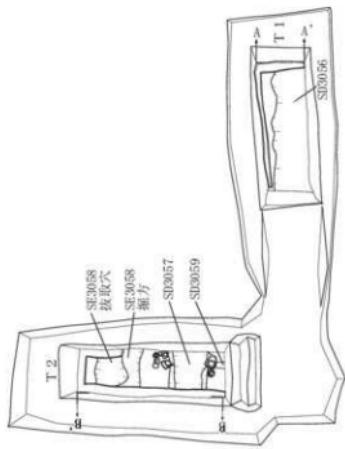
(単位: cm)

番号	種類	遺構	層位	特徴		法量			備考	登録番号
				外面	内面	口径	底径	器高		
1	須恵器坏	SE3058	掘方1層	ロクロナデ 底部: 回転糸切り後、周縁部のみ回転ヘラケズリ	ロクロナデ	-	(8.1) 5/24	-		R1

第2図 遺物実測図及び観察表



Y=1188, 505, 000



Y=1188, 515, 000



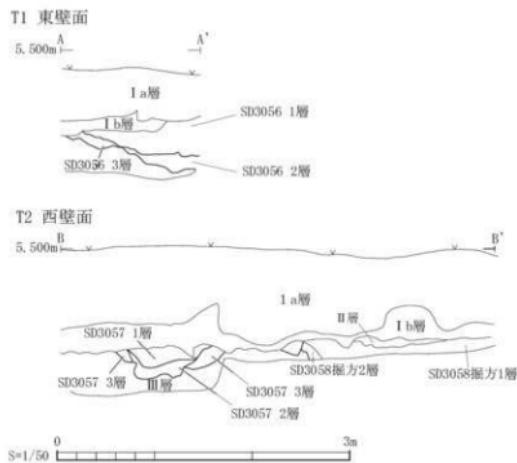
Y=12, 210, 000



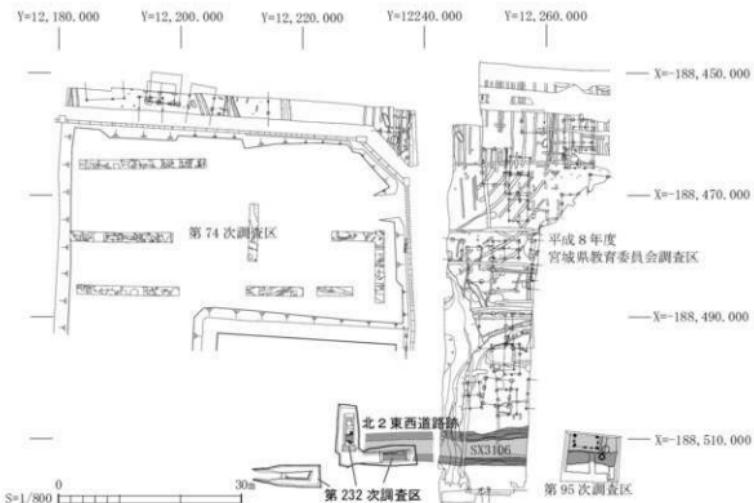
Y=12, 230, 000

Y=1220, 000

第3図 調査区平面図



第4図 調査区断面図



第5図 近隣の調査区との位置関係



T 1 遺構検出状況（西から）



T 2 遺構検出状況（西から）



T 3 遺構検出状況（東から）



T 3 深掘りトレンチ（西から）

T 1 東壁断面



T 2 北壁断面



北 2 道路検出状況（西から）



23 山王遺跡第 234 次調査

1 調査に至る経緯と経過

本件は、山王字山王地内における宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査である。

令和 3 年 5 月 13 日に地権者から当該地における宅地造成工事計画と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。計画では開発面積 2,358.8 m² の敷地に幅 6 m の道路と 11 区画の宅地を造成するもので、現地表から約 85 cm の盛土をした後、最大 1.2 m の掘削を行うものである。

申請地周辺では南側で昭和 63 年度に第 7 次調査を実施しており、現地表から約 20 cm のところで遺構が発見されている。このことから、当該地区も遺跡が広がっていることが想定されるため、確認調査を実施することに

なった。その後、令和 3 年 10 月 1 日に事業者より発掘調査の依頼書及び承諾書の提出を受け、確認調査を行うこととなった。

令和 3 年 10 月 18 日から調査に着手した。開発敷地内に 5ヶ所のトレンチを設定し、重機で盛土・表土を除去し、II 層上面で遺構が検出された。また、一部深掘りを行い、下層の状況を確認した。平面図・断面図作成、写真撮影などの記録は 10 月 29 日までに終了した。30 日に埋戻しを行い、11 月 2 日にテント及び仮設トイレの返却を終え、すべての調査を終了した。

2 調査成果

(1) 基本層序

I a 層：現代の水稻耕作土層。暗オリーブ灰色粘土 (2.5GY3/1)。厚さは約 20 cm である。

I b 層：現代の水稻耕作土層。灰オリーブ色年度 (7.5Y4/2)。1 区南端から、2 区に向けて畦畔を確認した。厚さは約 10 cm である。上面に酸化鉄の層が含まれる。

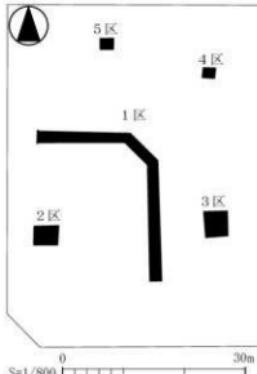
II 層：古代の遺構検出面。にぶい黄色年度 (2.5Y6/4)。酸化鉄を含む。厚さは約 30 cm である。

III 層：にぶい黄色シルト (2.5Y6/4)。酸化鉄を含む。厚さは 10 cm である。

IV 層：にぶい黄色シルト (2.5Y6/4)。厚さは約 20 cm である。



第 1 図 調査区位置図

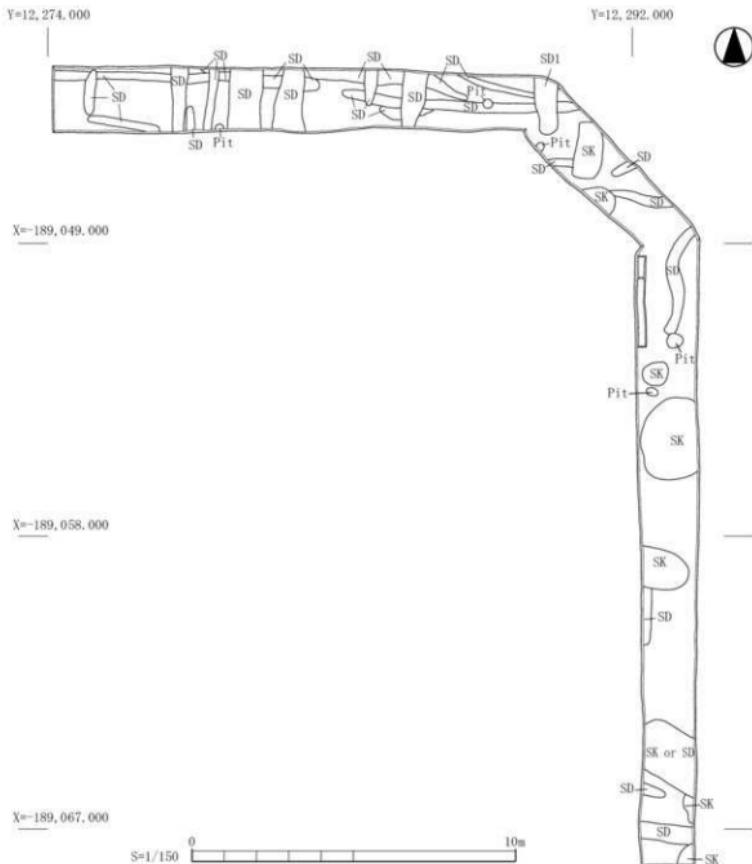


第 2 図 調査区配置図

(2) 発見遺構と遺物

調査区1区北側で、東西及び南北に並行する小溝群や南北に並行する溝跡が密度濃く分布している様子を確認した。調査区南側では、溝跡や土坑、柱穴などを確認した（第3図）。

遺物に関しては、SD1で底部が回転糸切された須恵器壺の底部や甕、土師器の小破片が出土している。II層からは須恵器や土師器の小破片が少量ではあるが出土している。遺構の掘り下げは行っていないが、出土遺物から古代に属する遺構であると推定される。



第3図 1区平面図

(3)まとめ

今回の調査では、遺構の分布について調査区のほぼ全体に及んでいる状況を確認した。遺構の掘り下げに関しては行っていないため、詳細な時代は不明ではあるが、遺構確認面であるII層および遺構の埋土から土師器と須恵器が出土していることから、古代に属する遺構であると推定される。

調査区南側では、昭和63年度に当計画地の南側で第7次調査を実施しており、古代の土坑や溝跡、柱穴が発見されている。このことから本調査区にも同様な遺構の広がりがあると推定される。

また、計画地東側と西側で遺構確認面であるII層上面までの深さを確認するため、2～5区の試掘を行った。地表面から20cm～40cmの深さで2層上面となる。2、3、4区で溝跡を確認し、5区では遺構は確認されなかった。



1区 南側検出状況（南から）



1区 北側検出状況（西から）

24 山王遺跡第235次調査

1 調査に至る経緯と経過

本件は、南宮字町地内における個人住宅新築工事に伴う確認調査である。令和3年10月12日に、事業者から当該事業計画と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。計画では、住宅基礎部分において、42か所に6.75mの柱状改良杭の設置が予定されており、当該工事により遺跡への影響が懸念された。このため、工法変更による遺跡の保存協議を行ったが、提出された基礎工法以外では十分な地盤強度を得られないと判断されたことから、発掘調査による記録保存が必要となった。

その後、地権者から発掘調査の承諾書が提出され、重機提供の申し出を受けたことから、11月19日に3箇所のトレンチを設定し、重機により表土掘削を行った。

本件の西側に隣接する第42次調査では、溝跡や土坑を確認しているが、本調査区においては近代のかく乱が認められるのみで、いずれの調査区でも遺構は確認されなかった。そのため、当該地には残存していないと判断し、トレンチの写真撮影及び図面作成を行い、同日中に埋戻して現地作業の一切を終了した。

2 調査成果

I a層：現代の住宅盛土層。暗褐色土（10YR3/4）。層厚約20cmである。

I b層：現代の住宅盛土層。明黄褐色土（2.5Y7/6）。層厚約20～45cmである。

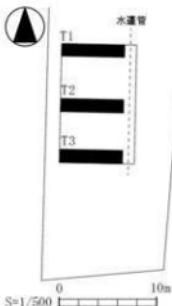
II 層：近代の盛土層。黒褐色土（10YR3/2）。層厚約80cmである。T 3では、

III層との境で、近代の火災の際の炭化物と思われる整地層を確認した。

III 層：古代の地山面。オリーブ褐色粘質土（2.5Y4/3）。層厚約10cm以上と考えられる。



第1図 調査区位置図



第2図 調査区配置図



T 1 検出状況（東から）



T 1 基本層序（北から）

25 山王遺跡第237次調査

1 調査に至る経緯と経過

本件は、南宮字八幡地内における排水路整備工事に伴う発掘調査である。令和4年1月18日に、事業者から当該事業計画と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。本件工事は、既存の土側溝の底面を長さ35.3m、幅1.3m、深さ24cmの規模で掘下げ、新たにフリューム側溝を設置する計画である。しかし、周辺の調査成果や、事前の試掘調査の結果から、工事による掘削が遺構面まで達しない状況を確認し、遺構検出面まで保護層が確保される状況を提示したが、宮城県文化財課から確認調査の指示回答であった。そのため、指示事項に則り当該調査を実施した。

その後、地権者から発掘調査の承諾書が提出され、重機提供の申し出を受けたことから、2月8日に2箇所の調査区を設定し、重機により表土掘削を行った。

検出作業の結果、いずれの調査区でも遺構は確認されなかったため、トレンチの写真撮影及び図面作成を行い、2月9日に当該地を引渡して現地作業の一切を終了した。

2 調査成果

I層：表土層・既存排水路堆積層。暗褐色土（10YR3/3）。層厚約100cmである。

II層：古代以降の堆積層。黒褐色土（10YR2/2）。層厚約30cmである。

III層：古代の堆積層。にぶい黄色粘質土（2.5Y6/4）。層厚約30cmである。T1の東側に残存している。

黒褐色粘土層が互層状に混入している。

IV層：古代の地山面。明黄褐色砂層（2.5Y6/6）。



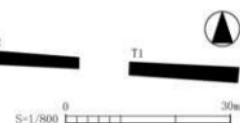
T1 検出状況（東から）



T1 基本層序（北から）



第1図 調査区位置図



第2図 調査区配置図

26 市川橋遺跡第101次調査

1 調査に至る経緯と経過

本件は、城南二丁目地内における個人住宅新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査である。令和2年12月9日に、事業者から当該事業計画と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。計画では、住宅基礎部分において、29か所に7mの柱状改良杭の設置が予定されていた。

申請地の南側隣接道路では平成10～14年度に実施した第25～29次調査において、方格地割を形成する東1道路をはじめ、竪穴建物跡や掘立柱建物跡等、多数の遺構を発見している。そのため、当該工事により遺跡への影響が懸念されることから、工法変更による遺跡の保存協議を行ったが、提出された基礎工法以外では十分な地盤強度を得られない判断され、発掘調査による記録保存を行うこととなった。

その後、地権者から12月24日に埋蔵文化財発掘の届出、令和3年7月15日に発掘調査の承諾書が提出されたことを受け、7月26日に重機による表土掘削を行い、発生土の大部分をダンプトラックにより場外へ搬出した。

表土掘削完了後は作業員を動員して、調査区の環境整備を開始した。

8月3日には第II層の遺構検出作業を終え、写真撮影を行った。遺構検出の結果、古代のものとみられる土坑を確認した。8月10日には測量座標杭の設置や平面図の作成を行い、8月18日から第II層の掘下げを開始した。8月19日には第III層の遺構検出作業を終え、写真撮影を行った。遺構検出の結果、東1南北道路西側溝の一部や、小溝群等を確認した。8月20日には第III層の平面図を作成し、順次遺構の掘下げを行った。8月27日には各遺構の断面図を作成し、調査区外周壁面や、サブトレンチの土層観察により、第IV層以下に古墳時代以前の遺構は存在しないと判断した。

8月30日には完掘状況の写真撮影、9月1日に機材撤収、9月7日に調査区の埋戻しを行い、現地作業の一切を終了した。

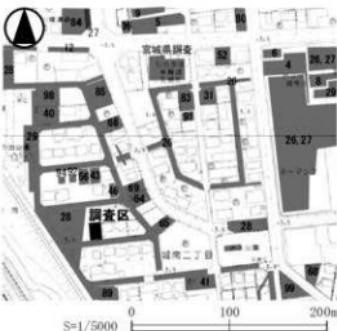
2 調査成果

(1) 基本層序（第4図）

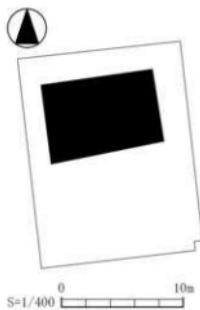
I a層：城南地区土地区画整理事業時の盛土層。灰黄色礫層（2.5Y6/2）。層厚約200cmである。

I b層：現代の水稻耕作土層。褐色粘土（10YR4/1）。層厚約40cmである。

II 層：古代の基盤層で第I 遺構検出面。黒褐色土（10YR3/1）。遺物・炭化物微量含む。層厚約15～30cm



第1図 調査区位置図



第2図 調査区配置図

である。上面は後世の削平を受けている。

III 層：古代の基盤層で第Ⅱ遺構検出面。暗灰黄色シルト（2.5Y5/2）。層厚約10cmである。

IV 層：古代以前の堆積層。黄灰色砂層（2.5Y4/1）。層厚約7cmである。

V 層：古代以前の基盤層。黄灰色シルト（2.5Y6/1）。層厚約15cmである。

VI 層：古代以前の基盤層。暗灰黄色粘質シルト（2.5Y5/2）。層厚約10～20cmである。

VII 層：古代以前の堆積層。暗灰黄色砂層（2.5Y5/2）。層厚約15cmである。

VIII 層：古代以前の基盤層。黄灰色シルト（2.5Y4/1）。層厚約20cmである。

（2）発見遺構と遺物

II層上面で土坑、III層上面で東1道路西側溝・小溝群・ピットを確認した。

【III層上面】

S D3621東1道路西側溝（第3～5図）

【位置】調査区東側で発見した南北方向の溝跡である。方向は北で東に7度偏している。

【調査状況・重複】SX3622小溝群と重複し、それより新しい。

【形状・規模】上幅は145cm以上、深さ55cmである。底面は皿状で、壁は緩やかに立ち上がる。

【埋土】2層に区分される。1層は黒褐色粘質土（2.5Y3/1）で、粘性やや強く、締まりは密、炭化物・砂粒少量含む。2層は黒褐色粘質土（2.5Y3/1）で、粘性やや強く、締まりは密、 ϕ 5～10cm黄褐色ブロックやや多く含む。

【遺物】遺物は須恵器坏1点（第6図）の他、須恵器坏3点、甕6点、土師器坏1点、甕5点、不明1点が出土しているがいずれも小破片である。

S X3622小溝群（第3～5図）

【位置】調査区全域で発見した小溝群で、4条確認した。方向は西で北に約2度～6度偏している。

【調査状況・重複】SK3620・SD3621・P2・P3と重複しており、SK3620・SD3621より古く、P2・P3より新しい。

【形状・規模】上幅は20cmから75cm、深さ5cmから8cmである。底面は皿状または平坦であり、壁は緩やかに立ち上がる。

【埋土】単層の黒褐色土（10YR3/1）。粘性なし。締まり密。 ϕ 5mm～1cm程度の黄褐色ブロック・砂粒を微量含む。

【遺物】遺物は出土していない。

【II層上面】

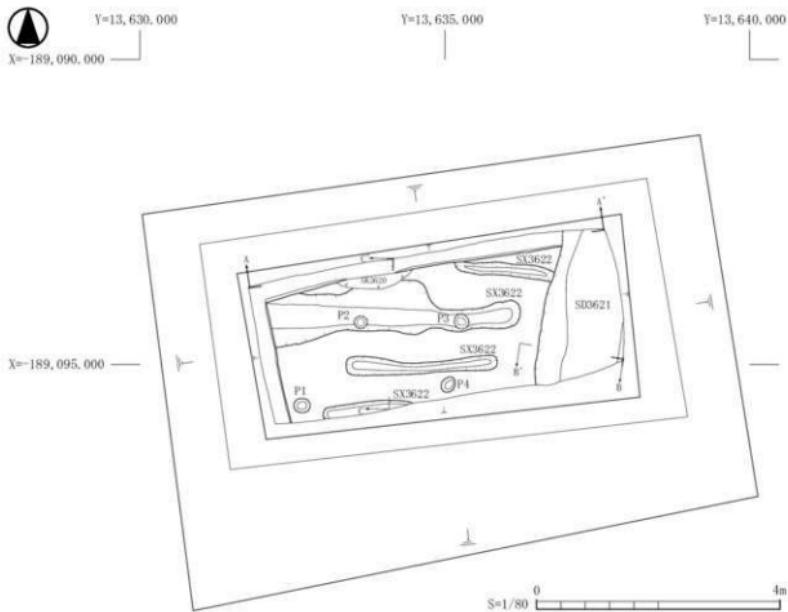
S K3620土坑（第4・7図）

【位置】調査区北側で発見した土坑である。

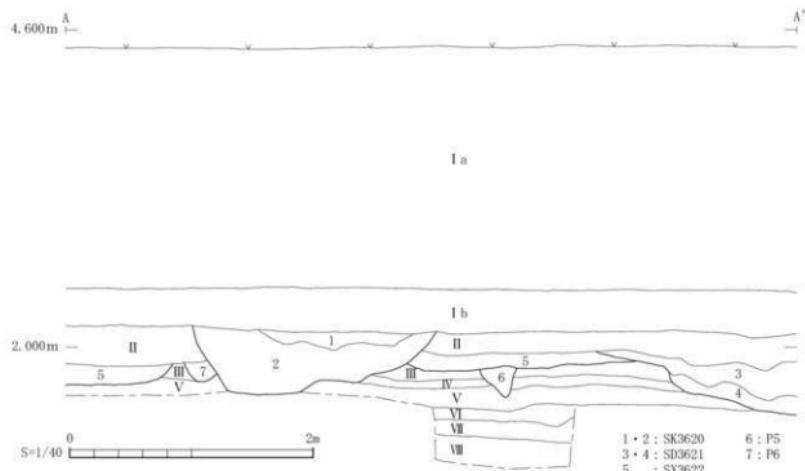
【調査状況・重複】SX3622小溝群と重複し、それより新しい。

【形状・規模】長軸200cm以上、短軸70cm以上、深さ53cmである。底面は一部段状であるが概ね平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。

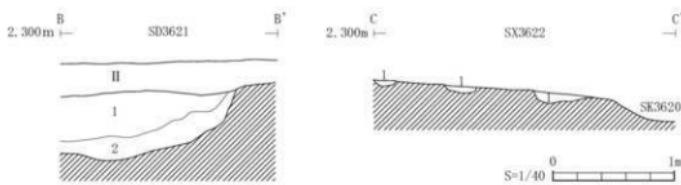
【埋土】2層に区分される。1層は黒褐色土（10YR3/2）で、粘性なし、締まりは密、炭化物微量含む。2層は黒褐色土（10YR2/2）で、粘性なし、締まりは密、炭化物・ ϕ 2～5cm黄褐色ブロック多量含む。



第3図 調査区平面図（III層検出遺構）



第4図 調査区北壁土層断面図



SD3621 1層 黒褐色粘質土 (2.5Y3/1) 炭化物・砂粒少量含む
2層 黒褐色粘質土 (2.5Y3/1) ϕ 5cm 黄褐色ブロックやや多く含む
SX3622 1層 黒褐色粘土 (10YR3/1) 黄褐色ブロック・砂粒少量含む

第5図 遺構断面図



番号	種類	遺構	層位	特徴		法量 口 径 底 残存率	器高	備考	登録 番号
				外面	内面				
1	須恵器坏	SD3621	1	ロクロナデ 底部:回転ヘラ切り 無調整	ロクロナデ	(15.0) 2/24	(9.2) 13/24	4.4	R2

第6図 SD3621 出土遺物

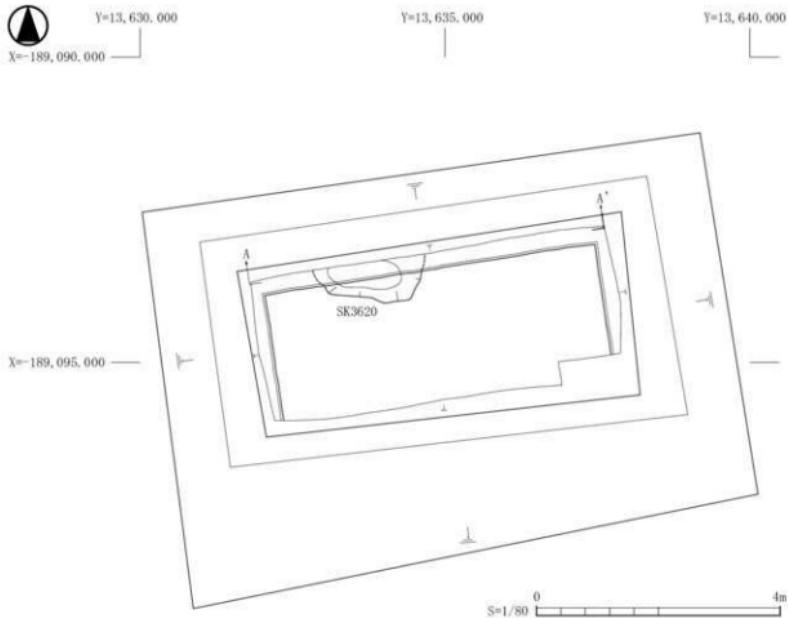
【遺物】遺物は須恵器坏1点、瓶類1点、不明1点、土師器坏1点、坏蓋1点、甕6点が出土しているが、いずれも小破片である。

(3) その他の遺物（第8図）

P1から土師器甕3点、基本層II層から、須恵器杯1点（第6図1）の他、灰釉陶器1点、須恵器坏18点、坏蓋1点、甕17点、瓶類5点、瓦2点、土師器坏19点、坏蓋1点、甕99点が出土しているが、いずれも小破片である。

3 まとめ

ここでは、III層上面で確認したSD3621の層位と出土遺物、周辺の調査成果からその性格について検討する。



第7図 調査区平面図（II層検出遺構）



番号	種類	遺構	層位	特徴		法量			備考	登録番号
				外面	内面	口径 底径 残存率	底径 残存率	器高		
1	須恵器坏	遺構検出面	II	ロクロナデ 底部：回転ヘラ切り 無調整	ロクロナデ	(14.2) 4/24	(8.2) 10/24	(3.4)	墨書「紀」	R1

第8図 II層出土遺物

SD3621は、多賀城市城南地区土地区画整理事業に伴う市川橋遺跡第28次調査（多賀城市教育委員会2004）において確認されている、104区東1道路西側溝（以下、SD1941）の北側延長線上に該当するものと考えられる（第9図）。



第9図 東1道路西側溝 想定模式図

次に、基本層序の対応関係についてみてみると、当該調査ではⅠ層（表土層）直下にⅡ層が認められ、中世以降の遺物は混入しないことから、古代の基本層と考えられる。また、第28次調査の基本層序②地点ではⅠ層（表土層）直下がⅣ層で、灰白色火山灰降下以前の堆積層と位置付けている。その他、土質や混入物などの様相から、当該調査基本層第Ⅱ層と第28次調査基本層第Ⅳ層が対応関係にあると考えられる。

次に、SD3621とSD1941の対応関係についてみてみると、SD3621は基本層第Ⅱ層に覆われており、その西侧に重複する構跡は認められない。SD1941の場合、基本層第Ⅳ層に覆われる時期は古い時代からa～c期の3時期が確認されているが、その中で西侧に構跡の重複が認められない時期はa期のみである。以上のことから、SD3621は東1道路西側溝の中で最も古いa期に該当すると考えられる。また、当該調査区で確認できなかったb・c期については、東側の調査区外に残存しているものと想定される。

次に出土遺物から造構の年代を検討してみると、SD3621では須恵器・壺III類（回転ヘラ切り→無調整）1点（第6図）が出土しているが、それ以外の遺物は小破片であり、年代決定には至らない。また、SD1941については、報告書中に造構の年代について触れられていないため詳細は不明であるが、基本層Ⅳ層に覆われている状況である。以上のことから、東1道路西側溝a期は、造成時期として概ね9世紀後半を下らないと考えられる。

参考文献

多賀城市教育委員会2004『市川橋道路一城南土地区画整理事業に係る発掘調査報告書III－』多賀城市文化財調査報告書第75集



II層検出状況（南東から）



SK3620 断面（南から）



作業状況（東から）

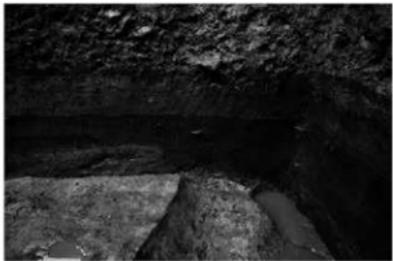


III層検出状況（東から）



平面図作成状況（西から）

写真図版 1



SD3621 東 1 道路西側溝北壁断面（南から）



SD3621 東 1 道路西側溝完掘状況（北から）



SX3622 小溝群断面（東から）



調査区北壁基本層序（南から）



III層完掘状況（東から）

写真図版 2

27 高崎遺跡第129次調査

1 調査に至る経緯と経過

本件は、高崎二丁目地内における宅地造成工事に伴う確認調査である。

令和3年4月25日、地権者より当該地での宅地造成計画と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。計画では、約928m²の範囲において、現地表から最大約30cmの盛土を行い、最大深さ90cmの掘削を行うものである。当該地の西側の第17次調査では、現地表から約25cm下で遺構を発見している。このことから、遺跡への影響が懸念されたため、確認調査を行うこととなった。

地権者から令和3年9月6日に発掘調査の依頼者と承諾書の提出を受け、9月27日から発掘調査に着手した。計画地内に6箇所の調査区を設定した。重機で盛土・表土を除去した。9月28日から発掘作業員による遺構の検出作業を行ったが、遺構、遺物は確認出来なかった。28日に掘削及び断面図作成、写真撮影などの記録を終了した。10月4日に埋戻しを行い、調査を終了した。



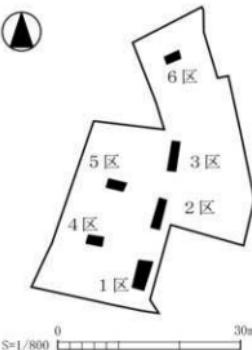
1区 完掘状況（東から）



6区 完掘状況（南から）



第1図 調査区位置図



第2図 調査区配置図

28 野田遺跡第6次調査

1 調査に至る経緯と経過

本件は、留ヶ谷二丁目における樹木抜根工事に伴う埋蔵文化財発掘調査である。

令和3年2月15日に事業者より当該地での当該事業計画と埋蔵文化財の関わりについての協議書が提出された。計画は、当該地約18,000m²の範囲内で樹木抜根を実施するものである。当該地では、平成19年度に第4次調査（確認調査）を実施しており、南向きの傾斜地で竪穴建物跡等の遺構を検出している。しかしながら、第4次調査では遺跡の西側を部分的に調査したに留まり、遺跡全体の広がりは把握しきれていない。樹木抜根工事の後、宅地造成工事を実施することを考慮し、遺跡の広がりを確認する

必要があつたため、確認調査を実施することになった。

事業者より発掘調査の依頼書及び承諾書の提出されたことから、6月15日より現地調査を開始した。調査区が広域であるため、丘陵の尾根を境に北斜面を北区、南斜面を南区として、北区に12箇所、南区に26箇所の調査区を設定し、北区から重機で表土掘削を行った。なお、南区には野田遺跡第4次調査の調査区が含まれているが、確認調査が完了しているため、今回の調査対象からは除外した。

6月16日より作業員を動員し表土掘削が完了した北区から、順次調査区内の精査を実施した。6月18日より重機での表土掘削及び調査区内の精査と並行して、光波測量を開始した。精査が完了した調査区では、記録作業を行った。7月29日から8月3日までの4日間重機による埋め戻しを行った。8月5日には、休憩施設と発掘器材等の撤収を行い、確認調査を終了した。

2 調査成果

（1）基本層序

丘陵の尾根付近は遺構検出面（V層）まで、基本的に表土（I層）があるのみである。しかしながら、当該地は丘陵地であるため斜面の傾きや形状によって、部分的に堆積層や旧表土が見られる。北区斜面標に設定した6Tでは、表土以外にも土層の重なりが見られた。

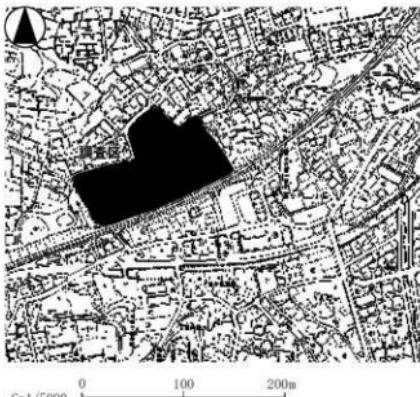
I層：表土。にぶい黄褐色砂層（10YR4/3）。

II層：盛土整地層。明黄褐色砂層（2.5YR6/6）。小礫が混じる。北区6Tでのみ検出。

III層：旧表土。暗褐色砂層（10YR3/3）。

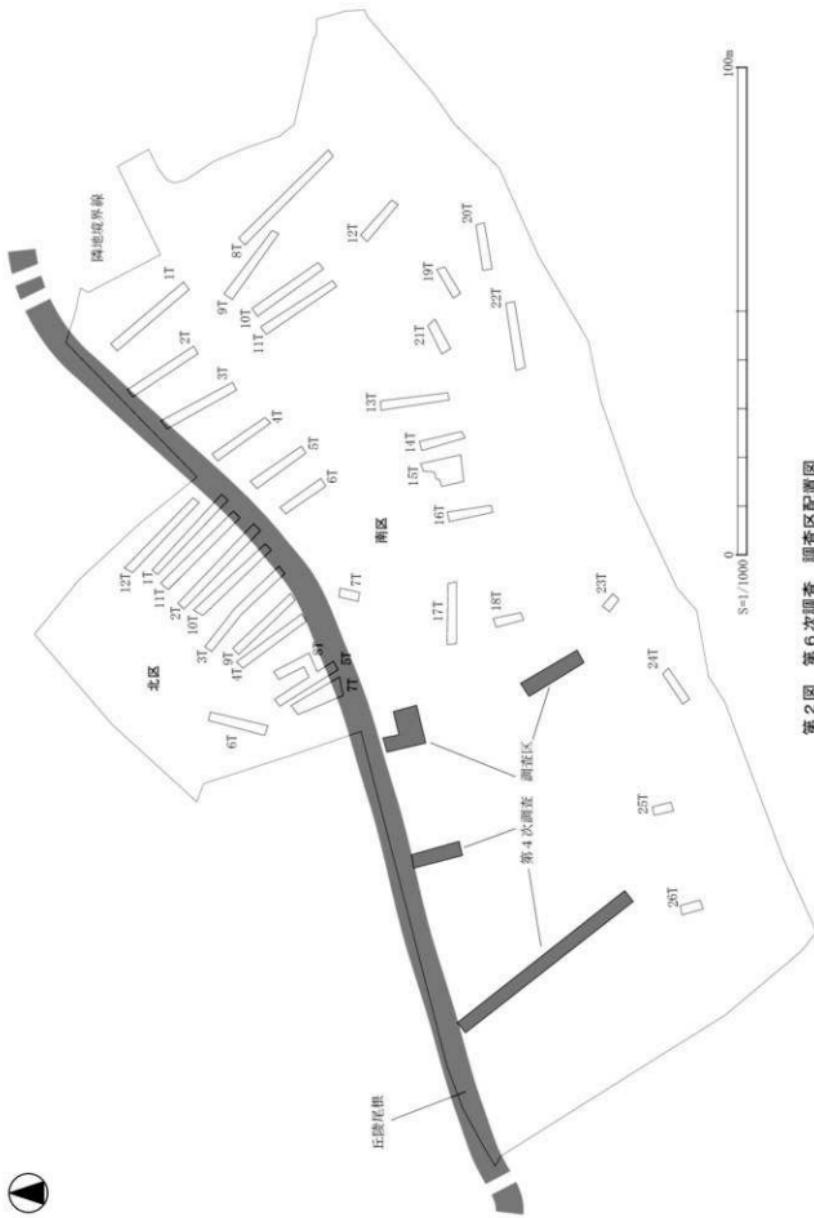
IV層：堆積層。にぶい黄褐色均質砂層（10YR4/3）。

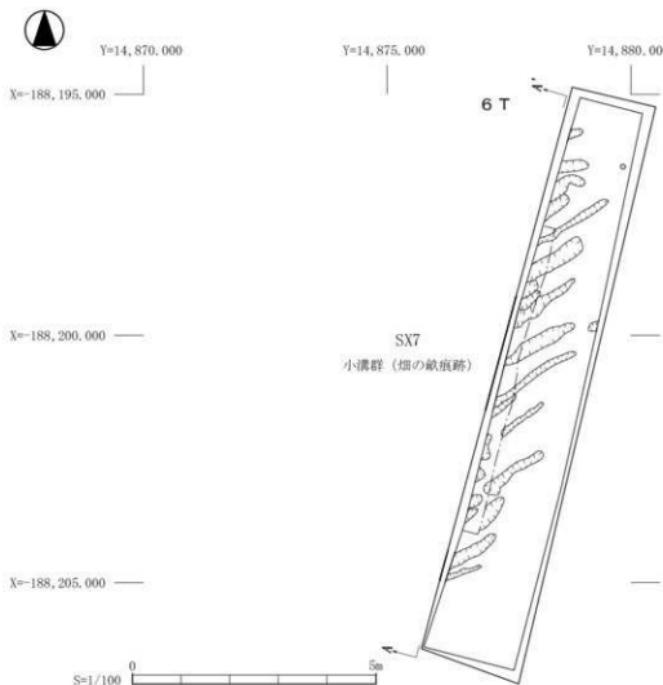
V層：地山。遺構検出面。褐色砂層（10YR4/6）。



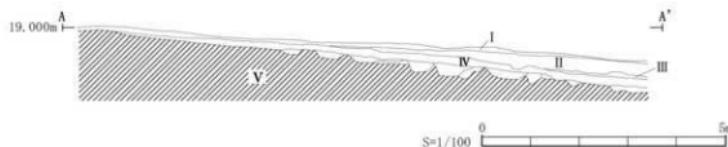
第1図 調査区位置図

第2図 第6次調査 調査区配置図



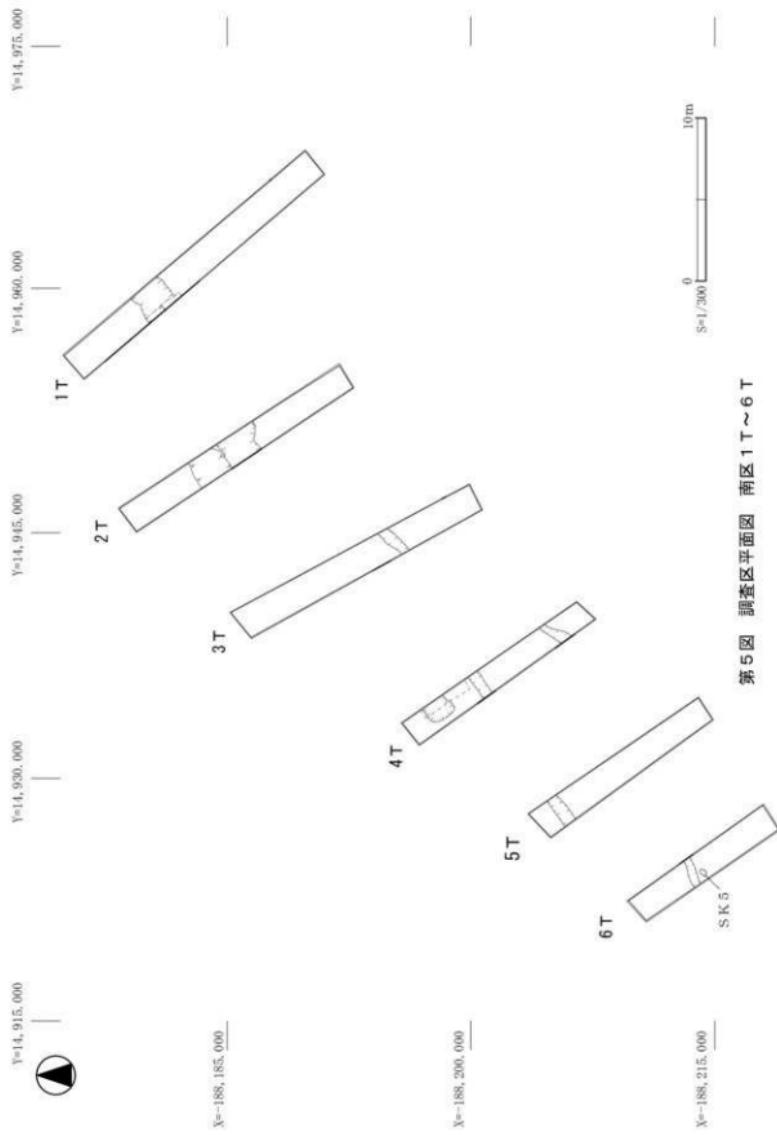


第3図 調査区平面図 北区 6T

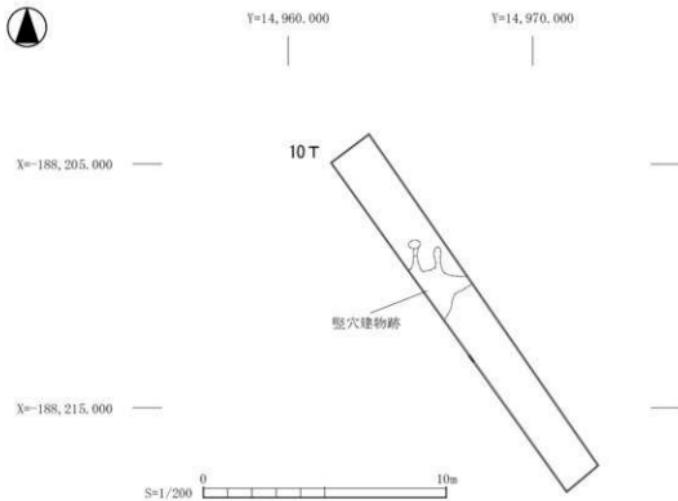


遺構	層位	土色	粒度	備考
S X 7 小溝群 (烟の歯痕跡)	I	褐色 (10YR4/6)	砂	地山のブロックに黒褐色 (10YR3/2) の砂のブロックが混じる。人為的に埋め戻されたもの。

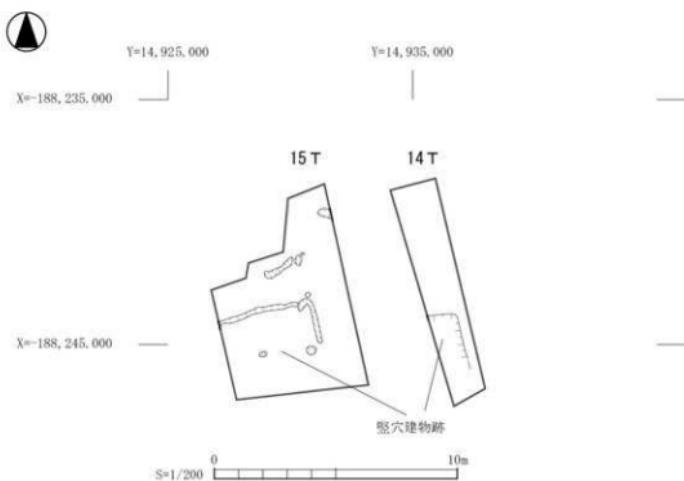
第4図 調査区西壁断面図 北区 6T



第5図 調査区平面図 南区1T～6T



第6図 調査区平面図 南区 10T



第7図 調査区平面図 南区 14T ~ 15T



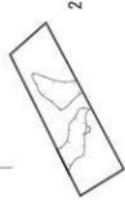
X=188,240,000 ————— Y=14,965,000

Y=14,985,000

X=188,250,000 —————

Y=14,975,000

Y=14,965,000



21 T



19 T

X=188,260,000 —————

—

Y=14,975,000



Sd6

20 T

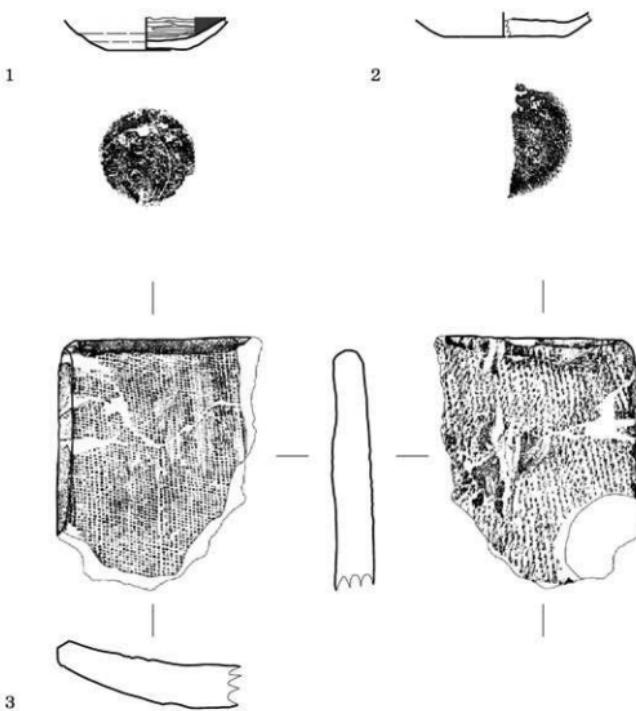


22 T

X=188,260,000 —————



第8図 調査区平面図 南区 19 T ~ 22 T



S=1/3 0 10cm

(単位: cm)

No.	種類	造構	層位	特徴		口 組 残存率	底 組 残存率	器高	登録 番号	備考
				外面	内面					
1	土師器 环	南区6T SK5	I	ロクロナデ 底部:回転糸切り、 無調整	ヘラミガキ、黒色処理	—	5.0cm 21/24	(2.0cm)	R1	A類
2	須恵器 环	南区22T	I	ロクロナデ 底部:切り離し不明	ロクロナデ	—	7.2cm 11/24	(1.5cm)	R5	I類
3	瓦 平瓦	南区20T SD6	I	縹目	布目	—	—	—	R4	

第9図 出土遺物実測図

なお、当該地は丘陵地であるため、掘削した深さや層厚は場所による異なる。

（2）発見遺構と遺物（第3・4・5・6・7・8・9図）

北区では、6Tで、畑の歯の痕跡を発見したが、その他の調査区では遺構は検出しなかった。南区では、丘陵上の1T～6Tから溝跡や土坑、丘陵斜面裾部の10T、14T～15Tから竪穴建物跡、JR東北本線線路沿いの19T～22Tから小溝群を検出した。

遺物は、平瓦片、土器片等が出土している。

【北区6T】

SX7小溝群（畑の歯跡）（第3・4図）

【位置】調査区の西壁寄り。

【平面形・規模】形状は、調査区西壁から北東に向かう細い小溝状。20条程度が平行している。

【遺物】埋土から須恵系土器の坏類体部小片が出土している。

【南区6T】

SK5土坑（第5図）

【位置】調査区の中央西壁寄り。

【平面形・規模】形状は、やや不整形。規模は長軸約40cm、短軸約30cm。

【遺物】ロクロ成形で、内面に黒色処理を施した土器器坏の底部（A類）（第9図1）が出土している。

【南区20T】

SD6小溝跡（第8図）

【位置】調査区の中央南壁寄り。

【平面形・規模】形状は、南北に長い小溝状。溝の幅は約50cm。

【遺物】平瓦片（第9図3）等が出土している。

3 まとめ

野田遺跡第4次調査では、南向きの丘陵西側にある上段の平坦部に竪穴建物跡2軒が発見されていた。第6次調査では南向きの丘陵裾の平坦部東側（10T）と中央（14T～15T）に竪穴建物跡を検出したことから、南向きの丘陵の平坦部には古代の竪穴建物群が存在する可能性がある。



北区 6 T 全景（北から）



南区 6 T SK 5 土師器坏底部出土状况



南区 10 T 全景（北から）



南区 14 T 全景（北から）

写真図版 1



南区 15T 全景（南から）



南区 19T 全景（南から）



南区 20T 全景（西から）

写真図版 2



南区 21 T 全景（東から）



南区 22 T 全景（東から）



1



3



2



出土遺物写真

写真図版 3

報告書抄録

ふりがな	たがじょうしないのいせき 2							
書名	多賀城市内の遺跡 2							
副書名	令和3年度ほか発掘調査報告書 新田遺跡 山王遺跡 市川橋遺跡 高崎遺跡 野田遺跡 小沢原遺跡 留ヶ谷遺跡 東田中塙前遺跡							
シリーズ名	多賀城市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第152集							
編著者名	大木丈夫 丹野修太 小原駿平 赤澤靖章 桑折肇 高橋伶奈							
編集機関	多賀城市埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒985-0873 宮城県多賀城市中央二丁目27-1 Tel : 022-368-0134							
発行年月日								
ふりがな 所取遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
山王遺跡 (第226次)	あやざけんたがじょうしなんぐあざわら ばん 宮城県多賀城市南宮字61番	042099	18013	38度18分04秒	140度58分42秒	20201130 ～ 20201225	83.22m ²	個人住宅 新築
高崎遺跡 (第127次)	あやざけんたがじょうしどめ が いっちょう 宮城県多賀城市留ヶ谷一丁目31-5	042099	18018	38度17分38秒	140度59分47秒	20200911 ～ 20200917	45m ²	個人住宅 新築
東田中塙前遺跡 (第9次)	あやざけんたがじょう ひがしたなかいちょう 宮城県多賀城市東田中一丁目283-2	042099	18037	38度17分36秒	140度59分45秒	20201209 ～ 20201225	18.75m ²	個人住宅 新築
小沢原遺跡 (第21次)	あやざけんたがじょうしきしま じょうの 宮城県多賀城市浮島二丁目319番1、 341番、349番1、351番1	042099	18043	38度18分13秒	141度00分09秒	20201130 ～ 20201225	238.7m ²	介護施設 建
留ヶ谷遺跡 (第10次)	あやざけんたがじょうしどめ が いっちょ 宮城県多賀城市留ヶ谷一丁目330番13	042099	18047	38度18分05秒	141度00分18秒	20201207 ～ 20201208	88m ²	個人住宅 新築
新田遺跡 (第151次)	あやざけんたがじょうしなんぐあざわいりづか 宮城県多賀城市南宮字一里塙101番1 の一部	042099	18012	38度18分04秒	140度57分49秒	20210412 ～ 20210601	65.52m ²	個人住宅 新築
新田遺跡 (第152次)	あやざけんたがじょうしなんぐあざわいりづか 宮城県多賀城市南宮字一里塙101番1 の一部	042099	18012	38度18分03秒	140度57分49秒	20210412 ～ 20210601	61.6m ²	個人住宅 新築
新田遺跡 (第153次)	あやざけんたがじょうしなんぐあざわいりづか 宮城県多賀城市南宮字一里塙101番1 の一部	042099	18012	38度18分03秒	140度57分18秒	20210412 ～ 20210601	54.21m ²	個人住宅 新築
新田遺跡 (第154次)	あやざけんたがじょうしへいだねくわ ばん 宮城県多賀城市新田字後104番の一部 75-2、79-1、 なんぐあざわいりづか 105番1の一部	042099	18012	38度17分57秒	140度57分31秒	20210413 ～ 20210507	200m ²	賃貸住宅 及び道路 造成
新田遺跡 (第155次)	あやざけんたがじょう なんぐあざわいりづか 南宮字一里塙81-1、102-1、104-4、 75-2、79-1、 なんぐあざわいりづか 南宮字庚申294、293-5	042099	18012	38度18分03秒	140度57分47秒	20210412 ～ 20210603	200m ²	宅地造成
新田遺跡 (第157次)	あやざけんたがじょうしへいだねくわ ばん 宮城県多賀城市新田字後16番7	042099	18012	38度17分57秒	140度57分40秒	20210915 ～ 20211019	56.35m ²	個人住宅 新築
新田遺跡 (第158次)	あやざけんたがじょうしなんぐあざこしらん ばん 宮城県多賀城市南宮字庚申228番、 298番の一部	042099	18012	38度18分05秒	140度57分53秒	20211020 ～ 20211130	50.4m ²	個人住宅 新築
新田遺跡 (第159次)	あやざけんたがじょうしなんぐあざこしらん ばん 宮城県多賀城市南宮字庚申295番1、 299番の各一部	042099	18012	38度18分05秒	140度57分52秒	20211020 ～ 20211130	62.9m ²	個人住宅 新築

新田遺跡 (第161次)	宮城県多賀城市新田字六ヶ崎5番地2、5番地16、7番地1、7番地2の各一部	042099	18012	38度 17分 49秒	140度 57分 39秒	20211222	16m ²	個人住宅 新築
山王遺跡 (第225次)	宮城県多賀城市南宮字町1番14	042099	18013	38度 18分 07秒	140度 58分 19秒	20210413 ～ 20210511	158.57m ²	個人住宅 新築
山王遺跡 (第227次)	宮城県多賀城市山王字西山王8番1	042099	18013	38度 17分 49秒	140度 58分 29秒	20210528 ～ 20210701	119.24m ²	個人住宅 新築
山王遺跡 (第228次)	宮城県多賀城市南宮字町77番1	042099	18013	38度 18分 04秒	140度 58分 19秒	20210608 ～ 20210719	233.1m ²	個人住宅 新築
山王遺跡 (第229次)	宮城県多賀城市南宮字町77番1、77番2、77番3	042099	18013	38度 18分 04秒	140度 58分 19秒	20210728 ～ 20210907	147.11m ²	宅地造成
山王遺跡 (第230次)	宮城県多賀城市南宮字町81番1、学 伊勢202番12	042099	18013	38度 18分 07秒	140度 58分 20秒	20210720 ～ 20210922	144.95m ²	個人住宅 新築
山王遺跡 (第231次)	宮城県多賀城市南宮字町81番1、学 伊勢202番4	042099	18013	38度 18分 07秒	140度 58分 20秒	20210720 ～ 20210922	50m ²	個人住宅 新築
山王遺跡 (第232次)	宮城県多賀城市南宮字伊勢207番2の 一部	042099	18013	38度 18分 06秒	140度 58分 23秒	20211005 ～ 20211022	30m ²	宅地造成
山王遺跡 (第234次)	宮城県多賀城市山王字山王二区144番 地	042099	18013	38度 17分 49秒	140度 58分 26秒	20211018 ～ 20211102	170m ²	宅地造成
山王遺跡 (第235次)	宮城県多賀城市南宮字町92番の一部	042099	18013	38度 18分 05秒	140度 58分 14秒	20211119	26.65m ²	個人住宅 新築
山王遺跡 (第237次)	宮城県多賀城市南宮字八幡地内	042099	18013	38度 18分 07秒	140度 58分 40秒	20220208 ～ 20220209	45.89m ²	排水路整備
市川橋遺跡 (第101次)	宮城県多賀城市城南二丁目6-9	042099	18008	38度 17分 47秒	140度 59分 21秒	20210726 ～ 20210908	59.22m ²	個人住宅 新築
高崎遺跡 (第129次)	宮城県多賀城市高崎三丁目35番7、 139番4、541番	042099	18018	38度 17分 37秒	140度 59分 49秒	20210927 ～ 20211006	28.5m ²	宅地造成
野田遺跡 (第6次)	宮城県多賀城市留ヶ谷二丁目87番地 他14番	042099	18023	38度 18分 15秒	140度 60分 14秒	20210615 ～ 20210813	1600m ²	樹木抜根工 事
遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
山王遺跡 (第226次)	集落・都市・ 屋敷	奈良・平安・ 近世	井戸跡、溝跡	土師器、須恵器、須 恵系土器、陶器、木 製品、埴製品、古錢				
高崎遺跡 (第127次)	集落							
東田前遺跡 (第9次)	集落							
小沢原遺跡 (第21次)	散布地							
留ヶ谷遺跡 (第10次)	散布地							

新田遺跡 (第151次)	集落	奈良・平安	溝跡		
新田遺跡 (第152次)	集落				
新田遺跡 (第153次)	集落	奈良・平安	小溝群		
新田遺跡 (第154次)	集落・屋敷	奈良・平安	小溝群	土師器、須恵系土器	
新田遺跡 (第155次)	集落・屋敷	奈良・平安	土坑、小溝群	土師器、須恵系土器	
新田遺跡 (第157次)	集落	奈良・平安	溝跡	須恵器	
新田遺跡 (第158次)	集落				
新田遺跡 (第159次)	集落	奈良・平安	溝跡		
新田遺跡 (第161次)	集落				
山王遺跡 (第225次)	集落・都市・屋敷	奈良・平安・近世	溝跡、柱列	陶器、磁器	
山王遺跡 (第227次)	集落・都市・屋敷	奈良・平安・中世	区画溝、井戸跡、掘立柱建物跡	土師器、須恵器、須恵系土器、陶器	
山王遺跡 (第228次)	集落・都市・屋敷	奈良・平安・近世	土坑	土師器、須恵器、瓦、陶器、石製品、古銭	
山王遺跡 (第229次)	集落・都市・屋敷	近世	土坑	須恵器、土製品、陶器、磁器	
山王遺跡 (第230次)	集落・都市・屋敷	近世	溝跡	土師器、須恵器、瓦、陶器、木製品	
山王遺跡 (第231次)	集落・都市・屋敷	奈良・平安・中世・近世	土坑		
山王遺跡 (第232次)	集落・都市	奈良・平安・近世	北2道路跡	須恵器	
山王遺跡 (第235次)	集落・都市				
市川橋遺跡 (第101次)	集落・都市	奈良・平安	東1道路跡	須恵器	
高崎遺跡 (第129次)	集落				
野田遺跡 (第6次)	集落	古代	堅穴建物跡、小溝群	土師器、須恵器、瓦	

要約	山王遺跡第226次調査では、古代の井戸跡や近世の溝跡を発見した。
	高崎遺跡第127次調査では、年代不明のピットを発見した。
	東田中窪前遺跡第9次調査では、遺構や遺物は発見できなかった。
	小沢原遺跡第21次調査では、遺構や遺物は発見できなかった。
	留ヶ谷遺跡第10次調査では、遺構や遺物は発見できなかった。
	新田遺跡第151次調査では、古代の溝跡を発見した。
	新田遺跡第152次調査では、遺構や遺物は発見できなかった。
	新田遺跡第153次調査では、古代のピットや小溝群を発見した。
	新田遺跡第154次調査では、古代の畑の歴跡と考えられる小溝群等を発見した。
	新田遺跡第155次調査では、古代の小溝群や土坑を発見した。
	新田遺跡第157次調査では、古代の溝跡やピットを発見した。
	新田遺跡第158次調査では、遺構や遺物は発見できなかった。
	新田遺跡第159次調査では、古代の溝跡を発見した。
	新田遺跡第161次調査では、遺構や遺物は発見できなかった。
	山王遺跡第225次調査では、古代の溝跡やピット、近世の柱列やピットを発見した。
	山王遺跡第227次調査では、古代の区画溝や柱穴、中世の井戸や掘立柱建物跡を発見した。
	山王遺跡第228次調査では、古代のピットや近世の土坑、ピットを発見した。
	山王遺跡第229次調査では、近世の土坑、ピットを発見した。
	山王遺跡第230次調査では、近世の溝跡を発見した。
	山王遺跡第231次調査では、古代から近世と考えられる土坑等を発見した。
	山王遺跡第232次調査では、古代の多賀城南面の道路網のうちの北2道路を発見した。
	山王遺跡第234次調査では、古代の溝跡や土坑を発見した。
	山王遺跡第235次調査では、遺構や遺物は発見できなかった。
	山王遺跡第237次調査では、遺構や遺物は発見できなかった。
	市川橋遺跡第101次調査では、古代多賀城南面の道路網のうちの東1道路西側溝a期や小溝群、土坑を発見した。
	高崎遺跡第129次調査では、遺構や遺物は発見できなかった。
	野田遺跡第6次調査では、北区では古代の小溝群、南区では竪穴建物跡等を発見した。

多賀城市文化財調査報告書第152集

多賀城市内の遺跡 2

— 令和3年度ほか発掘調査報告書 —

令和4年3月26日発行

編集 多賀城市埋蔵文化財調査センター
宮城県多賀城市中央二丁目27番1号
電話（022）368-0134

発行 多賀城市教育委員会
宮城県多賀城市中央二丁目1番1号
電話（022）368-1141



この出版物は、環境にやさしい
「植物油インク」を使用しています。